に相違ないものと見るのである。玆に『社會の發見』が與つて重大な關係を持つことゝなる。『社會』の存在を十分意識しない時代にあつては、國家に歸屬しない事項は之を「個人」に歸屬せしめる外はない。然し「個人」に歸屬せしめ得ないことも必ずある。然る場合…國家に一括する能はず、個人に分割し能はざる此等の異例的現象は之をあげて『社會的』現象なりとするに至る。」（一一—一四頁）

然らば國家とか社會とか云ふ共同生活の意義は如何であらうか。

「個人の生活は此の共同生活なくしては永久に釋けざる矛盾である。…個人の生活の矛盾を釋き之を充實し、之を醇化するところの共同生活は、其れ自ら一の人格生活でなければならぬのである。」（五一頁）

「人格とは、此の自決的の、獨立の意思あり、さうして其の意思の發現である獨立自在、獨立自決の行爲をなす主體を云ふのである。然らざるものは、人格として缺陷のあるものであり、又は非人格である。」（五三—四頁）

「人類の存在の本義は、此の個人々々の生活と、國家、社會の生活とが合致することにある。」（五八頁）

「物格に對する權利の總體、即ち國家によつて各人の保障せられた支配物の全體は財產で、之は國家の直接なる擁護、保障の下に立つ。人格に對する權利の總體、即ち國家によつて間接に財產所有者に保障せられる支配人格の全體は即ち狹義に云ふ『勞働』である。」（一〇五頁）

「生活は運動を意味する、人格生活の運動は、人格性と非人格性との戰鬪である。」（一〇八頁）

「社會とは、一切の人格鬪爭、生活鬪爭の總名稱であり、國民經濟とは其の最要部を占むる經濟生活鬪爭の總名稱である。」（一〇九頁）

以上の拔萃に依つて大體博士の云はんとするところを知り得ると思ふ。一方勞働絞取の現象を是認し、社會に於ける鬪爭を肯定する博士は、他方國家否定を拒む者である。然らば更に如何なる點よりして博士は社會政策なるものを樹立さるゝのであらうか。即ち、

「今日迄の現實に就て定義を下せば、國家とは支配關係に滿足する限りの人格對非人格の調和——之を假りに强制調和と名づけて置く——の實現せられて居る共同生活であり、社會とは之に滿足せざる鬪爭對抗の共同生活なりと云はればならぬ。社會政策は之に滿足せざる鬪爭、對抗の共同生活を出來る丈け廣汎に國家容器に包擁せしめやうとする政策の謂であると云つて差支ない。」（一二六—四頁）

斯の如く國家を解することは單に前揭の二種の議論、——鬪爭國家觀と國家至上主義の中間をゆくものとのみ見得るであらうが、寧ろ共同生活を出來る丈け廣汎に國家容器に包擁せしめやうとする政策を是認せらるゝ點より見れば、寧ろ後者に近いものと云へないだらうか。故に博士は極力ギルド社會主義を排斥して、無政府主義の極めて微溫的なるもの、若しくは假面を被れる穩和的無政府主義であると云ふ可きものである。（四一八頁其他）然し本書に現れた所を以つてしては、未だ吾人に十分の滿足を與ふるものであるとは云へない。博士は「國家の外圍をして彈力性に富むものたらしめ、出來る丈け十分に共同生活の鬪爭を廣汎に其の內に包擁するを得せしむること」が社會政策第一の本領であるとして居るが、斯くの如くして形成された國家の形成は果して如何なるものであらうか。此點に就いて博士の所論は未だ吾人に明白な觀念を與へて居るものとは云へないだらう。勿論本書に示されたところは博士自ら云はるゝ言葉に依れば、「ホンの見本に過ぎないものである。」（序三頁）從つてそれ等の點に就いては今後に於ける博士の勞作を俟たねばならぬ。尙ほ吾人は「社會主義が誤りて敎へつゝある所を正しく敎ゆるもの」として社會政策の具體的方法に就いて、——それが博士が「極力排斥」する所謂協調の政策と嚴然區別するが爲めに、鬪爭の壓迫にもあらず、又一時的調和にもあ

らざる方法手段を指示さるゝことを希望する者である。讀過匆々にして筆を採り、博士の眞意を誤り傳へることなくば幸である。」

◉我　等（第四卷第三號　大正十一年三月發行）

福田博士の『資本增殖の理法と資本主義の崩壞』に就て

河　上　肇

A　福田博士の『資本增殖の理法と資本主義の崩壞』と題する論文を讀んだか？

B　つい近頃讀んだ。

A　あれは昨年十月及び十一月の『改造』に連載されたものだが、それをつい近頃になつて始めて讀んだと云ふやうな事では、君の不勉强も想像されるね。

B　さうだ。僕は不勉强を宗旨としてゐる。

A　學問で飯を食つてゐる人間が、それでは困るね。

B　君は困るか知らないが、僕は困らない。

A　つむじまがりの事を言ふね。ところで其の不勉强家が、どうして近頃になつて、あの論文を見たのだ？

B　それは『我等』の新年號の『最新學說の紹介』とか云ふところに、小泉信三氏があの論文を、昨年度の經濟學界に於ける最大の收穫の一つとして紹介されたので、それなら是非讀んで置かねばなるまいと思つて、急に友人から借りて、一讀再讀した。

A　學者といふものは、何んでも最新のことを世間に吹聽して手柄にするのが職務だと云ふやうに聞いてゐるが、君は學問で飯を食ひながら、自分の畑のものでも、他人に注意されて、やつと氣が附くと云ふ調子なのか？　隨分心細い話だね。

B　さうだ、可なり心細い方だ。しかし僕には僕の仕事があつて、その仕事の方へ餘計も無い精力を集中してゐるから、他人の書くものを手つ取早く、後から〳〵と讀んで廻つてゐる餘裕がないのだ。そんな事をしてゐると、他人にばかり引き廻はされて、自分の持場は留守勝ちになる。馬鹿々々しい話だと思ふから、どんな偉い學者の書いたものでも、差當り自分の研究してゐる事に當座の關係が無い以上、先づ見ない事にしてゐる。雜誌へ出たものは、何れは又論文集に纏められるだらうから、必要に應じてゆる〳〵拜見することに度胸を決めて居る。

A　可なりずぼらだね。

B　甚しくずぼらさ。しかし如何にずぼらでも、『我等』の紹介に驚いて、直ぐにあの論文は一讀再讀したよ。

A　讀んでどう思つた？

B　イウイなるビユウロンだと思つたね。

A　何んだ？　イウイなるビユウロンとは？

B　イウは英雄の雄、イは偉人の偉、ビユウは誤謬の謬、ロンは論語の論さ。

A　失敬なことを言ふね。福田博士の蘊蓄は世既に定評がある。此の博士が書いたもので、殊に信賴すべき小泉氏の裏書あるものを、一概に謬論と言ふのは、受取れぬ話だ。

B　だから僕は『雄偉なる』と云ふ形容詞を附けてゐる。マルクスを中心として、古くは何千年の昔の希臘の大哲アリ

ストテレスの政治學を引用し、近くは露西亞のツガン・バラノウスキーや獨逸のリーフマンなどを引用して、結構の雄大を極めてゐる。だから僕は許すに雄偉を以てするけれども、議論の筋は大間違に間違つてゐると思ふから、之を名づけて謬論と爲さゞるを得ぬ。學問を商賣にしてゐるからには、無暗にお世辭を言ふ譯にも行かぬからね。

A　それなら其れで一應よろしいとして、何故之を以て謬論とするか、その理由を説明し給へ。

B　面倒だから其れはよさうでは無いか。僕は二月中旬發行の『社會問題研究』に『資本主義的生産の眞相』と題する論文を載せた。その中には、福田博士の件の論文に論じ及んで置いた所もあるし、猶ほ今後機會があつたら、特に博士の議論を主題にして、僕の見る所を述べようかとも思つてゐる。若し僕の意見が聞きたいなら、その方を讀んで呉れ給へ。

A　意氣地のないことを言ふね。福田博士の論文を見ると『河上博士がもし、其の一代の名著「貧乏物語」の着想をマルクスの右の研究に立脚せられたなら、必ずしも「貧乏物語」の絶版を急に決行せられる必要はなかつたであらう誠に惜しいことをしたものである』とも書いてある。又『資本主義の自己消費は無論著しく增大した、然し生産額の資本化、生産要具化の割合の增大には遠く及ばない。――此點に於てウキザース並に河上博士が資本主其他の奢侈品消費の減少に甚だ重きを置くことの、殆んど赤手海水を汲む底の事たること、疑を容れまい……』といふような文句もある。自分の説を批評されながら、急いで其れに答辯するほどの元氣も無いのか？

B　さうだ。先づ其の元氣に乏しい方だ。とくに絶版した著書の批評が偶々一二言挿入しあつたとて、さう慌てゝ辯解するにも當らないと思つてゐる。

A　意氣地の無い奴にも困るね。しかし既に博士の論文を以て『雄偉なる謬論』だと口を切つた以上、その理由を説明しなければ、僕は歸らないぞ。

B　歸らないと言へば仕方が無い、簡單に要領だけを話すとしやうよ。ところで、話をするについては、先づ福田博士の主張の要點が何處にあるかを、一應決めて掛らればならぬ。どう云ふのが博士の主張の要點だ？　先づ君の方から其れを提示し給へ。

A　實は僕には能く分かつて居らんのだ。君が言ふ通り、結構雄大を極めてゐる上に、時とすると、此點は『讀者直ちに氣が付くことであらう』とか、此點は『經濟學を學ぶ人の誰も熟知する所である』とか云ふ類の文句に出會ふが、僕は讀んでゐて實は直ちに氣が付かなかつたり、經濟學も多少學んだ積りでゐるのに、さほど熟知してゐなかつたりするので、自分でしよげて仕舞ふのだ。しよげると、惡い頭が一層鈍くなつて、何が書いてあるのか、たうとう分らん事になる。

B　あはれな頭だなあ。そんな頭を肩に載せてやつて來ながら、僕と議論しようなどといふのは、甚しく僕を見くびつた譯だね。

A　さう勢に乘じてものを言ふものでは無い。何んでも可いから、君が考へて、博士の論文に誤謬があると思つてゐる點を大體話して呉れ給へ。

B　博士の意見は大體かうさ。――資本主義的生産組織の下で、貨物の生産が消費のために制限せられゐると思ふのは間違だ。資本主義の下では、總ての商品は賣るために生産されるのだから、買手（卽ち需要）さへあれば、物の生産は何の故障も無く行はれて行く。ところが此の組織の下では、資本家によつて資本の增殖が際限なく行はれて行き、その結果生産財（機械等）に對する需要も際限なく增加して行くから、一般勞働者の消費する生活必要品（衣食の類）や資本

家の消費する奢侈贅澤品やに對する需要は、たとひ減退することが有つても、それは大した故障にはならぬ。資本家の所謂資本化、生産要具化が際限なく行はるれば、それによつて生ずる所の生産要具の需要に應ぜんがため、生産は際限なく擴張して行く。だから河上がツヰザースの口眞似をして『資本主其他の奢侈品消費の減少に甚だ重きを置く事の、殆んど赤手海水を汲む底の事たること』は疑を容れない。『資本主の自己消費（その大部分は奢侈品に向けらるゝ）は無論著しく增大した。然し生産額の資本化、生産要具化の增大には遠く及ばない。…マルクスの所謂擴張再生産は無限に增大して行く。人間の消費の代りに、物の蓄積が限界なく擴張して行く』『勞働者の消費不足（アンダー・コンザンプション）は事實であつても、事實でなくても、此點に何等の關係はない。』『消費より來る制限の如きは、痕跡だも之を認めることが出來ないのである。』――かう云ふのが、福田博士の主張だ。

A　ところで、その何處が間違だと言ふのか？

B　勞働者も消費せず、資本主も消費しない所の、生産要具（例へば機械の類）が、際限なく增加されて行く、と論じてある所が、根本的に間違つてゐると云ふのだ。

A　何故？

B　何故と言へば、資本家は其の巨大な所得を全部奢侈品に消費するのでは無く、その大部分は之を資本化して行くのに相違ないし　又それを資本化するがためには、之を以ていろ／＼な生産要具を買ひ入れるには相違ないが、しかし其等の生産要具は、それ自身としては何の意味もないもので、それは直接又は間接に、何等かの享樂財（勞働者等の消費する生活必要品・資本家等の消費する奢侈贅澤品）を作り出す爲の手段となるものである。例へば織物機械にしても、それは織物を作る爲めの機械だ。福田博士は資本家が其の所得を資本化するために、『物の蓄積が限界なく擴張して行く』と言つてゐられるが何處の國へ行つて見たとて、只織物機械を際限なく蓄積して悦んでゐる資本家はゐない。彼等が此等の機械を買ふのは、之によつて織物を作らんがためだ。さうして其の織物を作るのは、之を賣つて儲けんがためだ。だから窮極のところ、織物を買ふ人が無ければ、資本家は織物機械を買入れはしない、たとひ買入れたからとて、それは庭の飾物として奇怪な奢侈品になるだけで、決して資本化されはしない、資本化されるのは、それに依つて織物を作り、又その織物を賣ることによつて儲けるからだ、だから織物を買ふ人が無ければ、織物は生産され得ず、又織物が生産されなければ、織物機械は用をなさない。さうして用をなさない織物機械である以上、それは際限なく蓄積されて行く氣遣はない。だから『消費より來る制限の如きは、痕跡だも之を認めることが出來ない』といふ福田博士の議論は、甚しい間違だと言ふのだ。

A　福田博士がそんな簡單な道理を思ひ違へられる筈は無い。それは恐らく君が博士の說を誤解してゐるのだらう。

B　さう思ふだらうと豫想したから、僕は先づ君に、博士の議論の要領はと尋ねたのだ。ところが君には、それがはつきり分らないと云ふのではないか？

A　さうだ。僕には能く分らぬが、君が言ふやうだと、餘りに簡單な誤解なやうだ。そんな簡單な誤解を主張するために、博士があれだけの長文を草して、アリストテレスまで引合に出して來られたと云ふことは、少し解し難い事ではないか？

B　簡單な誤解を、如何にももつともらしく讀ますためには、アリストテレスも要る、マルクスも要る、ツガン・バラノウスキーも要る、リーフマンも要る、樣々な道具立てが要る、自然長篇に亙らざるを得ぬでは無いか。

A　それなら君は、博士が故意に人をだますために、あの論文を書かれたと言ふのか？

B そんなことは考へてゐない。博士自ら自分をだまされたのだと思ふ。昔から長袖よく舞ひ多錢よく買ふとか言ふが袖もあまり長が過ぎると、自分が舞ふ代りに、袖に舞はれて仕舞ふ。無い袖は振られぬが、長い袖は捲きつく。僕は博士の博學、却つて自明の理を觀るの妨げとなつたものと思ふ。

A しかし其れにしては、餘りにあつけない。何かもつと理窟がありさうなものだ。

B だから僕は『雄偉なる謬論』と言つてゐる。極めて簡單な誤解が、雄偉な結構を以て眞理化されてあるのだ。それは資本家の所得が生產要具によつて資本化されるよりも、なほ複雜な行程を經過することを要するものかも知れない。しかし僕が言ふこと以外に、もつと理窟があるに相違ないと思ふなら、さう思つたつて僕は爭ひはしない。今度は僕の無學が、博士の論文に包含されてゐる許多の眞理を解するの妨げと爲つてゐる、と云ふことにして置いても差支ない。

A 君を無學にしては話が續かなくなる。餘り謙遜すると厭味になるさうだから、謙遜は控へて、もつと話を續け給へ。

B もう話は濟んだぞ。

A さうでもない君が言ふような簡單な誤解を、福田博士や小泉氏がして居られるとは、僕にはどうしても合點が行かぬのだ。も少し其の點を說明してくれないか?

B 相變らず僕に對する不信用の繼續か。それでは今少し話を續けよう。先程は簡單に只織物機械の例を取つたが、實は今日の社會では、物――例へば織物――の生產行程は複雜ないくつもの階段に分れてゐて、それが又別々の資本家により獨立の企業として行はれてゐるので、誤解を誘ふ現象はいくらでもあるのだ。例へば織物について考へて見ても、その織物の生產に必要な所謂固有の生產手段(勞働力を除く)の中には、主要原料としての絲があり織物機械があり、工場の建築物があり、又織物機械を運轉するに必要な補助材料としての石炭などがある。ところが生產手段となるべき此等樣々の者は、今問題にしてゐる織物業者以外の、他の資本家的企業者の生產してゐる商品なのだ。織物業者といふ一個の資本家的企業者は、他の種々なる資本家的企業者から、彼等の生產する商品(卽ち絲・機械、建築石炭等)を買入れて、それを生產手段として利用するのだ。ところが更に織物の原料たる絲について考へて見ても、矢張り之と同じことで、その絲の生產に必要な生產手段の中には、主要原料としての綿があり、紡績機械があり、工場の建築物があり、機械を運轉するに必要なる補助材料としての石炭等がある。さうして此等の物が又、問題にしてゐる紡績業者以外の、他の資本家的企業者の生產してゐる商品だ。くどくなるから是れ以上は遡らぬが、要するに斯樣な譯であるから、直接消費者の買ふものは織物に限られてゐて、其の他のものは、原料たる絲であれ、綿であれ、石炭であれ、又工場であれ、機械であれ、皆な資本家的生產者によつて買取られて行くのだ。そこで一寸考へると、直接消費者の需要は增加しなくても、資本家的生產者が其の所得を資本化し生產手段化することにより、資本の增殖、生產の擴張をさへやつて行けば、生產手段たるべき商品(機械其の他)に對しては、無限の需要がある譯であり、さうして需要(卽ち買手)さへあれば、資本家的生產は何の故障もなく行はれるのであるから、『消費より來る制限の如きは痕跡だも認め得られないのである』と云ふような考が、浮び得るのである。又實際のところ、たとひ織物の消費は殖えなくとも、織物機械の需要さへ增加すれば、機械の製造に從事する資本家は、何の故障もなく其の生產を擴張して行けるのである。しかし織物業者が織物機械の需要を增加したのは、之によつて從前よりも多くの織物を生產して、之を消費者に賣り附けんが爲であるので、もし其の目算が外づれ、工場の擴張や据附機械の增加が度に過ぎてゐた事を發見するならば、その時に機械の一部は運轉を中止する、さうして新たに機械を買入れやうとしなくなる。しかるに彼等が機械を買はなくなれば、機械製造業者も引續き其の生產を擴張することが出來なくなる。斯樣にして順次一切の生產階級に其の影響を波及し、何れかの階級

に於て『放資過剩』の現象を惹き起すのである。けれども其れは恐慌の場合に眼に附くことで、平生各生產階段の連絡が無事に取れて居り、各生產階段に於ける生產の擴張、資本の增殖が、直接消費者の需要の增大と適當な連絡を失はぬ限りに於いて行はれて居る。と云ふことであれば、直接消費者の需要する貨物の外は、たとひ直接消費者の購買力は增加しなくとも、資本家の所得の資本化のため、その生產は何の故障もなく無限に行はれて行くように見えるのである。そこで福田博士の『消費は彌々減ずるも、生產は彌々擴大して、資本制生產には何の故障が起らないのである』といふ議論が出るのだ。

A　君の話は一通り分かつた。しかし福田博士の論文には、ツガン・バラノウスキーの著書から精細な數字表が引用されてゐて、それを見ると、明白に『消費は彌々減ずるも、生產は彌々擴大して』行けるやうに見えるが、あれは何うしたものか？

B　手許はツガン・バラノウスキーの本が無いので、只今委しい事は分らぬが、博士の引用して居られる所を見ると、それは第一年度から第三年度までの事になつてゐる。ところが斯んな短い期間では、事實消費は增加しなくとも生產は擴大され得るのだ。何故といふに、例へば汽船といふような固定的の資本になると、隨分長期に亘つて使用され得るものだから、將來其れに相當するだけの長期に亘つて需要が增加して行けば、差當りは直ちに增加しなくとも、暫くは差支が起らないのである。しかし此等の點を委しく說明するとなると、話が大分面倒臭くなつて、矢張り博士の論文と同じ位の長篇を草しなければならなくなる。それは他日の機會に果さうと思ふから、今日は預けて置いて呉れ給へ。

A　それではさうしやう。

B　では、今日は忙しいから、もう歸り給へ。

◉無產階級（第一卷第二號 大正十一年五月發行）

階級闘爭說に對する福田博士の所見を難ず

A　今直きに歸るが、一寸これだけ讀んで行かう。福田博士の論文には、次のやうな文句があるぞ。……『資本制生產に於ける、資本の形成と生產の擴張とは、直接消費の大小とは獨立に行はれ得、又現に大いに行れて居ると云ふことが其の本質であるので、アリストテレースの所謂不自然的なる無限經濟は、資本制生產に於て、其の絕好の代表者を見出すものである。斯く見てこそ、マルクスの周到にして破天荒なる循環行程に於ける資本再生產の理論は、學問上の大收穫となり得るのである。然るに、不思議にも、マルクスは、其業を半ばにして止め、此の當然の論結に至る前、俄かに論步を間道に踏入れ、其再生產理論とは兩立せざる資本主義內在矛盾論に墮して仕舞つたのである。此は實に惜みても猶餘あることである云々。』

B　それは僕も讀んだから知つてゐるが、それが何うだと云ふのだ？

A　これほどの見識を以てマルクスを惜んで居られる博士が、君が言ふやうな一溜りもない誤解の上に、その堂々の論陣を張つて居られるとは、僕には如何にしても合點が行き兼ねる。

B　また同じ事を言ひ出した。そんなに僕の議論に信用が置けぬなら、歸つてもう一度博士の論文を熟讀し見給へ。

A　さうだ。君の說の大略は心得たから、これから歸つて博士の論文を熟讀するとしよう。

B　それが可い〱。

F.V, 36.

階級鬪爭說は、唯物史觀を適用して、過去及び現在の歷史進行の發現形態を決定し、更に進んで、勞働運動の將來を規定したものであるから、極めて重大なる意義と職能とを有するものである。かゝる重大なる職能を有するものであるに關らず、乃至はかゝる重大なる職能をするのであるが故に、階級鬪爭說は、從來種々なる理由の下に、或は疑問とせられ、或は虛構とせられて、マルクス說にあつて尤も非難の多いものである。日本に於いても、この薄幸なる階級鬪爭說は、福田博士によつて一部承認の恩惠に浴したとは言へ、同じくその福田博士において、意地惡き非難者を發見したのである。

福田博士は、昨年七八九月に亘つて「改造」に連載し、その近著「社會政策と階級鬪爭」の第二編に編入した「階級鬪爭當事者としての雇傭所得と資本所得」なる一文に於いて、階級鬪爭說に非難を加へて、大體次のやうな所見を公にしてゐる。――マルクスの階級鬪爭論は、其唯物史觀の產物なりと稱せられてゐるが、仔細に吟味して見ると、現在より將來に至る發展に就いては兎も角として、過去より現在に至る經過に就ては、決してさうで無く極めて非歷史的な一の獨斷論である。マルクスが階級鬪爭の歷史的叙述を試みたものは、唯一の「共產黨宣言」あるのみで、其外には「資本論」「哲學の窮乏」の二書中に若干の斷片的發言を散見するのみである。されば從來の歷史は何れも階級鬪爭の歷史であつたとは立證せられざる主張である。一步を讓つて言つても、階級鬪爭觀に運用せられた唯物史觀なるものは倒叙的逆進的史觀である。今日の社會は儼存する雇傭勞働對資本の階級鬪爭の事實を拉し來つて、之を逆まに過去に溯らしめたものであつて、順當に過去から現在に至る實際人類史を尋繹した結果では斷じて無い。然るに之を一の史的發展法則の地位に押上げて、將來に向つてその妥當性を必然的進化史的に有するものとして、マルクスがゴータ綱領批評中に、「ブルヂヨア的生產關係は、社會生產行程の對抗的形態の最終のものであつて、階級鬪爭は此のブルヂヨア社會に於いて、最終まで戰はれ盡さる可きものである」と豫言し、之に基いて、勞働運動に其標的と其目的を與へ、其性質を特色付けようとするのは學問上何等の根據を有せざることであり、從つて此意味に於ける階級鬪爭の統一化、國際化、組織化は、我々實證主義の學問の上に立つ者に對し、何等の權威を有せざる主張であり、推論であると云はればならぬ。倒叙史觀に基いた階級鬪爭將來觀は、學問的實證の前には、煙の如く消え去る可き運命を有する外ないものである。現在の階級鬪爭の事實を事實として認めることマルキシストと全く同じき我々が、其發展傾向に就て、全く異る見解を取る理由は玆に存するのである、――

福田博士が學者的立脚地を要諦とする實證主義の學問なるものが、果して如何なる底のものなりやは、玆で私の問ふところではない。マルクスの階級鬪爭說が、唯物史觀の社會組織變革觀の脫化として、在來の歷史に於いて果して立證されないものであるかどうか。將來の勞働運動の標的を與へるものとして、階級鬪爭將來觀は、煙の如く消え去る可きものかどうか。私の玆に論考せんとするところは是である。

マルクスは經濟學批評序文中の所謂唯物史觀の公式の末段に於いて、

「極めて大體を論ずれば、吾人は亞細亞的、古代的、封建的、及び現代の資本家的の生產方法を以つて、社會の經濟的組織の進步の階段と爲すことを得る。而して此の中資本家的の生產關係は、社會的生產方法の對抗的形態を採れるものゝ最後である。――玆に對抗的とは、個人的對抗の意では無くて、個人生活の社會的條件から生ずる對抗の謂ひである――而して資本家的社會の母胎內に發展した生產力は、同時に此對抗の解決に必要なる物質的條件を作る。されば、人類の歷史の前史は此の社會組織をもつて終りとする」

と述べてゐる。

之を以つて見ても分る通り、マルクスは從來の歷史に於いては、その經濟組織は對抗的形態を採つてゐたと見、資本家社會組織をその最後の形態だとしてゐる。卽ち言ひ換へて見ると、從來の歷史の經濟組織は階級對立を基礎として成立ち、發展して來たといふのがマルクスの見解である。勿論其階級對立が時代によつて異ることは、「古代世界の階級鬪爭は主として債權者と債務者との間に於ける鬪爭の形に於て行はれ、羅馬に於ては、此鬪爭は、債務者たるプレベーア滅亡して、奴隷之に代るに至つて終熄した」「中世に於ては、此鬪爭は封建的債務者が其政權と經濟的基礎とを失つて滅亡するに至つて終熄した」と云ふ福田博士の所謂斷片的といふ「資本」中の說明に依つて明らかである。

マルクスの階級鬪爭說が、右の從來の歷史に對する對抗的經濟組織の見解を基礎として、之に唯物史觀中の社會組織變革の理法を適用し、要するに凡ての過去の歷史は階級對立の歷史であるとしたものなることは言を俟たない、更に進んでマルクスの唯物史觀は、歷史に於けるダイヤレクチックの要素に重きを置き、社會組織の變革が無くては歷史はない（一）と見たものであるから、一切の歷史を以つて階級鬪爭の歷史と言つたものなる事もまた多く說明を要せぬ所以である。

之を要するに、法律、論理、宗敎、國家、哲學、藝術その他諸般の人類文化は、歷史の時代を異にする每に異なるは、記錄的歷史のよく證明する所である。然し乍ら唯物史觀はこれらのものを根本的の社會組織の基礎とは認めず、その基礎構成は社會的生產關係であるとしたのであり、社會的變革はその基礎構成の變革に應ずるとしたのであるから、右の上部構成に如何なる時代相があるとしても、歷史の眞の內容は基礎構成に在るのであつて、その基礎構成が階級對立を特質としたる經濟關係であるならば、こゝから直ぐにその全歷史は階級對立、乃至は、階級鬪爭の歷史であると云つてよい譯である。

この場合にあつて、階級鬪爭說の成立の爲めに重大なることは、從來の經濟組織が凡て對抗的形態を採つてゐたと云ふ、卽ち對抗經濟關係であつたといふ一事である。この一事の證明さへ成立すれば、唯物史觀の社會組織變革觀から見て、階級鬪爭觀は成り立つのである。繰返して言ふが、福田博士が學問的權威の爲めに振廻はす實證主義の硏究法とは如何なる底のものか知らないが、また知らうとも思はないが、階級鬪爭說が唯物史觀の上に眞に論理的に（故に學術的）打ち樹てられるためには、この一事が明白になればそれで足りるのである。所謂歷史的敍述を精細に行ふことは必ずしも不必要と言ふのではない。然しそれが無いとしても、階級鬪爭說が全然非歷史的の獨斷論であるとは斷じて云へぬのである。對抗的形態の時代相の如何は必ずしも問ふ所で無く、對抗的であつたといふ事實的基礎が確立すれば、皮相なる見解に於いて、變革がいかなる影となつて見へやうと、依然として階級鬪爭の根本理法を認めねばならぬのである。マルクスはたゞ何の根據もなくして、階級鬪爭觀によつて立つ所の、この一事を臆斷したものであらうか？マルクスがその階級鬪爭說の歷史的敍述を試みた唯一のものとされてゐる「共產黨宣言」のその歷史的敍述と看做される部分を一見しよう。

「凡て從來の歷史は（二）階級鬪爭の歷史である」との冒頭の一句を受けて、之が歷史的說明として次のやうに述べてゐる。

「自由民と奴隷、貴族と平民、領主と農奴、ギルド員と職人、一言で云へば、壓制者と被壓制者とは、古來相反目して、或は隱然の、或は歷然たる、絕えざる鬪爭、それは何時も、全社會の革命的變革をもつて、又は相爭ひつゝある諸階級の共倒れを以つてその局を結ぶ所の鬪爭を續けてゐる」

「歷史の諸の昔の時代に於いて、吾人は殆んど到る所に於て、社會が種々なる身分の者に全然區別され、社會的地位

多様の等差のあることを發見する。古代羅馬では、貴族、騎士、平民、奴隷があり、中世に於ては、封建諸侯、家臣、ギルド員、職人、農奴があり、なほ此等階級の殆んど各々に於て、更にそれぞれの等級があつた。」

「共産黨宣言」中の所謂歴史的叙述はこれだけで、このあとへ直ちに、近代ブルヂョア社會の發生し來たる經過を叙してゐるのである。これだけの間に、果して何事が叙述されてゐるであらうか。

マルクスは先づ、「自由民と奴隷」と對置して希臘の社會組織の對抗關係を示してゐる。——前に福田博士の主張を摘要した個所には省略したが、福田博士は不思議なことに、マルクスは羅馬及び中世以外には如何なる階級が存してゐたかすらも窮ひ知ることは出來ず云々と言つてゐるが、マルクスは希臘の對抗關係をチヤンと明記してゐる——次に「貴族と平民」とを對置して羅馬の社會組織の對抗關係を示し、更に次に、「領主と農奴、ギルド員と職人」と對置して中世の對抗關係を明らかにしてゐるのである。而して是等を一括して、マルクスは壓制者と被壓制者との關係に約してゐるのである。

マルクスにとつて肝要なのは、否、マルクスの階級闘争説の歴史的根據の上に必要とするのは、たゞそれだけなのである。マルクスにとつては、社會變革の唯物史觀的見地からすれば、希臘には自由民と奴隷があり、羅馬には貴族と平民があり、中世には領主と農奴、ギルド員と職人があり、卽ち、壓制者と被壓制者とがあり、その對抗關係が社會組織の基本であつたと云ふ事實だけて澤山なのである。希臘の共和政體や寡頭政治の下においてそれがいかに現はれたか、羅馬の國家的推移においてそれがどう變つて現はれたか、それらは後人の研鑽に委せておいてよいことであつて、マルクスが「總ての歴史は階級闘争の歴史である」と、階級闘争説を樹てる上に於いては、マルクスとしては如上の概括的な史的事實で事が足りたのである。而してそれで事が足りる所以は、實は、唯物史觀中の社會變革觀にその本を發して

ゐるからである。

勿論、それらの對抗を仔細に見ると更にそれぞれの階級の等級はあつた。マルクスはその説明として前に引用したやうに、古代羅馬と中世における階級の諸等級を掲げて來、一方之を以つてブルヂョア社會發生の説明の前提として役立たせたものである。

かくの如くにして、私は、マルクスの説明は簡單を極めたものながら、階級闘争説をして非歴史的獨斷論と云はしめざる十分なる用意に成つてゐると見るものである。福田博士は、階級闘争説は立證されざる主張であると大見得を切つてゐるが、從來の歴史が壓制者と被壓制者との對抗關係の社會組織の繼起であつたといふことが、立證されざる事實で無い限りは、否、立證さるゝ歴史的事實である限りは、階級闘争説は福田德三博士の大見得あるに關らず、依然として立證され得る主張と云はなければならない。

福田博士は、マルクスの階級闘争説に運用された唯物史觀は倒叙的、逆進的史觀であるから、三文の價値もないと、いかにもブルジョア學者らしい形式論を、その「學術的權威」の爲めに、振廻してゐる。私は、それが倒叙的、逆進的であるとしても、何故に、學術的價値が無いか、その理由を發見するに苦しむものであるが、それはそれとして、階級闘争説に運用された唯物史觀を逆進的だと攻撃する以前に於いて、博士は何故に、マルクスの學術的説明の全部が、逆進的であると攻撃しないのであるかゞ、私には不思議に思はれるのである。

ソレルは、その上に學術的説明の樹立される諸現象は、最も新たに現はれたものであるといふのが、マルクス説中の一つの一般的原理で（三）ある、と言つてゐる。この事は、ソレルの注意を俟つまでも無く、「資本」のマルクス自身の

序文、特に第二版中の序文に明らかに示されてゐる所であり、マルクスがブルジョア經濟組織の説明として、當時尤も典型的な英國を選んだ事によつても明白である。マルクスは、當時に於いて一個の事實として現出した資本對勞働の抗爭を觀て、これを資本家經濟組織に內在する要素とし、その資本家經濟組織はその前代の經濟組織の發達階段とし、かくして次第に其發生原理に溯つて行つたのである。「これらの新事實（一八三一年リオンに於ける純粹勞働階級の反抗あつて以來の、無產階級とブルジョアの抗爭の事實）が現はれるに至つて、凡てのこれまでの歷史を新たに研究する必要が起つた。而してその結果、これまでの凡ての歷史に、階級鬪爭の歷史であつたといふ事、此等の相衝突する階級は一定時期に於ける生產分配の一定方法の、約言すれば、その時代の經濟條件の結果だといふことが明らかとなつた、卽ち、一定時期に於ける社會の經濟的構成が眞の基礎であつて、政治的、法政的、宗敎的、哲學的及びその他の一切の抽象觀念は、その基礎の上に立つて、説明されなければならぬと言ふことになつた、かくして觀念論は、その最後の避難所たる歷史哲學から驅逐され、唯物史觀の樹立を見た」とのアンチ・デユーリング中のエンゲルスの言を見ても分る通り科學的説明が必要とされ、その樹立を見るのは、最も新たに發生した事實の上に於いてであつて、その事實の説明の爲めに、歷史の革命的要素を尋れるのが、正に辯證法の行き方である。

始めから順を追つて尋繹しなければ、歷史進行の理法が説明されないとするが如き、粗雜なる考へ方をする博士にとつては、如上のマルクスの學術硏究上の一般原理が、やはり倒叙的、逆進的に見えなければならない。言ひ換へて見ると、マルクスの「資本」に考究されてゐる所は、資本家的經濟組織を孤立的に説明するものとしては兎に角として、資本家的經濟組織を歷史進行の發達階段として見れば、それは非歷史的獨斷的説明であると、博士としては總括的の大見得を切る可きところである。然し單なる形式論を得意とする博士にとつては、それが倒叙的とも見へやうし、然るが故に實證的でないとも言へやうが、辯證法的硏究方法を、歷史進行の過程と一致する（四）と見るマルクスにあつては、逆進乃至直進と云ふが如きは、何等問題とするに足らぬものである。

階級鬪爭説は唯物史觀の一適用だと云ふ。それは便宜上、マルクスのこの二つの中心を有する説を、別けて考へた上だけの事で、本質的の觀方を以つてすれば、寧ろこの二つの説には、必然的な關係が成立つてゐると見るのが至當である。唯物史觀の公式は「特に一定の時代を硏究する爲めの原則の提供を目的としたもので無く、諸文化の繼起關係が特に問題となつてゐるのであるから、そこには階級といふ言葉は一度も現はれてゐない。」（ソレル「進步の諸幻想」序文）然し唯物史觀の社會組織變革の理法に、一定の人間集團のエコノミカル・エヂエントが約束されてゐることは言ふまでもない事であつて、これを過去の歷史的の事實に對應させて考へると、階級鬪爭觀となる可きは寧ろ必然の理である。故に、唯物史觀を適用して、階級鬪爭觀を得たといふよりも、唯物史觀の社會變革觀を過去の歷史進行の具體的説明といふ方に中心をおいて、一個の獨立せるものとしたのが階級鬪爭觀であるとするのが至當である。階級鬪爭説と唯物史觀とを、右の如く見ないで、前者を後者の單なる一適用と見て仕舞ふと、やゝもすると福田博士の倒叙説の如き、畸形見がそこに產み落されるのである。

福田博士にしたがふと、マルクスは、さう云ふ非歷史的獨斷的の（福田博士の所謂）階級鬪爭説を、一つの史的發展法則の地位に押上げて、將來に向つて其妥當性を必然的進化史的に有するものとし、ブルヂョア生產關係は、社會的生產行程の對抗的形態の最終のものであつて、階級鬪爭は此のブルヂョア社會に於て、最終まで戰はれ盡さる可きもの」と豫言し、之に基いて勞働運動に標的を與へ、階級鬪爭の國際化を主張したと云ふ、この福田博士の手に入つた饒舌の裏には、福田博士がマルクスの階級鬪爭説を、一個の決定論と看做してゐるところの、重大なる知識的錯誤のあること

を見逃してはならない、マルクスは階級闘爭を以つて、歴史進行の革命的要素と見て、要するに過去の一切の歴史は階級闘爭の歴史であると見たけれども、この階級闘爭が必然的進化史的に、一個の自然法則の如く進行するものと見たのではない、彼はそこに常に儼たる人間的發展を見たことは爭ふ可からざる所である。唯物史觀が福田博士の誤解してゐるらしく、一個の決定論で無く、常に人間發意の推進力を約束してゐると同じに、階級闘爭も亦、自然法則の如くにして進むものでなく、「相爭ふ階級の共倒れ」に終らんが爲めに、レボリユショナリーな力を要望してゐるものである。此意味において、階級闘爭の統一化、國際化、組織化が、眞に勞働運動の標的となるのであつて、決して福田博士の豫言する如く、煙の如く消え去る運命を有するものではないのである。

「現在の階級闘爭の事實を事實として認めることマルキストと同じき」、實證主義者福田博士が、その「發展傾向」に就いて、マルキストと如何なる點に於いて見解を異にするかは、私はまだ詳にしないが、その實證主義者福田博士が、現在の階級闘爭の事實を認める點においてのみ實證主義者で、今日の生產の發達は最早や對抗生產關係を許さず、勞働階級闘爭の意志は巴里コンミユンの昔から階級對峙の絕滅にあり、その爲めにのみ先づ階級闘爭の支持を必要とするものなる事を認めぬのは、まことに不思議千萬と云はねばならない。

是等の謎は勿論、福田博士の一本槍たる社會政策において解かるゝものであらう。しかし玆ではその社會政策の如何なるものなるかは研究の外にある。たゞその社會政策なるものが、マルクスが協同生產に就いて云つたやうに、「欺僞と保蹄」（五）でなければ幸ひである。（靑野季吉）

（一）「之までの哲學者等は色々の世界觀を樹立したゞけである。けれども肝要なことは世界を變化する所である」（マルクス・フォイエルバツハ）マルクスは隨所にこの意味のことを述べてゐる。

（二）「凡て從來の歴史は」このマルクスの言をエンゲルスは「凡て有史以來の歴史は」と修正して所謂原始共產體をそこから除外した。福田博士はこれを非常な皮肉な意味で書き止めてゐるが、原始社會には剩餘生產物がなく、隨つて他人の勞働を盜んで喰ふ者も無く、嚴密な意味で生產でないのであるから、對抗經濟のある理はない、これを除外したとしてもダイヤレクチツクな要素としての階級闘爭に非常な影響を及すものではない。

（三）ソレル「進步の諸幻想」

（四）「自然はダイヤレクチツクの實證である。（中略）結局に就いて、萬物はダイヤレクチカリーに進行し、決して形而上的觀念に伴ふものではない。」エンゲルス「アンチ・デユーリング」

（五）マルクス「佛蘭西の內亂」

◉批　評（大正十一年六月號）

加田哲二

社會問題に關する論議の流行期は確かに去つた。流行の消滅は、その本體の絕滅を意味してゐない。否、流行期の經過は社會問題に關する論議の深刻化を語るものである。社會とか勞働とか云ふ名さへ附けば、どんな下らぬ本でも賣れた時代は、眞面目な研究者の出ない時だ。眞面目な研究は却つて流行期後に出づるであらう。まして社會問題そのものの解決には、その論議の流行によつては少しも貢獻されなかつたからである。社會問題の本質並にその解決法に關する

思索は寧ろ今後の冷靜なる研究に俟つべきである。

福田德三博士の「社會政策と階級鬪爭」はこの冷靜なる研究期における一產物である。この書はその形態上二部に分たれてゐる。第一部が社會政策序論であり、第二部が階級及鬪爭とその當事者である。博士は本書における自己の態度を約言して云ふ。

「我々の微弱な力を以て無限なる欲望を充さうとするには、必ず共同生活がなければならぬ。共同生活が發達すれば、共間から階級が起る。階級と階級との間には、自ら階級鬪爭が生ずる。今日に於る階級鬪爭は、資本所得階級と勞働所得階級との爭で其形は一方は雇傭懸引、他方は勞働爭議を以てしてゐる。社會主義も社會政策も、否一切社會と名の付く事は少くとも今日においては、此の形に於ける鬪爭を主題とするものである。然るに社會主義は、少くともマルキシズムの說においては、此鬪爭に關する唯物史觀として極めて樂觀說を持してゐる。卽ち此くの如き階級の對抗は資本主義がそれ自ら必然的に崩壞す可き運命を有するものであるから、之と共に、當然早晚消滅すべきものであると云ふのである。私の解する社會政策は此樣な樂觀に恥ぢぬものであつて、資本主義を以て、其自らに崩壞す可き必然的運命を有して居るものとは認めない。此儘に放擲して置けば、卽ち必然的運命に任せて置けば、資本增殖の勢は益々强烈となりて人生の眞の厚生幸福は全く其の爲に蹂躙せらるゝの外はない。我々は必然の運命の到來に一任せず、人爲の政策を以て此大勢に對抗せねばならぬと主張するものである。是が卽ち社會政策存在の理由である。從つて社會政策はマルクス流の唯物史觀を以ては到底打立て得られないもの、否な否認せらるべきものであると共に、我々の如く唯物史觀を取らぬものに取つては、社會主義が誤りて敎へつゝある所を正しく敎ゆるもの卽ち社會政策である。(序文)

博士の立場は極めて明確である。卽ちマルキシズムを排して社會政策を採る。これが博士の立場であり、「社會政策と階級鬪爭」の五百餘頁は、この立場を說明し辯護するために費されてゐる。

博士の社會政策論は單なる行政論でも、常識論でもない、それは一の經濟的知識の上に立脚した理論である。博士はこの理論を打ち立てるために、先づ國家と社會の對立を以つてし、近世の社會運動は實に「社會の發見」にあるとした。一度社會を發見し、其存在と其活動の法則とを知るに至つては、國家に一括する能はず、個人に分割し能はざる此等の異例的現象は、之をあげて「社會的」現象なりとするに至る。社會運動・社會問題、社會主義、社會階級、社會事業などと云ふ場合に關する「社會的」「ソーシアル」なる概念は斯くして出で來つた。而して其等が直ちに人の注意を惹くことは、此等は個人的でないは勿論、國家的とも云ひ盡されぬと云ふことこれである。(一四)故に社會政策の理論は先づ國家哲學の硏究にあらればならぬ。「社會政策の根本硏究は此の新しい國家哲學、社會哲學の產物を十分に體得することなくしては、決してこれを完ふする能はざるものである。」(二〇頁)

然るに從來の國家學說を見ると少くとも二つの形態がある。それは國家至上の哲學と國家否定の學說である。「前者は之を押詰めて行くと、社會を國家に融化し盡さうとすることになり、後者は國家を社會に融化し盡さうとすることになる。」(一五頁)卽ち國家至上主義は一切の事象を擧げてこれを國家てふ容器に盛り上げ樣とする。然るに一方國家否定の學說は一切を擧げて社會の內に包含せしめやうとする。兩者の對立の結果は社會か國家か二者擇一の結果となる。社會政策は兩者共に否とする。「國家を社會へ包攝し去らうとする考も社會を國家に包攝し樣とする考も共に社會政策の取らざる所である。」(一九――二〇頁)國家至上主義の缺點は團集生活の一形式たる國家に、個人的事象も、社會的事象をも包攝せしめやうとする點にある。國家も一の人格である。「國家は國家夫自らの生命を持つてゐる。」(五一)

けれどもこの獨立人格の所有者である國家はすべての社會事象を包攝し得るものではない。勿論過去においては、かゝることは可能のことであつた。けれども社會の發見はこれを不可能ならしめてゐる。單に不可能ならしめてゐるばりではない、國家至上主義を否定し、更らに國家そのものをも否定せんとする傾向がある。この兩傾向を調和することが、社會政策の使命である。卽ち人間の厚生鬪爭は「決して國家てふ容器以外國家の範圍以外に於てのみ行はれるのではなく、國家に盛り上げられた部分、國家てふ容器の中にある共同生活に於ても行はれる者で、國家範圍は決して鬪爭範圍でなく、鬪爭は國家の內外を通じて一樣に行はれるのであるから「社會」は國家の內外を通じて、其存在を維持する者と考へられる。（一一七）これを具體的に云へば、從來の權力國家を變形して、義務國家たらしめやうとするにある。これを他の言葉で云へば「財産國家より勞働國家へ」の一言を以て言表はし得る。而して其獨立點は、生存權の認承にあることは、アントン・メンガーの說を承けて、私の十數年來主張しつゝある所である。」博士の雄大なる議論は、その十數年來の主張たる生存權の認承に歸着してゐる。（一二五――六）

生存權の認承なる義務國家を如何にして建設すべきか。國家形態の變改後に於ける國家の範圍如何。社會的なりと認めらるものゝ範圍如何。殊に「國家てふ共同生活は今日までの事實としては、此の不自由不平等の第一淵源たる財産制度の擁護を以て、其事實上、經驗上の第一任務としてゐた――本質上の第一任務たる譯では決してないが――。從つて今日迄の國家に就いて云へば、其統治・其支配の下に立つ人類の生活こそ、不自由、不平等の體現であると云はればならぬ。」（一〇二）「事實に於ても國家の弊害の最大なるものは、其財産擁護制度に伴ふ弊害であつたので、國家の權力を掌握する者は、又同時に財産權力を掌握する事になり、反對に財産權力を掌握すれば、自然に國家權力を掌握すると云ふことが、少くとも今日迄の歷史的發展上の常例であつた。」（九八並に一一五）かくの如き國家に關する經驗的知識と「一度存在を發見した社會に就て、更らに其運動の法則を發見すること、其運動の進行上に於ける國家との交渉を正しく解釋すること、他方同時に個人との關係を究明する社會政策理論」（二七）とを如何にして解說すべきか。博士は自己の學說が經驗的知識の上に立脚して、決して社會主義者の如く一の獨斷から出發してゐないことを誇りとしてゐるのである（「階級鬪爭當事者としての雇傭所得と資本所得」中のマルクス階級鬪爭論に對する批評を見よ）。

博士はこの經驗的事實の認承の上に自己の學理を建設せんとするが故に、博士の所謂經驗的事實から出發して、故に當然社會の內に融化せらるべきを主張するマルクス派社會主義殊にレーニンの說に反對するのである！　博士は、かゝる目的のために、マルクスの經濟論と唯物史觀とを斥ける。マルクスの唯物史觀全體に對する博士の議論は本書中には、これを發見することが出來ない。たゞ階級鬪爭論は歷史的事實に反してゐるが、たゞ近世資本主義制度の下においてのみは、正しいと主張せらるゝ。さうして社會政策は階級鬪爭を否認する。「社會政策が階級鬪爭を否認すると云ふのは、決して現存の事實を否認する謂ではない、其は爲す能はざる所、否學問上爲す可からざる所である。其否認と云ふのは、階級鬪爭を飽迄も階級鬪爭として進行せしめ、之に標的と目的とを指示して、より有力に、より有意義的になすと云ふことを否認するのである。」（四二一）博士の見るところによると社會主義は階級鬪爭を唯一の目的としてゐる。故に博士はこれに贊同することは出來ない。私は博士のマルキシズム觀はあまりに窮窟に過ぎずやと考へるものである。

最後に博士は資本の增殖と資本主義の崩壞に就いて論ずる。博士は資本增殖は、勞働階級の消費減退の事に不拘らず進行するものであるが故に、マルクスの崩壞說を、ツガン・バラノウスキイと共に誤りであると主張する。この點に就いてのマルクス說辯護は、河上博士が「社會問題研究」「我等」に掲げてゐる。私は兩說に就いてこゝに何ごとも云はない、けれども博士と雖も資本制度の永遠性を信ずるものではないやうだ。曰く「我々は今日現在此の資本制度と云ふ形

を與へられて、其の中において、我々の力を、又た他の或る更らに進んだ急所へ集中して攻め立て、我々の運命を開拓しつゝある。而して此れも、ある度まで我々の力が達すれば、やはりからとなつて亡び行つてしまふものである」と。博士は、この點に於いて唯物史觀を純然たる機械論と解するのである。

要するに社會政策と階級鬪爭は博士の深遠なる學殖を傾けて社會政策の理論的基礎付けを行はふとするものである。乍然、博士の云ふところによると、「社會政策序論」は汎論の汎論と云ふ積りで、云はゞホンの見本に過ぎない、後篇においても、論じやうとする問題は甚だ多いのである。（序）吾々は博士の眞意を知る爲めに、更らに博士の未刊の論文の發表を願はねばならない。

● S博士（著者宛手簡）

拜啓　近頃甚怠慢の至りに御座候へ共近日漸く高著社會政策序論拜讀致候近來の快著とも可申御手なみ敬服に不堪候色々議論多き社會政策の理論もどうやら Begründen せられたる如き感じ致候玆に歸趣を見出す學者も續出致すべき事と學界の爲め大慶に存候只小生讀過の際心づき候點を左に開陳致候次巻又は其以前にも御教示に預り度とも存候

第一一九頁に於て無政府主義、民主主義及び國家至上哲學の三者を併列して國家と社會との關係を三樣に見られたる處最も敬服すべき結論と存じ全篇の趣考之によつて最も明白なるを覺え候へ共此三者殊に後の二者に對する社會政策の關係は國家と社會との關係といふ點より觀察しては其の區別一讀瞭然たらずといふ感じを抱かしめられ申候民主主義の國家の社會への包攝國家至上哲學の社會の國家への全部的包攝に對して社會政策に於ける「國家の範圍の擴張と其の外圍の彈力化とを主張する」ものとせば而して「國家は無限に其社會化を繼續して行かねばならぬ」とせば結局はある意味に於ては民主主義ともなり又主要觀點とする意味より見れば國家至上哲學ともなるべく候「國家をして無限の擴張に應ずべき彈力性を有せしむる樣になすこと」は所謂國家至上哲學の主張する所とも解し得られざるにあらず此の場合「國家」は所謂現今の國家にあらずとせば之れやがて一個の社會主義とも稱すべきものともなる樣に感ぜらる、財産權に對して勞働權を主張する所は社會主義となり之れを飽くまで國家の形式に包攝せんとする所は國家至上哲學ともなるべく候

約言すれば畫龍點睛に於て多少の遺憾ある樣に思はれ此處に最後の Begründen を缺如せるが如く感ぜられ申候本書の讀者にして小生の如く感じたるもの必ずあるべしと確信するを禁じ得ず候仔細に考ふれば民主主義と國家至上哲學と社會政策との間に社會と國家との觀點より見て三樣の觀方あるがごとく思はれ候へ共責說丈けにては何か缺ける處あるにあらずやとの恐を抱き申候

要するに記述第一一九頁を受けて「社會政策のレーゾン・デートル」以上の Begründen に於て無條件的に成る程と考ふることを得ざりしこと丈卒直に申上候次回御改訂の際は此の點一應御考へ御教示に預り度存候右失禮ながら讀過の際の感想丈を申述候御斟酌被下度候　不盡

二　社會運動と勞銀制度

第一篇　社會運動の理論的根據

第一章　社會觀念の發達

「個人、國家、社會」

社會運動の觀念は社會政策、社會主義、社會事業、社會立法等の觀念と同樣に『社會』と云ふ觀念から出立して居る。故に社會運動の根本觀念を明瞭にするには、先づ右等の場合に於て意味せらるゝ『社會』と云ふ觀念を究明する事から始めなければならぬ。『社會』と云ふ言葉は從來二つのものに對して區別す可く用ゐられて居つた。卽ち其一は國家に對して區別す可く用ゐられ、其二は個人に對して區別す可く用ゐられて居たのである。

個人と云ふ觀念も國家と云ふ觀念も共に昔からある。必ずしも國家と云ふ字を使はず、單に國と云つたり公と云つたり公共と云つたり樣々異なつた字は用ゐるが、要するに國

家なる觀念に該當する人間の團集生活と云ふ觀念は昔からある、但し國によつて其發達の度合は色々違ふ。國家と云ふ考へに甚だ重きを置いて居た國民もある、それに重きを置くこと割合に少い國民もあつた。其反對に個人と云ふ考へは何處の國へ行つてもある。これも亦國により或は民度の發達如何によつて其言ひ表はす內容には色々程度がある。併し國家に對してそれと區別せらるべき個人なるものゝあること は、誰も皆考へて居つたことである。

個人思想と國家思想

西洋は個人思想が發達して居る、日本には個人思想は西洋ほど發達して居ないで、反對に國家思想が發達して居ると云ふ人があるが、是は大なる謬見である。西洋に於て個人と云ふ考へが發達して居るのは、個人に對抗する國家てふ考が發達して居るからである。一方が發達して居るから他方之れに對抗する考へも亦强くなるのである。男と云ふ觀念が深くなると、女と云ふ觀念も亦特別な意味が附與せられる。元は男と女の區別がはつきりして居なかつた。西洋の言葉では、人間と云ふ言葉と男と云ふ言葉は同じである、man と云ふは男でもあり同時に人間でもある、女といふには其に何か制限の文句、英語で云へば前へ wo と云ふ字を附けて woman と云ふ、少し人間の資格の少いもの、或は毛色の變つたものといふ樣に聞へる。男女の區別が餘りはつきり人間の意識に上つて居ない時には、一つの言葉を以つて凡てを指し、先に飛出して來て幅を利かしたものが男であるから、主として男が人間と云ふ言葉を占領した。所が其の男性が段々著しく發達して來ると、之に對して餘程違ひのある女と云ふ考が强くなる。そこで近來は女性問題、男性に對する女性特有の問題がやかましくなる、之を婦人問題と名ける。若し婦人問題なるものは、婦人が男子に壓迫せられるから起つて來ると云ふなら、昔の方が婦人問題が遙に盛んでなければならぬ筈である。何んとなれば、昔の方が婦人を壓迫することが激しかつたは誰も疑はないことである。然るに婦人を稍々對等に近く扱ふやうになつて來た今日に於て、婦人問題が喧しくなつて來たのは、男性と云ふ考へが發達して來るに從つて之れに對抗して、此れと區別し對立すべき考へとして、女性と云ふことが强く感ぜられ意識

せられるやうになつて來たからである。

勞働對資本

社會政策の主たる問題とする勞働問題もさうである。勞働と云ふ時には必ず常に資本に對抗するものとして考へられる。資本と云ふ考へが強くなり、資本の働きが誰人も見遁すこと出來ないやうに鮮かになつて來た今日に於て、之に對抗して樣々なる點に於て其とは利害關係を異にし、其據つて立つ立脚地を異にする勞働の考へが強くなる。そこで勞働問題が起つて來る。勞働問題とは一體勞働斗りの問題ではない、同時に資本問題である。資本及び勞働問題である。恰も今日婦人問題と云ふのは婦人斗りの問題ではなく、同時に男子問題である如くである。所謂婦人問題の取扱ふ題目の中には男子問題が澤山入つて居る、例へば婦人に對する男子の壓迫横暴、之は婦人問題ではない男子の問題である。其を婦人問題の中に入れて居る。今日勞働問題と云ふものゝ中には資本問題が澤山ある。資本と勞働とが爭つて居る勞働者が惡い資本家が惡いと云ひ、或は勞働者にも相當の主張がある資本家にも相當の主張があると云ふこと、之を皆勞働問題と云つて居るが實は資本及び勞働問題である。

個人意識の發達

個人と云ふ考へも其の如くに個人に對するものゝ一つ若くは二つの考へが強くなるに隨つて、個人と云ふことが著しく意識に上つて來る。日本に於て個人思想が發達して居らないのは、國家思想も發達して居らなかつたからである。婦人問題の無い昔は婦人問題もなければ男子問題もなかつた如く、勞働問題の無かつた昔は勞働問題もなかつた如く資本問題もなかつた。個人問題の無い時は國家問題も大してない兩者ごちや／＼である。日本の方が西洋より國家思想が發達して居つたと云ふことも間違ひであるが日本の方が個人思想の發達が西洋より少いと云ふことも其の意味に於ては間違ひである。西洋の文明が個人文明であり、日本若くは東洋全體の文明が國家文明である譯でもない。人類の發達の道行にはサウ違つた事はない一つの道行である。唯だ向ふが進んで

居つてこつちが後れて居るだけの話である。

日本の家族制度

具體的に一例を擧ぐれば、日本は家族制度が大いに發達した國である、之は日本の國粹として誇るべきものであると能く人が云ふ。恰も家族の制度は日本に於ては西洋に於けるよりも遙に發達して居、西洋に於ては日本ほどに發達して居ないかの如くに云ふが、其れは大變な間違ひである。家族制度は日本に於ける發達も西洋に於ける發達も同じ道行を取つて居る。唯だ向ふの方が先きに發達して居つて日本の方が後れて居る、後れて居るからまだ昔の野蠻時代の遺物が澤山あると云ふ違ひがあるのみである。例へば戸主の制度の如き、今日の文明の程度に到底容れられない制度がちやんと法律の上にも認めてある。社會の實際に於ては段々無くなつて居るにも拘らず、法律の上では強ひて戸主誰と特別な地位を認める、洵に譯の分らないことである。之は日本が遙に後れて居るからである。日本の家族制度に麗はしい點のあることは事實であるが、西洋の家族制度にも多くの麗はしい點がある。例へば家を重んずることは決して獨り日本ばかりではない西洋でも左樣である、日本にのみ家族制度が發達して居ると思ふのは、西洋のことを少しも知らない、否日本のことも知らない謬見である。

社會原始の單位

所謂家族制度の美點とは何であるかと云へば、一軒の家の者が別れ〲にならず、成べく一緒に居て財産も分たない住居も異にしない成たけ一つ所に居る、さうして其の間に溫かい情が通つて居る、父は家族の者を愛撫する家族の者は戸主を大事にすると云ふ。これは要するに人間の團集の單位が大きいと云ふに外ならない。社會の發達の上に於ては、何れの場合に於ても社會の初めには多勢の團集が一つの經濟團體一つの生活團體であつた。其れが文明の發達と同時に段々縮小的發展を遂げ段々と壞れて來た。日本に於ては昔は『氏』の制度があつた、一つの氏とは大變多數の人から成立つて居るもので大氏と小氏とがある。大氏に至つては甚だ多數の人を包含して居る、其の澤山の氏人は

氏の長者の制令を受け其の下に不分割的に共同の生活をして居つた。其氏の制度に代つて起つて來たものが所謂家門、今日の社會學の術語で云へば『大家族』である。大寶令――適切に云へば養老令――によつて規定せられた戸籍の制度に依つて作られた戸籍の斷簡零墨の遺つて居るのが可なりある、大日本古文書に澤山蒐めてある。此等を見ると一戸には最も多いものは九十人位居つた、それから八十人七十人五十人三十人と云ふやうに十人十五人は寧ろ例外で、大抵それ以上の人間が一戸に屬して居る。親兄弟伯父伯母從兄弟再從兄弟同志皆一つの家に屬して居る。これが即ち日本で家族制度と普通云ふものである。さう云ふ制度は決して日本にばかりあつたのではない西洋の何處の國にもある。希臘の『フラトリー』phratrie 羅馬の『ゲンス』gens 獨逸の『ジッペ』Sippe 英吉利の『クラン』clan 此れ等は皆日本の氏、若くは氏が段々崩壊して代つて出て來た大家族に當るべきものである。

大家族制の遺物

今日になつても日本にも此の大家族の遺蹟がまだある西洋にもある。日本で最も能く人の知つて居るのは飛騨の白川にある大家族である。これは私は先年自分みづから行つて見たので確かなことを述べることが出來るが、私の見た中否白川中の大家族の一番大きなものは三十餘人の家族から成つて居る。家は合掌造りと云つて二階から一番上まで、一本の木と木を以つて合掌的に組んだ屋根を拵へて、大抵五階若くは六階になつて居る、唯だ一階だけは地から柱を建てゝ居るが二階から上はズッと合掌的の屋根に一列の柱であつて、其の間の仕切を竹で打つてあるから、下から五六階の上までズッと見通せる、中々大きな家でそこに一家の者が皆住んで居る。さうして戸主の外は嫁を持たない、他の者は唯だ家族として同居して居つて妻帶は全然しない。併し一家の内には男もあれば女もある、其の女はやはり子供を生む。女は他に嫁に行かず、男は戸主の外は他から嫁を取らないけれども人間であるから子供を生む、其の子供は皆私生兒である。ついさき頃までは戸主の私生兒として戸籍に載つて居つたが、此の頃は認知して庶子になつて居る者もあり樣々であるが未だ私生兒が澤山居る。一戸内には伯父も居れば叔母も

居り從兄弟も居り從兄弟違ひも再從兄弟違ひも居る、それが皆合體して一つの家を作つて居る。家族制度が若し美風であるならば、此の飛驒の白川の如きは日本中で最も美風を存して居る所と云ふべきである。

西洋にもあり

ところがこれは決して日本にあるばかりではない西洋にもある。此度の歐羅巴大戰爭の抑々發端となつた塞爾維の農民間には此の種類の大家族が中々多くある。此度の戰爭の爲めに大分崩れたであらうと思ふが全滅はして居まい。其の他佛蘭西瑞西獨逸にもあれば露西亞には無論ある、伊太利にもアルプス山間地方にはある。全然無いのは亞米利加である、これは出來星の國であつて皆新らしい人から成つて居る國であるからさう云ふ昔の遺物は無い。英吉利には割合に無いが蘇格蘭には現に『クラン』と云ふものがあり、愛蘭には『タニストリー』の制度があつて、其の戶のことを『セプト』と云つて居る。家族制度が日本の特色だなどと云ふのは井の中の蛙大海を知らずどころではない、甕の中の蛙井戶の水さへも知らないものである。そんなことで日本の國體の美を誇るなどとは實にをかしな話である。國體の美ではない家族制度は非常に弊害の本である。日本にまだ家族制度があるからこそ色々な弊害が起る、殊に戶主と云ふ變なものを認めて居る爲めにどの位文明の發達を害し、文明的行政の妨碍になつて居るか知れないと私は信じて居る。

個人の發達後るゝ處國家、社會の發達亦後る

日本では個人と云ふ考へも發達して居らぬ。我々が今社會政策のことを考へるに就て最も念頭に置かねばならぬは、個人の發達して居ないことは個人其のものゝ發達して居ないことのみでなく國家が發達して居ないを意味すること是れである。國家が發達して居ないばかりではなく社會も發達して居ないのである。國家の發達は社會の發達と伴ふものである。國家と社會とは同一種のものではないが同一の地盤の上に立つものである。國家發達すれば社會發達し社會發達すれば國家も發達する、國家社會發達す

ば、個人も發達する、個人發達すれば國家社會も發達する、此の兩者は互に原因となり結果となつて行くものである、一方だけ發達することは出來ない。個人思想の勃興を抑へて置いて、國家の富强を望むことは迚も出來ないことである。

露西亞と支那

今日現世界の厄介になつて居る國は幾つもあるが最も厄介な國と云ふ可きは露西亞と支那である。露西亞は革命をしたから厄介なのでなく、革命しない前の露西亞の方が尙ほ厄介なのである。今日は饑饉の爲に苦しむとか、産業が破壞してしまつた爲に苦しんで居るが、革命以前の露西亞は總の點に於て苦しんで居つて世界の禍の源であつた。支那も亦此の度の太平洋會議に於て國際管理にしようぢやないかと云ふもの〻あるのは、恰度道樂息子に家を委せて置いたけれども、身上を無茶苦茶にしてしまつて迚も家が立行かぬと云ふので、親戚や身內の者が寄つてたかつて一切の權利を取上げて準禁治產にし、巾着を預つて要るだけの小遣を當がはうぢやないかと云ふような話である。若し日本がそんなことを言はれたなら、我々日本國民は非常に憤慨するであらう、支那人も此の頃は餘程目覺めて來たから憤慨する者もあるが、大多數の人民はまだそれがどういふ工合になるか十分に諒解が出來ないから憤慨する迄にも行かない。人間は腹を立てることが出來ないやうな意氣地の無い者では、世の中に生きて行く資格がない。國民として腹を立つ憤慨すると云ふ意氣地が支那には無い、これは支那の國家が發達して居らず、支那の個人が發達して居ないからである。

背後の大なる力

十八世紀から十九世紀を經て今日に至つて、我々人類の文明が全體には今まで普通のやり方を繼續して行く內に、どうしても普通のやり方では承知することが出來ず、我々の考への置き所を全然新たに建て替へなければならぬ非常な發見をなした。十八世紀から十九世紀にかけて色々自然科學の發達に依つて大發見大發明もあり、蒸氣力を發見したとか續いて電氣の應用が始まるとか色々變つたことがあつたけれども、其れ等一

切の大發見大發明は若し更により大なる發見によつて伴はれたのでなければ、其後に後援たるべき大發見があつたのでなければ、今日のやうな人類文明の大變革は惹き起し得ない。否此れ等の大發見大發明も、實は其の背後にモッと大なる人類の大發見大飛躍があつたからこそ起つたのである。ワットが蒸氣機關を發明したのは、彼がグラスゴー大學の一室に、コツ〱と唯だ機械を扱つて居る間に考へついたのであると云ふが左樣ではない。ワットをして彼の大發明を爲さしめた其の根本の大いなる力は、社會全體の文明社會全體に流れて居る大きな暗流是れであつた。最近に至つては色々な科學上の發見發明があつたが、これには愈々以て十八世紀の終十九世紀の終に於けるより、モット强く大いなる背後の力の働いて居ることが分るのである。

「社會の發見」

其の大いなる力とは何かと云ふと、我々人間が『社會』を發見したこと即ち是である。十八世紀以前に於ても社會はあつた、又社會と云ふ事を幾らか考へついた人も無いではなかつた。日本でも無いことはない、殊に德川時代の日本の優れた學者、國學者、漢學者の中には、社會と云ふ字は用ゐないけれども、さう云ふ事に考へついた人も若干はある。否モッと遡つて昔の支那の學者の中にはさう云ふことに考へついた人は餘程ある。今日の社會政策の眼を以て見ると、恐らく此の社會と云ふことに最も早く氣のついたものゝ一つは、支那の儒教の思想である。乍併之れを今日のやうな形に於て的確に我々に敎へたのは東洋ではない、東洋はそれ以來ズッと沈滯してしまつてそこまで行かない、非常に發達が後れて居る。西洋に於て社會と云ふ考へが總の人にではないが、時勢の先導たる人々の頭の中に起つて來た。其れが今日の社會運動や社會問題を惹き起すやうになつた根源である。

より狹い社會の概念

今日社會事業若くは社會政策、社會運動と云ふ時の『社會』とは、個人に對し國家に對する社會の全般に關することを謂ふのではない。日本では未だ大分無茶苦茶に此等の言

F. V, 38.

葉を使つて居つて、何か公けの問題、公共の生活に關した問題が起ると、其れは社會問題である、左樣なことは由々しき社會問題である、と云ふやうなことを隨分新聞や雜誌に書くけれども、これは言葉の使ひ方を誤つて居るものと云はねばならぬ。今日謂ふところの社會運動或は社會問題又は社會政策の其の『社會』とは、社會に關する事の一切をゴタゴタと包含するのではない、其の中の或る特に限つたものを意味するのである、社會に起る凡ての運動は必ずしも社會運動たるわけではない。其れと同樣に政府に於て社會事業をやる、其の爲めに特に社會局若くは社會課と云ふやうなものを置くと云ふのも社會に關することの總てを取扱ふのではない。社會に關する總てを取扱ふのならば、政府の仕事は悉く皆是れ社會に關係あるものであるから、政府の事業は皆社會局に入らなければならぬ、社會課が地方行政の一切を占めてしまはなければならぬ、さう云ふ意味では決してない。今日の世の中に起る多くの問題、就れか社會に多少の關係の無いものはない、否すべて皆社會に起つて來る。個人問題でも社會に起つて來る。我々は社會の內に生きて居る、我々の間に起る問題は皆社會に起る所の問題である。

例を以て說く

恰かも汽車に乘つて行く人が多勢ある、女もあれば男もある子供もあれば老人もある、其樣々なる人の間に起る問題は、其の人々が汽車に乘つて居る間に起る問題ならば、これは總て汽車中の出來事である。汽車の中で赤ん坊が泣き出した、これは汽車中に於て赤ん坊が泣いたのである、其の以外に於て赤ん坊が泣いて居るのではない。汽車の中で或人が腹を痛くして下痢を致したとすれば、それは汽車中に於て下痢をしたのであつて、其外に於てしたのではない、汽車中の出來事である。乍併其等は汽車其のものに就ての出來事ではない、其れが汽車全體の安寧に關し汽車の進行に關係するやうになれば、初めて汽車の問題となる。汽車の中に乘つて居る乘客一々の間に起つたことは、列車の中の問題ではあるけれど、汽車其ものゝ問題ではないのである。

社會問題の發見

社會問題もさうである。「總て皆社會の中に起るのであるけれども、其の總てを社會問題と云ふのではない。其起る問題が社會其のもの丶存在、社會其のもの丶運行に關係するやうになつて、初めて社會問題となるのである」。所謂社會問題、社會事業などと云ふ時の社會は、汎く謂ふ社會の中の特に限られた問題である。其社會的と云ふことは初めに申したやうに、個人的と云ふことに對し、又國家的と云ふことに對するのが第一の意義である。社會内に起る出來事でも、個人的の出來事たるに止るもの、國家的出來事であるもの、社會的出來事であるものと、大體別けて此三つになる。社會事業と云ひ社會政策の主體とするところは個人的でもなく國家的でもなく、特に社會的であるものである。故に社會を發見したことが、十八世紀から十九世紀を通じて今日に至る大發見であるとするならば、更に第二の發見として其の社會の內特に限定せられた狹い意味に於て云ふ『社會的』と云ふことを發見したことは、十九世紀の後半の第二の大發見と云はねばならぬのである。歐羅巴に於ても亦た日本に於ても、特に社會事業社會的の施設と云ふことの際立つて感ぜらる丶のは極く近頃のことであつて其れの見出されたのは先づ十九世紀の後半、モウ少しく適切に云へば、十九世紀の終り四分の一卽ち千八百七十年代以後である。

第三の發見

而して更に第三の時期が此の度の大戰爭によつて區劃せられた。此の度の大戰爭によつて、此の社會的と云ふことが特に肝要である、人類の共同生活の中で最も肝要なるものであると云ふことが、更に見出されるやうになつたのである。日本も進んだ程度に達したが故に、此の第三の時期に於て歐羅巴と步調を同ふするやうになつて來たのである。乃ち政府が自ら率先して社會事業をやると云ひ社會局を設くると云ひ、地方に於ても社會課を設くると云ひ、少くとも名前だけでも、呼聲だけでも、社會と云ふことを看過することの出來ないやうになつて來たのである。

今日は未だ其途中

然し此の社會的と云ふことが、國の憲法、行政の中心となるやうにならなければ本當の發達ではない、今はまだ其道行である進行中である。今日に於て國の憲法、國の行政此の二つが社會的になつて來たのは、例へば露西亞の如き例へば獨逸の如き例へば英吉利の如き程度は色々あるけれども、世界大戰爭の終結を告ぐると共に起つたのである。獨逸の新しい憲法の如きは一つの社會的憲法――其の社會的と云ふのは廣い意味の社會でなくして、狹い意味の社會的の憲法 Soziale Verfassung と云つても宜い位である。英吉利は憲法其のものは形式的の變化は無論しないけれども、其の行政は著しく社會的になつて來た、これは戰爭前から既に其の傾向を著しく示して居つたが、戰爭の後に際立つてさうなつて來た。其れを主として掌る官省を英吉利では Ministry of Reconstruction 改造省と云つて居るが、實は社會事業省、社會省である。此れは決して政治家が空に考へ或は輿論に迎合する、若くは輿論の機先を制しようと云ふ爲にやつたのではない、實際の必要が此の如くならしめたのである。日本には其の必要が無いかと云ふと其の必要は大いにある。其の必要があると云ふことは、卽ち日本が急速の進歩を爲したことを語るのである。乍併まだ實際上の施設に於いては非常に後れて居る。若し此の儘にして後れて居るならば時機を失してしまつて、後から設けたものは前に設けたものゝ半分の効力もなさない。今日に於て日本は社會政策の意義の重大なることを到底度外視し能はざるものである。

第二章　人類生活共同化の行程

「無限の進歩と有限の人力」

人間は死滅しない爲めに必ず進まなければならぬ。其の爲めに無限に進むと云ふ傾向を與へられて居るものである。其の無限に進む傾向は、數と質との二つの上に在る。人間の數は妨ける力が無ければ無限に殖える。これは獨り人間に限らない、凡ての生物

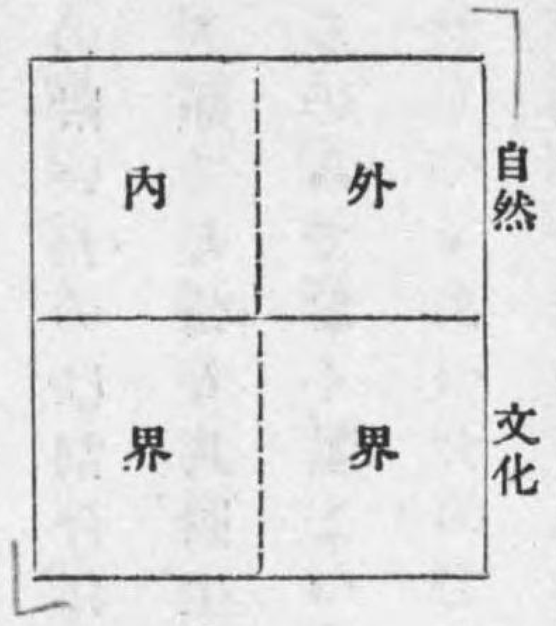
に共通の傾向がある。生物はより善くなる爲めに、自然淘汰せられる爲には、生きて行き得る數より以上生きて行く見込の無いものも、兎に角一度は生れる。生れたものゝ中で殘るものは寧ろ少數である。此の數の上に於て人間は限りなく殖える傾向を有つて居るが、更らに質の上に於ても、亦た人間は其生命を充實して行く爲めに、向上發展して行く爲に、迚も自分の力の及ばない無限の欲望を與へられて居るものである。物質的にも精神的にも限りなく進んで行かうとするものである。ところが此の無限に殖えようとする人間を養ふだけの物は無論ない。又た生きて行けるだけの人間が有つて居る精神上、物質上の要求、生命を充實して行かう、向上發展して行かう、と云ふ要求を充すだけの力も人間にはない。人間を取卷いて居る外界は甚だ不十分である。又た其の外界を以て人間の用に充てようと云ふ其の充てる工夫も限りがあつて、無限に人間の要求に應ずることは出來ないのである。

共同生活による共調和

然るに玆に人間は共同生活を形づくることに依つて、其の共同生活に組織と云ふものが出來る。其の組織の力によつて著しく無限と有限との調和をすることが出來る。外界の有限を著しく變へて無限にすることが出來、人間の精神上物質上無限に進んで行かうと云ふ傾向に稍々應ずることの出來るやうになるものである。我々が此の事實に氣の附いたのは割合に新しいことである。乍併事實其ものは昔からある。どんな幼稚な人類でも、苟も共同生活を爲さない者は無い、全く孤立の人間は初から無い。唯だ人が集るのみでなく、集まつてそこに新しい力を生じ、それに依つて人間の無限進歩の要求を充たしつゝあつたのである。其の共同生活は民族によつて程度に色々違ひがあるが、何處を見ても皆先づ國家と云ふ仕組に於て此の共同生活を作つて居る。國家は共同生活を容れる一つの器物である容器である。國家と云ふ器物の中に入つて人間の共同生活が營まれて行く。其器が無理に壓迫して共同生活を維持して居る場合もあるし、自然に成立つて居る場合もあるが、兎に角國家は共同生活を統一し之に秩序を與へる最も有力なる機關であつたのである。

自然と文化

我々が其の生命を維持し國家の生命を進めて行く爲めに使ふものは、凡て我々以外にあるものと、自分の内に在るものとに分けることが出來る。之を名けて外界、内界と云ふ。内界の力も增さなければいかぬ、外界の力も殖えなければいかぬ。内界と外界とを通じて之れを上圖のやうに横斷すると、上の方が自然下の方は色々な名前を附ける、此頃の流行の言葉では文化と云ふ、元は精神と云つた。兎に角一方は自然と云ふ事は疑ひない、一方は自然でないものとする。自然とは何を云ふか其れ自からに意思のないものどれでも宜いもの、其一つ〳〵に意味なく唯だ全體に意味があつて、一つ〳〵が全體の代表的なもの、それが自然である。之れに反し其一つ〳〵に意味があるもの、それを或は精神と名け此の頃は文化と名づける。其れ自からに意味のあるものは人の爲めにも使はれる人の道具にもなるが又其れ自からの意思を有つて居る、其れ自からの生命を有つて居る。



どれでも此れでも宜い、全體の唯だ一つの見本に過ぎない自然は、一つ〳〵に意味はない、唯だ全體にのみ意味がある、從つて人の道具として使はれゝば道具になり切つてしまふ道具であるばかりのものである。社會も國家も個人も無限なる其の欲望を充たすが爲めには有らゆる物を取つて道具とし、有らゆる手段に使はなければならぬ。ところが其の手段の中に手段になつてしまつてそれでお終ひのものと、手段ではあるが同時に其れ自から自己の目的を有つて居るものと此の二つある。

自ら目的を有する手段

社會に起る問題の中に、限られたる尊い意味を有つ社會的と云ふことは、此の使はれる手段の中で手段とはなるけれども、其自からにも目的のあるもの、其自からの價値を有つて居るもの、其れ自からの自決の意思を有つて居るものに關する問題である。自然の問題でなく社會の問題である。其自然の問題を支配する法則は自然法則であるが、其れ自からの目的を有つて居つて、他の者の爲めに手段となるものに關する法則を、社會法則或

は此の頃の言葉では文化法則と云ふのである。

不足の征服と其組織

各個々人なり若くは個人の團集が、外界のものを手段として取り入れて、自分の方へ取つて來て、自分の意思を實現するやうにする事は卽ち勞働である。勞働の結果卽ち勞働されて目的がそこに實現せられたものは財である。凡ての物は人間の社會的なる若くは個人的なる生活實現の爲に使はれる時に財となる、凡ての物は皆勞働を通じて財貨になるものである。ところが此財貨を作り出すこと、卽ち勞働して目的が實現される樣にするに方つて、人間の本來に存する解け難い矛盾が必ずいつでも働いて來る、其は卽ち不足と云ふ事である。人間の欲するところは無限である、然るに自分の力、自分が從へ得る外界の力には限がある、隨つて不足する。『經濟』とは此不足に打克つ爲の一切の人間の工夫を名けて云ふのである。物が不足でなければ經濟と云ふ事は起らない。如何に不足に打克つべきかの工夫が卽ち經濟となるのである。其不足に打克つ爲に、人間は古代極く文明の幼稚な時分から、文明の程度の低い時代から一種の組織を作つた。何人かの人が合して唯の集合でなく一の有機體を作つた。其有機體の一番始めのものは何であるか、一番始めの社會の原始體は何であるか、其は卽ち『家族』Family である。今日は家族とは男と女が合體して、其の間に生れる子供を併せたものを指して云つて居るが、昔の家族とはそればかりではない。前にも飛驒の白川の例をあげたが、モッと多數の人を包含して居る。今日は男女の婚姻、性的結合によつて家族が出來るのであるが、昔に於ては男女の性的結合は寧ろ家族あつてから後に始まる。其の時分の家族は何であるかと云ふと、血を共通に有する人々の何人かの集まりであつた。然し其の結合の中心をなすものはやはり男女の結合である。

體性上の不足の征服

これは獨り人間に限らない、凡ての生物を通じて共通の現象であるけれども、人間の力の第一の不足さうして一番先きに打克たれなければならぬ不足は、男性女性の夫々の不

足である。即ち男性はどうしても女性の力がなければ、自分の生活を維持して行くことが難かしい、女性も亦た男性の力を藉りなければ、其の生活を充實して行くことが難かしい。天然は完全な人間を作らないで片ひらづゝを作つて置いた、其の兩ひらを合せて初めてそこに兎に角一つの個人生活が、其程度に於ては纏まり得るやうに出來て居る。昔は一人の男子に多數の女子がくつ附いて見たり、一人の女子に多數の男子がくつ附いて見たりしたけれども段々變つて、今日は一人の男子に一人の女子がくつ附いて、それが普通の形になつて居る。例外變則は隨分あるけれども原則はさうなつて居る。どれが唯一の形式と云ふことは無いが、兎に角男女が合することが人間の一番始めの團集の必然形式である。

社會主義の謬見

今日の社會主義或は共產主義を唱へる人の多數は、此點に於て一の謬見に陷つて居る。彼れ等謂へらく、昔人間の幼稚な時代には男女の永久的結合卽ち婚姻と云ふものは無かつた、雜婚或は亂婚 Promiscuity の狀態であつた。人間も他の獸類と同じく、男女の性的結合を雜婚的にして居つた。其後餘程遲れて今日の家族制度が成立したのであると、斯う主張して居る。日本でも大分此の說を祖述する人が社會主義者は無論社會主義以外にもある。これは社會學の說としても非常に間違つたもので、一昔或は二昔前の說である。今日は實際の事實が少しも此說に裏書しないのである。

婚姻は普遍の結合形式

極く幼稚な時代に在つても、記錄の無い我々の知識の及ばない時代は分らないが、我々の知識の及ぶ限り舊い時代に於ては、人間は——一生變らないとは云へないかも知れぬが、そんな事を云へば今日だつてさうである。隨分離れて見たり又くつ附いて見たりして居る——。兎に角永續すると云ふ意思を以つて男女が——一人と一人ではないかも知れないが——結合することが社會の極く幼稚な時分からある。此れが人間の共同生活の一番原始の形式上の出立點である。此は男としての生活を充實する爲めにも、女とし

での生活を充實する爲めにも兩方なければならぬ。それを或は宗教或は政治上の理由或は一種の間違つた哲學の說の爲めに結婚するよりも、獨身の方が遙に良いと云つて男女を別々にして置く。例外の人間はあるもので其は別問題であるが、一般の人間に向つて別々の生活が良い、所謂禁欲生活が良いと云ふやうなことを說いた時代が隨分ある。歐羅巴でも基督教會の所謂修道僧侶は悉く獨身であつた。これは非常に間違つたことで大變悪い結果を來たして居る。世界中に於て性に關する最も重大なる犯罪は、獨身生活を無理に强制せられた耶蘇教の坊主の間に行はれた、佛教の坊主の間に行はれた。今日でもやはり大體さうである。殊に西洋の新聞を見て居れば分るが、加特力教國に於て(新教國にもあるけれども)非常に殘忍な性的犯罪が行はれる。是れは人間の性を充實しないのみならず寧ろ之れに逆行するからである。

社會も國家も家族より起る

家族から社會が起つて來る、國家も亦擬へてやはり一つの家としてある、國の君を父とし臣民を子とする。君臣の如くして而して父子の如しと云ふことが大變に尊いことゝ考へられて居るが、此は當然のことである。國家とは字で書いても『國の家』と書く、家と云ふものを土臺として居るのである。國家あつて家あり家あつて國家ありと云ふが、歷史的に云へば、家あつて而して國家があるのである。家と云ふ男女の結合が現はれて一つの家族が出來ると、其れが國家に近い國家に似寄つた形を取るものである。人類の共同生活はそれ以來色々變遷し色々な形態を取つたが、要するに足らない者同士が互に其長を以つて他の短を補ひ、長短互に相補ふ結合を作つたのである。今日も此點に變りはない。武に長けた者は文に長けた者と合體して其の長短を補ひ合ふ、資本家は金の力を以つて長とし、勞働者は其勞働の力を以つて長として居る、此れが合體して互に長短を補ふ。長短相補ふと云ふことは少しも變らない。長と長とが寄れば却つて隔離してしまふ。男女の結合でもさうである。女性にして極めて男性的なる者はどうも永く尻が落着かない、反對に男性にして女性的の者はやはり始終落着かないか若くは始終壓倒せられて尻に敷かれて居なければならぬ。これは本當の共同生活ではない。剛き者は剛き儘

に何處までも剛く其長を現はし、柔かき者は柔かき儘に何處までも其長を發揮して、初めて本當の共同生活になるのである。それが唯だ一人の男と一人の女との間の結合でなく、段々其範圍を擴張して所謂大家族となり、進んでは一村一町終に一國となつて、多數の人が色々其長を異にし、其の短を異にする者も繼ぎ合せて互に補つて行くやうになつて來た。これが今日の社會であるのである。

「社會結合の爲めの格段なる力」

此の社會を此の如く非常に複雜な非常に舞臺の廣いものにするには、唯だ自然の結びつきに委せて置くことは出來ない。自然の結びつきに委せて置けば中々寄り合はない、どうしても此れに一つの格段なる力を加へて之を結び付け組み合せなければならぬ。或は無理に組み合せることもある、或は自然に組み合せられることもある。組み合せられ得る樣な途を拵へてやることもある、其れが卽ち國家の爲すところである。であるから、社會と云ふことに我々が氣の附く數百年若くは數千年前に旣に國家と云ふことに氣が附いた。社會が無いのではないある、無論ある、社會あるが爲に國家があるのだけれども、我々の眼に映ずるものは社會としてゞなくして國家としてゞあつたのである。國家が其の仕事をしなければ何か之れに代つて國家の事をするものが起つて來る。日本には全く無いとは云へないが先づ無い。西洋では國家が其の仕事を長く怠つて居た歐羅巴の中世――暗黑時代と云ふのはそれである――に於ては國家に代つて此仕事をしたものはお寺であつた基督敎會是れである。今日でも「羅馬法王」と云ふものは段々其勢力は衰へては來て居るが、兎に角一國の君主のやうな形を有つて居る。今日羅馬加特力敎會が一つの侵されざる地位を有つて居るのは其爲めである。宗敎の團體に力があるのでも何でもない國家に代つて國家の事を行つただけのことである。恰度日本でも神佛混淆時代に神主の代りを坊さんがやつて居つたそれと同じ樣な譯である。神主の代りを勸める坊さんが更に進んで國家の代りをやるやうになつて「耶蘇敎會」が國家に代るやうになり坊さんが皆官吏であつた。それは日本に無いことであるが西洋ではさうである。隨つて羅馬法王は外國へ公使を出す今でも出したりやつたりして居る。日本へも

近頃來た、日本からも羅馬加特力教の法王の所に常住の公使ではないが、初めて使節が行くやうになつた、即ち外交上の一つの對手と認るやうになつた。兎に角羅馬教會は國家に代つて其の仕事をした、必竟國家が無能にして何もしなかつたからである。日本にはそんなことはない、日本では國家がズッとやつて居つたのである。國家の當事者は色々變つた幕府がやつたこともある、けれども幕府になつてもナンでも國家は國家である。日本では國家は少しも休んだことはない。獨り皇室が萬世一系であつたのみではない、日本では國家がズット昔から——其の當務者は變つて居る、それは何處の國も變る、人間は無限に生きて居るものではないから。けれども其の國家はズット續いて存在して居るのである。此の點に於ては日本だけが殆んど完全な——完全なと云ふのは形に就てである、實質は色々不都合なこともあつたけれども、形として完全な形を有つて來たのである。

殆んど國家に盡く

兎に角さう云ふ變遷はあつて、必ずしも國家其もの斗ではないけれども、國家に代る何等かの具體的の形が出來て、それが社會を堅め社會を維持して來たのである。であるから凡の我々の團集生活、共同生活はツイ近い頃までは國家であつた。我々の考へは個人の事を離れゝば即ち國家であるのみ、其の對立は唯だ個人對國家あつたのみで、個人對社會と云ふことは殆ど考へて居なかつた。我々のすることは國家的か或は個人的である。國家的の利害關係のないことは、個人的の利害關係である。國家の爲めに盡くすか個人の爲めに盡くすかであり、衝突するものも國家と個人とであると云ふ風に考へて居つた。實はさうではない、國家に對するばかりでなく社會に對する對立もあつたけれども、それを皆國家に纏めて考へて居つたのである。然るに十九世紀になつてから國家の外に社會と云ふことの考へが起つて來たのである。是れが即ち私が社會の發見と名くる所の事である。

第三章　經濟生活と人格生活

有限の生活と無限の生活

共同生活を營む人間は其の欲望を達するには何れも個人として働き總ての財は何人かの人の所有に歸着するのである。各個人は所有物を得るが爲めに働く、其の働きは個人の働きである。ソコデ個人の生活には經濟生活（財の生活）と人格生活の二方面が存する。人格の生活は前章に述べた如く無限なる生活無限に伸びて行かうとする生活である。人格は何處までも充實し發展して行かうとするものである。之れに反して經濟生活は、人間の內界の力並に外界の物と力とに限りあるが爲めに制限せられた生活である。此く人間の生活は一方は有限の生活他方は無限の生活の二方面を有つて居るものである。各個人が自分の生活を營む爲めに得る物は、分量上にも制限があり品質の上にも亦た制限のあるものである。總ての物は皆同じ働きを爲すものでなく、夫々特有の性質を帶びて居て、其の性質以外のことを許さない。釜を以つて薪を割ることは出來ず、杖を錐の代りに使ふことは出來ない。釜には釜の用しかない杖には杖の用しかない刀には刀の用しかない、其の本來の用以外のことは出來ないのである。從つて其の用其の物の有つ性質が、人間が使用し得る可能性なり範圍なりを限つて居る。

物の所有と支配

人は生活を營む爲めに物を所有せねばならぬ。物を所有するは物を支配する所以である。家屋を有つて居る土地を有つて居る多少の動産を有つて居る、家具、家財、衣類、書物、裝飾物を有つて居る。此く物を有つは己れのみ之れを支配し、他人をして之れを支配せしめざらしめることである。物は總て人の支配の下に立つて人の意思を承けついで、其の儘に左右せられて居る受動的のものである。他面に於て人は其の有つて居る物の爲めに制限される。自分が物を支配して居るのであるが其の支配して居る物の爲めに又

た支配せられる。これは國に就いても亦た同じことであつて、國は人民を支配すると共に又た人民に依つて支配せられる。國家は人民全體の意向の向ふところを無視することは出來ない。國民の爲し得る事以外のことはどんな强力な國家と雖も强制することは出來ない。英吉利の國家は英吉利人が出來ることしか出來ず、日本の國家は日本人の出來ることしか出來ない。物質上の財は如何に人間の工夫が進んでも其の用に限りがある。其の限りが又た逆さまに所有者たるところの人間を束縛し制限するのである。

質より來る制限と束縛

其の制限は、第一には質の上にある。所有する物の性質如何に依つて、所有者は品質上の制限を受ける。我々は生活を營んで行くに方つては、其れを以つて自分の所有する物が許すだけの事しか營むことは出來ない。土地を有つて居る者は土地を使ふことしか出來ない。其の土地が農耕地であれば農業しか營めない。山林であれば林業しか營めない。住宅地であれば住宅用にしか充てることは出來ない。文明の極く幼稚な時分から發達した今日に至るまで程度に變りはあるが、各人は有する物があれば――有つて居る物の無い人は別であるが――多少の財産を有つ人は、其の財産の爲めに一生爲すべきことを豫め定められ人格を拘束せられる。地主の子に生れて親から土地と云ふ財産を承け繼いだ者は、先づ以つて土地の管理經營を一生の仕事とする。親から八百屋を繼續した悴は、先づ大抵は八百屋を以つて自分の營業とする。一體人は何でも出來る譯である、殊に今日の營業自由の世の中に於ては何をしても差支ない譯であるが――無論多數の例外はあるが――原則としては其の人の有する物の爲めに自分の一生爲すべき仕事を限定せられる。此の事を哲學上の言葉を以つて有が在を限定すと云ふ。人間は其の力を發揮すれば殆ど神にも肉薄し得る働きを爲す者であるが、大多數の人間に就いて云へば左樣でなく、生れ落つると同時に拘束せられて居るものである。其の拘束者の第一は其の人の所有物である。此れが今日になつては大いに解放せられて、人間は所有物の束縛から著しく解き放たれて居るが、昔に於ては殆ど全く其れに束縛された。封建時代に於ては百姓は代々百姓、武士は代々武士、商人は代々商人になつて居つて、如何に天稟を

有するものも其の天分を恣まゝにすることは出來ない。與へられた財産を以つて爲し得る限りしか出來なかつたものである。隨つて人の人格の特性は所有物の特性によつて定められる。「社會的の分業と云ふも道理の上から割出した分業で無く、多くは先天的に人の生れ落つると共に定められた事が社會的分業になる。」

二個の相反する見解

之れに就いて社會學者、經濟學者の間に相反對した二つの説がある。或る一派の學者は人には天賦の才能の違ひがある、生れて賢なる者あり愚なる者あり、同じく賢と云ふ中にも、其の賢こさに色々度もあれば種類も違ふ。此れが卽ち人の所有する所有物の多寡、大小、種類を決めるのである。賢い者は多くの財産を有つやうになり、其の財産を盛んに活用することが出來る。愚かな者は財産を得ることが出來なくなる。隨つて社會上の分業に於て、愚かなる者は下の方の地位に就く賢い者は上の方の地位に就く、人の天分が本で其れから所有が定まると云ふ。之れに反對する者は云ふ、左樣ではない、所有の制度が社會に無い所に於ては左樣であるかも知れないが、社會の極く幼稚な時分から所有の制度がチャンと確立して居る。人は生れると同時に既に何等かの――澤山の物か少い物か――物を有つて居る。其の有つ物の爲めに天分を定められる。其の前提なく縱橫自在に出來るだけ天分を伸ばすものは極く少數である。社會上の貧富の懸隔は人の才能の相違賢愚の違ひのみから起るのでなく、抑も人が社會に出る時に既にそこに多少の違ひがある。然るに多く持てる者は基督の言葉のやうに『持てる者は與へられて猶ほ餘りあり』で、有つて居る者は益々そこへ類を以つて集まつて來て富が殖える、『持たぬ者は其持てる物をも奪らる』で、無い者は愈々益々無くなつてしまふ、此が社會分業の本であると云ふ。此く二つの説がある。何れの説が正しいと云へば、大體に於ては後の説の方が正しい。尤も非常な天才者、例外者或は天才でないまでも多少群を拔く人は此の原則を打破るであらう。けれども大多數に就いて云へば、此原則は非常な力を以つて人の運命を決めるものである。語を換へて云へば、「人の所有物が初めから其人格の生活を支配する。此れが品質の上に於ける物の支配である。」

量より來る制限と束縛

第二分量の上にも制限がある。同じ種類の物を有つ人でも、其の有つ物が千圓二千圓であるか、或は一萬圓二萬圓に當るか百萬圓二百萬圓に當るか千萬圓二千萬圓に當るかに依つて大變に違ふ。其の違ひは唯だ分量上で違ふだけ數的に違ふだけでなく、分量の違ひは累進的、累加的に其働きを强くする。或る人の有つ財産の多い寡いは、唯だ他の人と比べて甲は乙の十倍の財産を有つと云ふだけに止まらない、十倍であることは其の人の人格の伸張の上に於て大變違つた働きを爲すのである。概して云へば、所有財の多いのは人格の束縛を非常に緩くする。所有財の少いのは其の拘束縛りさ加減を愈々緊張して人を動かせないやうにするものである。辛うじて一つの商賣を經營して行ける位の財産しか無い者は、他の業に變へようと思つても容易に變へる譯に行かない。其反對に澤山財産を有つ者は一の事業を營みつゝ、尚ほ他の事を色々考へて財産の或る部分を割いて他の新しい事業を試みる、其れが成功すれば段々元の事業から自分の財産を回收して新しい事業へ注いで、終には全く違つた仕事をする人にも成り得る。僅かな財産しか無い者は其の餘裕が無い、始終生活に逐はれるから、與へられた財産の定めた約束の通り守つて行かなければならぬ。此れにもやはり例外はあつて、非常な天才拔群の力ある者は其れを破り、僅かな所有物しか無くても之れを自由に轉化することもある。乍去大體に就いて云へば、量の少いのは其拘束を緊縮せしめる。量の多いことは其の拘束を遙かに緩くする。此の二つの違ひが經濟生活と人格生活とを結びつける連鎖、兩者を架け渡す橋になる。然し如何に財産の種類が自由に應用出來るものであり、財産の分量が多く活動の餘地が大いにあるとも、やはり人の有つて居る財産が其人格を制約し、之れに影響し支配することには變りはない。

職業の分立による不具化

斯く制約せられると、自分の有つ財産によつて定められた一定の職業に向つて、各人は段々適當するやうになる。或は教育に依り或は傳統に依り或は唯だ習慣に依つて、八百

屋の子に生れた者はいつの間にか八百屋の商賣を覺えてしまふ。門前の小僧習はぬ經を讀んでしまふ。或る事に特に適することを營むことは、其の業に於ては人をして天分を發揮せしむることゝなると同時に、他方に於て其の以外のことに向つては其の人を不具にすることもある。例へば實業教育を授けて或る種類の實業に人を仕込んでしまふと、其業には適應するやうになるが、其の代り他の業は少しも出來なくなつてしまふ。商業學校で算盤と簿記とばかり教へて居ると算盤と簿記には長けるが、其の代り文學者にならう音樂家にならうとすると却つて其れが爲めに妨げられる。焉ぞ知らん其の人の天分は音樂家になるに適して居るかも知れない。然るに其の人の生れ落ちると共に定められた運命が、其の人を實業家たらしむべく決めた上に、更らに幾多の修練を經て行くから天分に反したことをしなければならぬ。反しつゝもどうやらこうやら之れを以つて一生の業とするやうになるが、其の代りに他の業には不適當となる。社會的の分業は、凡ての人を或る意味に於て或る程度までは皆不具にしてしまふものである。人をして或る一つの事には長けしめるが、他の事には何も知らない時分よりは却つて移りにくゝ

してしまふ。人の力が極めて限があるのみならず其の有つ財産、其れから定められた一定の職業の爲めに其の職業では力は發揮出來るが、其の職業以外のことに就いては殆ど無能になつてしまふから、彼れの活動範圍は更に限られた有限なものとなる。封建時代に於ては出來るだけさう云ふやうにした、成たけ人をして其職業以外の事を考へさせない、親代々傳はつて居る業に安んじて他の事に心を向けさせないやうにして居た。今日の社會はさうでなく、天分のある者は親の爲した事と全然違つた事、其の人の有つ財産が到底許さないことも出來るやうにしよう〳〵として居る。卽ち所有の束縛を破る力は大變強くなつてゐるけれども、破る力よりも固定する力の方が遙に强いのである。

「人格の格付と其解放」

人の共同生活に於ける地位は此く職業によつて定まる。或る職業は社會に於てどれだけの高さを有ち、どれだけの地位に在るかは定まつて居る。其の職業の地位が同時に其の人の其の人格の地位となる。人格は各人皆對等である。人格に甲乙の差異はない、

才能には違ひがあるが人格たることは如何なる貧乏人の子も、如何に卑い所に生れた子も完全なる一つの人格であつて、其間甲乙の差異はない譯であるにも拘らず、人の社會に出て來る時に其の人格に夫々格付けが出來て居る。斯く格付けられては居るが、人格其のもの丶本質として其れに甘んずるものでない。機會あれば出來得るならば其の拘束を破つて社會上固定せられた地位を脫して、其れより上に進みたい、一段々々と上に行きたいとして居るものである。それでなければ人格でない。此れは必ずしも名譽心が強い野心が強いからでない、苟も人格たる以上——缺陷のある人格なら別問題である、精神的異狀があれば致方もないが、缺陷の無い完全人格であり一人の人間である以上、何處までも伸びて行かうとする無限發展の要求を有つて居る。かくて人は矛盾に陷る。自分に定められた職業其の職業の有つ地位は固定して居るが、自分の人格は何處までも進んで行きたい。『王侯將相豈種あらんや』人に出來ることなら自分にも出來ると云ふ考へは、強弱の程度はあるが各人に皆ある、なければ人間でない物格に墮したものである。

耐へ難き矛盾

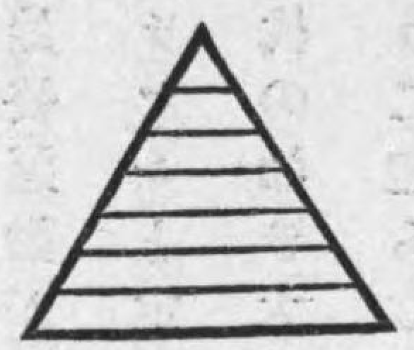
無限に進まうと云ふ傾向を有ちながら、實際の生活は限られた定められた地位に在つて、物を所有する人一つの職業を營む人は、其の所有物其の職業の主人である譯であるが、實際の共同生活の上に於ては却つて其れが使はれ人になると云ふことは耐へ難き矛盾である。土地を有つ者は土地の爲めに縛られて却つて自分の支配の下に立つ土地の從僕となる。よく下世話に云ふ『金の番人』で金持は金の番人になつてしまふ。金を有つて居るが爲めに何でも金々と云つて金を無くさないやうに唯だ金を殖やすやうに殖やすやうにとして少しも高尙な人格の要求に觸れることなく、金を殖やすことのみに一生を費して金の從僕になつてしまふ。金に就ては最もよく分るが職業も亦た同樣であつて、人は多く職業の從僕になつてしまふ。職業に忠實で之れに獻身的に全力を傾注することは是非しなければならぬことであるけれども、獻身的に努力すると云ふは決して從僕になることではない。臣下が君に仕へるには決して臣下の人格を沒却してしまつて

は本當に君に仕へられるものではない。臣下は何處までも臣下としての人格を以つて君に仕へて初めて本當の忠臣である。妻が夫に事へるのでも妻の人格を沒却し夫の奴隸になつてしまつては、本當に妻として夫に事へるのではない、奴隸として仕へるのである。妻は妻として何處までも獨立人格、夫に對抗した人格を有つて夫に事へてこそ初めて本當の妻である。子の親に對する僕の主人に對する目下の者が目上の者に對するも亦た然りである。然るに物質生活、財の生活に於ては、我々は殆ど例外なく皆主人でなく從僕となるものである。

社會に於ける上下關係と其破壞

此の從僕の關係は決して孤立した從屬の關係でない。人格生活も經濟生活も社會の共同生活の中に營まれる。「社會の中に於ては各人が夫々從僕となつて、其有する地位が人と人個人と個人との間の上下の關係となつて、財産の少い者は財産の澤山ある人に對して下位に立つ。位の下ばかりでなく人格の上に共れだけの拘束を披むることになる。」

一つの國一つの社會を形づくる個人は平列に竝んで居るのでなく上下的に組み合せられて居る。下から上に〳〵段々と積み上げられて、上圖の樣に幾つかの階段を有するピラミツドの形を作つて居る。トコロが下の者が非常な勢ひを以つて突進して急に上に出ようとすれば、社會の動亂を惹き起し社會の平和を破ることになる。上の者が從來有つて居る特權を更に擴大して下の者に對する壓迫を更に强くすると、此れ亦た社會の動亂を惹き起す。社會の動亂は多くは下から來る。下の者が上に出ようとする其の出るのが徐々でなく急なる爲めに、チヤンと定まつて居るピラミツドが崩れる。急に途中の或る部分が膨れ出して左圖の樣なとげ〳〵が出來る、此れが社會の動亂となる。國家の存在は社會の動亂の爲めに脅かされるものであるから國家は力を盡して此の如き動亂の起らないやうに起らないやうにとする。其の起らない爲めには或は壓迫も已むなくやることがある。兎に角さう云ふ可能の無いやうにすることが、國家存在の最も重大なる仕事の一つである。



「絶えざる內在的變遷」

斯く出來上つて居るピラミッドはいつも不動的に變らないで、永久にさう云ふピラミッドを成して居るかと云ふとさうではない、其中に於て絶えず運動が行はれる。突進的の運動は必ず常にあるとは限らない、時あつてか爆發するだけであるが、內部に於ける小なる運動は始終行はれて居る。上下の區別は定まつて居るが、少しづつ上の者が下になつたり下の者が上になつたり、或は橫に押出して見たり內の方に押込んで行つて見たり始終運動が行はれて居る。此の運動は卽ち社會の生命を持續し進めて行く運動である。チャンと定まつた儘で少しも運動が無ければ其の社會は死んでしまふ。日本の德川時代の如き大體に於て極く不變不動を主義として、何事も社會に新しいことの起らないやうに起らないやうにとして居つた。けれども其の德川時代にも斷へず進歩はあつた。進歩があつたからこそ今日我々が西洋の文明を呼び入れても、急にまごつくことなしに待つて居たと云はないばかりに之れを受け入れて、右から左へ着々之れを利用して行くことが出來るのである。唯だ急激な變化がなかつただけで運動は絶えずあつた。內部の運動の無い社會は死んでしまふ外はない。

「運動の最も著しきは經濟生活」

其の運動は何處に一番著しく現はれるかと云ふと經濟生活の上である。人は職業を營む爲めに物を有ち、其の有つ物の爲めに縛られて居るが、物を有つのは國民の總てゞはない。社會に段々人數が殖えて來、社會が段々大きくなつて來ると何も物を有たないで生活して行く人の數が段々殖える。さう云ふ人は唯だ自分の働き、勞働によつて生活する。「勞働によつて生活する者」は物を有つて居るのではないから、其の有つ物の爲めに制限せられ束縛を被むることは無い。從つて甚だ自由であるやうに考へられるが實はさうでない。我々の生活を維持して行くには必ず物的材料がなければならぬ。勞働を營むには勞働を施す對象物體がなければならぬ。百姓をする者には土地がなければならぬ。工業家は工業用の材料なり道具なり器具なりを持たねばならぬ。商人が商業を營

むには商ふ品物がなければならぬ。自分が其等の物を有つて居る場合には、其の有つ物に就いて百姓をし、工業を營み商賣をするが、其の物を有つて居なければ、之れを有つて居る人からどうとかして融通して貰はなければならぬ。

經濟生活特有の人格的束縛

玆に於て更に第二種類の束縛が行はれる。其は他ではない「勞働力しか有つて居らず財産を有たない者は、自分の要する材料、原料、器具、機械の類を有する財産所有者の支配の下に立たなければならなくなること是れである」。「物を有つものは其の有つ物の種類數量に束縛せられる。物を有たぬ者は物から束縛を被むるばかりでなく、其の物の所有者たる自分と全く互格なる他の人格の下に立ち其束縛を被むるのである」。「今までは人間と人間と財との間の從屬關係であつたが、今度は人間と財との從屬關係に加ふるに、人間人格と人格との間に於ける從屬關係が加はつて來るのである」。土地を有たない者が百姓をしようとすれば、地主から土地を借りて小作人にならなければならぬ。小作人は唯だ土地を借りて之れに對して小作料を拂へばそれで宜いと云ふものでなく、地主に對しては社會上に於て一等下な地位に立つものである。貸借の關係ばかりでなく色々な關係が之れに附いて來る。其の關係たる決して平等對等でなく上下の關係、服從の關係である。

人格の支配者起る

其の反對に物を有つ人は澤山有つ人は無論であるが、少し有つ人でも其の有つ物を他人に勞働の機會を與へる爲めに貸し與へる人は、其の貸し與へることによつて借り主たる人格を支配するやうになる。彼は物を支配するのみならず他の人格をも支配する。其れと同時に所有者が支配して居る物によつて縛られる如く、自分の支配する人格によつて自分が縛られることになる。主人は僕を使ふに方つて決して使ひ放しでは濟まない。自分の使つて居る僕の人柄の如何によつて其の人格もやはり束縛せられる。大變忠實に働く者ならば安心して委せられるが、動々もすると横着しさうな者は絶えず注意

して居なければならぬ。主人は人の取締り奉公人の取締りに非常に頭を惱まさなければならぬ。其れが爲めに他の仕事を打捨てゝ始終それに掛からなければならぬ。「恰も所有物は自分が支配する物であるに拘らず、自分が其れによつて支配せられる如く、他の人格を支配する人も、其の支配して居る人格によつて反對に自分も支配せられることになる。」「此れが極く顯著に發達したのが封建制度である。」殿樣は土地を支配し人民を支配し自分の幕下に澤山の家來を有ち、其れを支配して居るのであるけれども、やはり家來によつて始終縛られて居る、一刻も之れを忘れることが出來ない。之れを忘れて其の支配から遁れゝば其の被支配者は彼から離れてしまふ、彼等は謀叛を起して離反して行つてしまふ。始終之れを自分の權力の下に置かうとするには、自分も亦た其の支配を受ける覺悟がなければならぬ。

「斯く互に支配し合ふとは云ふけれども、其の支配の度は物を有たぬ者が有つ者に支配せられる方が強いのである」。卽ち社會が段々發達し經濟生活が進んで來るに從ひて、社會の中他の人格を支配する物の所有者――必ずしも金持とは限らない。金持は其の代表的の者であるが、大して金持と云はれる程の者でなくとも、多少の物持ち――は其の有つて居る物を通じて人を支配し、社會の大多數の者は何も物を有つて居ないから物持ちの爲めに支配せられる。卽ち社會は大體に於て支配する者と支配せられる者とで出來上ることになる。

「支配階級と被支配階級」

そこで自から二つの階段が出來て來る。社會に於て主として支配する階級、自分も支配を受けるが其れより支配する方が遙かに強い階級、之れを先づ支配階級と云ふ。其反對に支配せられ通しの階級を被支配階級と云ふ。封建時代に於ても支配する者と支配せられる者との間の利害の違ひは無論あつた。けれども未だはつきり意識せられ社會を根本的に動かす力にならなかつたが、資本主義の今日の社會に移るに從つて其が段々著しくなつて來て、社會內に殆ど二つの別の社會があるが如く各々違つた極端をなして支配する階級がこちらの端にあれば、支配せられる階級はこちらの端にある、其の間に中

間者として色々なものがある。それが平面的でなく支配する階級が上に行つて支配せられる階級が下に來て中間者は間に挾まれて居る。中間者が無くなつてしまへば、支配する階級と支配せられる階級とが直ちに當面に對峙するやうになる。尤もさう云ふ國はまだ何處にもない。中間者が全然なく支配階級、被支配階級のみが直接ぶつかつて居ると云ふやうな極端な社會は無いが、國によつて中間者が大變多く兩者の間に廣く跨がつて居る社會もあれば、兩者の間の隔たりが段々稀薄になつて來る社會もある。

流通經濟と支配の增進

支配被支配の關係は流通經濟の進步と共に增進する。流通經濟に於ては物はすべて誰人かの所有中にあり、新たに作られたものも亦必ず誰人かの所有に歸する。人間の働いた結果は、直ちに人間の用に充てられないで一先づ誰人かの所有物になつて、然る後に人間の用に充てられる、是れが流通經濟の常態である。然るに明治維新以前の日本の農家の大多數は自足經濟を營んで居た。即ち自分のところで作つた物は大體自分のところで使つてしまふ。田で出來た米、畑で出來た麥稗を食べる、家内で織つた布子を着て居る。他所へ賣出す物も殆どなければ他所から買ふ物も殆どない、作られた物は直ぐに人の需要に充てられる。無論それは其百姓の所有物である。けれども、所有物とは他に對抗して、他の人をして其れを使はしめない時に於て初めて十分の意味を成すのである。自分の所で作つた物を自分が直に使つてしまふ、今朝畑で取つた物を今日直ぐ食べてしまふのは、所有物と云ふ明白に限られた階段を經過しないのである。だから自足經濟が行はれて居る社會に於ては、物が作られて其れが用ゐられる間に一度必ず所有物になるとは云へない。所有物になる物は寧ろ例外的の物である。作られてから使はれるまでの間が、特に永い間を經過する物だけが所有物として社會の表に活躍する。金持とか地所を澤山有つて居る大地主とか、或は殿樣とか大きな商人とかの所に出來た物は、迚も一軒の家で直ぐに使ひ切れないから、之れを所有物として社會に存續して置く。封建時代にもさう云ふものは隨分あつた。殊に各藩に於て百姓から取上る米は、之れを商ひの品物として日本で云へば大阪で賣出したのである。それは確に所有物になり商品となつ

て賣買せられた、然し日本の米の大多數に就て云へば、作られた所で直ぐ使はれて所有物にはならなかつたのである。ところが今日はさうでない、今日は自足經濟は殆ど廢れてしまつて、片田舍の百姓と雖も皆所謂流通經濟に入つて居る、流通經濟の意味は物が出來てから使はれる迄の間に流通する、グル〳〵人の手の廻ること是である。人の手を廻つて居る間が、卽ち或る人の有である、それが所有物財產である、之れを商賣の上から云へば一つの商品である。今日の經濟生活の特徵は商品生產と云ふことにある。直ぐ人の用に充てることより寧ろ商なひの品として賣出すのに、何れが一番利益があるか何れが一番販路が廣いかお客樣が多いか、どんな品物を作つたならば商品として一番利益があるかを目當として物を作る。昔の自足經濟時代のやうに自分の使用を考へ自分が食べると云ふ目的で作るのでは無い。自分が欲しい物を作るのと全然反對で、作る人は自分がそれを使ふことは殆ど考へに無い。自分は却つて他所から物を買ふ、自分の所で作つた物は全部を擧げて、之れを世間に出して賣つてしまふと云ふのが今日の流通經濟生活の特徵である。さうなると自分の作つた物は一度は皆誰人かの所有物になるから、其の所有物の主人卽ち所有主の支配を――短い間か或は永い間か時期には長短はあるが、兎に角或る時期の間――必ず被むらなければならぬことになるのである。物を作る人、勞働する人は取換引換であるか或は引續いてゞあるか、兎に角他の人格の支配の下に立たなければ勞働が出來ない。それが嫌やだとならば何もしないで居る外ない、自分の勞働を用ゐるところが無いことになつてしまふのである。

所有の種類と支配の種類

所有には土地の所有貨幣の所有企業の所有の三種類がある。土地の所有は之を不動產 Landed property 或は Immovable property と云ふ。貨幣の所有は之を動產 Monied property 或は Movable property と云ふ。企業の所有は言葉が甚だ不適當であるが、今日一般に資本 Capital と云ひ、企業を所有する者を資本家若くは資本主と云つて居る。この種類の違ふによつて人を支配する加減も亦た違ふのである。土地の所有者卽ち地主の支配とは地主對小作人の關係である。近來日本では岐阜縣を始め各地に非常に小作の騷動が起つて、小作人

が從來の地主の壓迫に甘んじないで、ドシ〳〵小作料をまけて呉れと値切運動を始める。地主の方でそれに應じないと小作地を返してしまふ。さうして他から其の土地を借りに來る者でもあると邪魔をして借りさせないやうにする。地主は耕作地を返されてしまつた、自分が其土地を耕せば宜いけれどもそれだけの人が居ない。そこで作男を雇はうとすると小作組合で妨害して耕作させないやうにする、つまり土地の持ち腐れになつてしまふ。土地の持ち腐れになるよりは値切られても仕方がない、少しなりとも小作料が取れる方が宜いと云ふので、地主の方が泣き寢入りになつて居る所が隨分ある。岐阜縣の如きは中々猛烈な勢ひである。それ以來各縣に於て洵に燎原の火の如くと云つても宜い位非常に急速の勢ひを以つて、最近二三年間地主に對する小作人の反抗が熾んになつて來た。此れは土地所有の支配關係の根柢が動搖し始めたことを示めすものである。此れは日本の將來に取つて最も重大な社會問題である、國の基礎に關する大きな問題である。此の頃勞働問題が大いに人の耳目を惹いて居るが、日本で云へば資本主對勞働者の勞働問題よりも、地主對小作人の小作問題の方が遙かに重大な問題である。他の國に例を見ない位に地主が一つの階級之れに對抗した小作人が他の一つの階級であると云ふ對抗が段々顯著になつて來た實に重大な問題である。第二は金を有つて居つて他人に此の金を貸し付ける。或は單に貸金として貸付けるものもあらうし、或は事業に資本を投ずる形に於て貸付けるものもあらう。兎に角金を貸して此れから利息を取る金貸と、其金を借りる金借りとの關係である。金貸と金借りの關係は、地主と地借との關係よりは餘程稀薄であつて人格の束縛は餘程薄い。ところが第三の企業の所有になると其の關係が更らに甚だ濃くなつて來る。資本を有つて居る者資本主は企業を有つて居る、工場を設備しそこに機械を据ゑ付け材料も皆自分が調へて、さうして勞働者を一日幾らと云ふ時間給賃銀なり、一仕事幾らと云ふ出來高賃銀を以つて雇ひ入れて仕事をさせる。約束した賃銀を拂つて出來上つた物は悉く皆自分の所有に歸してしまふ。此の企業の所有者と、其所有者に雇はれる雇はれ勞働者（雇傭勞働者）とは大いに利害關係を異にして、人格の束縛壓迫を著しく感じて爭つて居るのが現今世界の大勢であり、日本にも此の頃は大分增加して來た。勞働爭議とは卽ち此謂である。唯だ一時の爭ひも大分

あるであらう人に雷同したのも大分あるらしいが、又どうしても今までの通りにしては置けなくて、實際爭はなければならないことも確かにある。此く種類の違ふによつて人格の束縛壓迫の種類も違ふが、どれを通しても兎に角一つの人格が他の人格の下に立つことになると云ふのが、今日の經濟生活の實狀である。

三者を兼ぬるもの

此の三つの種類を兼ねて、土地も有てば貨幣資本も有ち企業も有つて居ると云ふ場合には、三種類の人格が悉く其の下に從屬するから、其の人格支配は莫大なものになる。今日の所謂資本家は、單に企業の所有者であるのみでなく土地の所有も同時に兼ねて居るか、土地の所有は兼ねて居ないとしても貨幣の所有は大抵兼ねて居る。卽ち貨幣の形に於て或は何時でも貨幣に換へらるべき資本の形に於て財產を有つて居るのでなければ、企業を經營して行く事が出來ない。事業經營の資金がなければならぬ、金持であると同時に企業者卽ち人の雇ひ主であり、資本主であると同時に雇傭主卽ち主人であると云ふ二つの資格を具へて居るものである。此れが今日の勞働問題を有らゆる社會問題の中に、一番重大なるものであるかの如くに見せしむる所以である。必ずしも重大でない場合でも、重大であるかのやうに見せしむるものである。

以上を要言すれば

以上說く所を一言に約して云へば、我々は人格生活經濟生活の二方面を有する者であつて、人格生活は無限に伸張せんとするものであるのに經濟生活には幾多の制限があり、其の制限は軈て人格の支配關係を產み出す、殊に今日の流通經濟生活に於ては、其支配關係が甚だ有力にして廣汎なものとなり、就中三種の所有又は二種の所有を併有する企業者が、雇傭勞働者に對する支配關係は極めて廣汎且つ有力にして又濃厚なものである。從つて其が爲めに被むる人格生活の制限、人格の支配的壓力は甚だ大なるものである。經濟生活と人格生活との衝突は、此の企業資本對雇傭勞働の關係に於て最高頂に達して居ると云ふことは是れである。

第四章　共同生活による人格の解放と制限

「共同生活の作す出り新人格」

我々は其人格生活も經濟生活も共に之れを共同生活の中に於て營むものである。其れと共に我々の生活を維持する行動は、共同生活の中に於ける個人的行動である。而して此く我々の生活を共同化するによつて、個人以外に更らに一つの人格が作り出されるのである。小さな個人人格の上に大きな多數のものを包含する人格が新たに生じて、個々の人格は大きな人格の中に入り大きな人格の働きを受けるに依つて、「個人の人格生活と矛盾する經濟生活との交渉を圓滿にしつゝ行くものである。」人格は意思を有つて居つて、其の意思を發現する爲めに行爲を營むものである。行爲とは一つ〱の事に就いて云ふ時のことで、之を連續したものは行動である。人格の本質は自決的たること、換言すれば他から支配を受けないこと是れである。他から支配を受ければ其れだけ人格が制限せられて完全な人格の發動でなくなつてしまふ。完全に自決的であり完全に自から支配するものであつて初めて之れを人格と云ふ。故に人格が意思するとは自決することの謂である。自決するに就いて個々の事に對して考へを起すことが意思である。其意思は之を行爲の上に現はすので、自決の意思から出た行爲は是れ亦た自決の行爲である。其行爲を連續したものは卽ち自決の行動である。

孤立生活の自決と束縛

共同生活を營まず孤立して居る個人は、其の人格生活に於ては總て自決的なることを得るのである。誰人も他人の掣肘を受けることなく自分で一切を決定し得る。其れと共に其の自決は經濟生活の爲めに限られる。ロビンソン・クルーソーが絕海の孤島に居つた時には自分一人で何をしても構はぬ、彼の上には主人もなければ資本家も何もない。極めて自決的に完全に人格が發動し得るかの如くであるけれども、實は決して左樣でな

い。ロビンソン・クルーソーの生活は有つて居るものが極めて不足である、道具も足りない何の設備もないが爲めに、外界の自然から非常な制約を受けて居て思ふことが中々成らない。非常に苦心慘憺して辛うじて自分の一身の生命を支へて行つた。然し段々其の工夫が積んで來ると制限せられた外界を稍々自由に自分の意思に從はせることが出來るやうになり、幾らか餘裕が出來て來た。卽ち其れだけ經濟生活の制限を免れたのである。

共同生活による經濟生活からの解放と束縛

我々は共同生活を營むによつて第一に此の經濟生活から來たる制限を免れるのである。人は孤立して居れば經濟生活より來る壓迫を受けなければならないが、社會を作るによつて其の力が非常に殖える、各人の働き振りは非常に能率を增す、其れに依つて自然の物は不足であり我々の力は足りなくとも、其の足りない力を與へられた條件に於ては最高の能率にまで引上げることが出來、幾分なりとも經濟生活の束縛から脫れるに至るのである。其の代り共同生活を營むによつて人格が人格と相接觸するから、人格同志が各々制約する。乃ち經濟生活から來る壓迫は著しく免れ得ると同時に、他方に於ては他の人格の爲めに大いに制限せられることになる。勞働者が山の中で自分一人で勞働して居れば資本主も居ず雇主も居ないから、勞働問題も何も起らずストライキなどと騷ぐことはない。其の代り彼れは極めて乏しい生活しか營むことは出來ない。然るに一度彼が都會の地へ出て來て、工場に雇はれ資本主の下に雇傭勞働者となるとなれば彼は外界の財の生活から來る束縛は大いに免かれて完全なる機械を用ゐる十分に供給せられる材料を以つて仕事に從事することが出來る。其の代り彼れの上には工場長あり技師長あり社長あり、色々な人格が自分の上に折り重なつて居つて、其れに抑へられ其の命の下に働らかなければならない。社會問題が起り勞働問題が起るのは是れからである。

新なる矛盾

此の如く我々の生活が共同化するによりて又新たなる矛盾が起る。これは原始的の矛

盾ではない「文化的の矛盾である。」原始的の矛盾とは人格生活と經濟生活と直接ぶつかる矛盾有限と無限との當面的衝突であるが、社會化し同共化した生活に於ては、財の生活に於ける羈絆からは著しく免れ得る代りに新しい人格の束縛が起つて、其束縛と他方に於ける解放とが一致しないことになる。ところが抑々共同生活を營むのは人格が出來るだけ羈束なく發動したい爲めである。但しさう特別に明言し約束して社會を拵へた譯ではないが、現に人あれば卽ちそこに社會があるのは、人間に無限なる發展向上の欲望があるからである。其の無限な發展向上の欲望は、人格の自由なる妨げられざる發動を要求する。然るに其の爲めに社會を作るによつて、此の人格が束縛を被むることになるのである。斯くて自から進まんとすれば進む途を絶たねばならぬことになり、玆に新なる矛盾が起るのである。

共同化の形は人格の創成

此の共同化の形は樣々に變つて來たが、前段に言つて置いたやうに、今日までは國家と云ふものを形づくるに依つて實現して居る、今日では國家以外に國家に類似した共同生活の發現體が澤山殖えて來た。卽ち自治體、會社、組合其他の各種公共團體、公益團體等何れも共同化の形である。此等各種共同體中最も有力にして、最も發達し充實して居るのは國家である。其の發達は何れに現はれて居るかと云ふと、國家てふ共同體に於て個人人格の外に個人人格の上に、更により高い更により大なる人格が出來ることが是である。他の團集團體は未だ國家ほど十分に一つの人格を形づくつて居らぬ。人格を形づくるとはどう云ふことであるかと云ふと、其れ自からの意思を有つ事である。他人に與へられたのでなくして其れ自からの自決的の意思を有ち、其意思から出る自決的の行爲を爲す、之を連續すれば自決的の行動によつて立つことが是れである。今日の國家は國家としての意思を有つて居る、之れを名けて國家意思と云ふ。國家は又た國家行爲を爲し國家行動を營むものである。他の何者によつても與へられるものではない、國家其のもの、存在の意義から國家は一の人格を成すものである。

個人人格と國家人格

國家と云ふ大きい人格と國家を構成して居る個人の人格とはどう云ふ交渉を爲すか。

個人は個人としての人格生活を有つと共に、又た國家の一員としての人格生活を有つ。ところが國家は個人を離れてあるものではない、個人が集まつて初めて國家が出來るものである。從つて國家の自決的意思、自決的行爲を完全ならしめ、國家が他に從屬しない完全なる人格である爲めには、國家を形づくつて居る各個人の人格を完全に自決的にしなければならぬのである。國家が國家を形づくる國民の人格を制限すること多ければ多い程、其の國家は自分の人格を束縛することになる。束縛せられた者が寄つて作る國家の國家人格は制限せられたものである。個人の自由を出來るだけ認め、個人の權利を出來るだけ伸張せしむるは、個人の爲にするのみでなく、國家自からの爲めに國家自からの存在の爲めに是非しなければならぬことである。故に國家は其の存在の根本要義前提條件として、國家を構成して居る國民を出來る丈け自由に取扱はねばならぬのである。自由でなければ人格はそれだけ傷つけられ破られる。傷つけられ破られたる人格を以つて成る國家は、傷つけられ破られたる國家である。故に國家は自らが瑕なく汚點の無い國家たらん爲には、其國民を束縛することを出來る丈け少くせねばならぬのである。

國家人格に於ける一矛盾

個人以外に最も發達した人格たる國家人格は、又た其れ自からに一の矛盾を有つて居る。國家本來の存立の要義としては、國家を構成する個人人格を出來るだけ自由にするによつて、自己が自由な活動を爲すものにならねばならぬものでありながら、さて實際此の國家を建てゝ行くにはそれではいけない、少くとも今まではいけなかつた。國家の單位たる個人人格に制限を加へ、其自由を束縛することによつて今日まで繼續して來た。これが實際の事實である、卽ち實際の事實と國家本來の理想とは矛盾して居る。

國家なければ個人は滅ぶ

實際と理想とは大いに遠ざかつて居る。けれども遠ざかつて居る現實でも、若し此れが無かつたならば、個人の人格は單に制限束縛を被むることが厭やさに、それを捨てたならば人格其のものは亡んでしまふ、國家なき個人は死ぬ外はない。個人の生活に取つては、國家は空氣、光線或は水の如くに是非無ければならぬものである。我々の物質的存在に空氣、光線が無ければならぬ如く、我々の精神的生活には國家は是非無ければならぬもので、我々個人は國家の內に於いてのみ生き得るものである。

國家人格は完成

此の事を皮相に觀察して國家は一つの權力なり、國家ありと云へば卽ち必ず壓迫ありと考へる人がある、これは一を見て二を知らざる論である。國家が權力たるに止ることは、今迄の歷史に於て國家の發達が未だ幼稚な時代に於ての一事實である。歷史上の實際の事實としては國家は慥かに最高の權力である。然し權力であることは決して國家本來の存在の要義ではない、國家は人格の完成である。國家が一つの權力たるに止まるのは國家がまだ幼稚であるからであつて、發達した時代に於ては國家存在の最要義は、其れが完全なる一の人格たりと云ふことにあるのである。文明の發達は如何にして此の缺陷のあり瑕のある國家人格を完全なものとすべきか、之れに向つて努力することに存する。國家人格を完成するは個人人格を完成する所以である。其れと同時に個人人格を完成するは國家人格を完成する所以である。昔から屢々繰返された『國家あつて個人あるか個人あつて國家あるか』と云ふ問題は、無用の問である問を成して居ない。個人は國家の爲めにのみ生きてゐるのでもなければ、國家は個人の爲めにのみあるのでもない。人があれば卽ち國家がある。國家があるには個人のあることが先行條件である。國家に奉仕するは自己の人格に奉仕することである。他の人がやつて呉れるだらう國家人格の完成の爲には他の人が盡すから、俺は國家人格の完成の爲めに盡くさないで、唯だ自分の利益だけ圖れば宜いと云ふやうなことは出來ない。自分一人が仲間から外れゝばそれだけ國家人格の完成が遲れる。微小なる一人々々と雖も、自分の人格を完成することは國家人格を完成することに貢獻する譯である。唯だ其の現はれ方には得る利

益よりも及ぼす害の方大なることが幾らもある。政治上の革命の如き其れである。革命の爲めに國家人格を大いに進めたこともあり又大いに害したこともある。其の現はれ方に就ては大いに違ひがある。けれども個人の行動が國家の人格の完成に向ふべきものであり、又た知らず識らずの間に向つて居るものであることは事實である。

國家以外の共同生活

ところが我々の生活は其ればかりではない。國家人格の完成の爲めにのみ一切を捧げてしまつて居るのでなく、其の他に又た色々の事を爲して居る。國家以外に爲して居る我々の行爲と雖も、全然孤立した行爲ではない、やはり共同生活の中で營まれて居るものである。其方面を何と名けて宜しいか。「國家に直接の關係の無い人間の共同生活上の色々な運動種々な仕業は何と名けるかと云ふと、普通之れを社會と名けて居る。」

所謂國家と社會との衝突

そこで國家と社會とは衝突する、國家の要求と社會の要求とは兩立しないと考へる人がある。乍去これは一の謬見である、其は社會は國家の中にある、或は社會は國家と別に竝んであるものと見るから來た間違ひである。國家と云ひ社會と云ふのも、つまり我々の共同生活の全體に他ならない。其他に何もあるのではない唯だ見方が違ふのである。一つの物を上から見ると横から見る或は下から見るとの違ひである。此物に二つあるのではない、人間の共同生活に二つあるのではない。共同生活は一つの體を成す渾一體である、決して相衝突するものではない。

國家に關する謬見

然らば如何なる見方をした場合が國家であるかと云ふと、今までの說では統治の關係に於て結びつけられて居る點から見たものが國家であると云つて居つた。ところが統治とは中々說明が難かしいから、分り易くそれは卽ち權力關係である。權力關係によつて結びつけられて居るものと見た場合の渾一體としての共同生活、それが卽ち國家であ

ると斷う云ふやうに今までは說明して居つた。然しこれは甚だ舊くさい囚はれた考へ方である。一時或る時はさう考へた方が當を得て居つた場合もある。卽ち佛蘭西革命時代の如き是れである。今日は佛蘭西革命の時代とは大變違つて、人間の考へが非常に進んで居るが、然し國家の學問政治の學問は遙かに進步が後れて居るから、統治殊に權力關係と云ふ具體的のものを以つて說明して居る。乍併權力は唯だ一つの手段である、治めるに就ての一つの手段である。若し權力を行使しないで人類の共同生活がより完全に行くならば無論權力は要らない。唯だ今までの人類は權力關係に依つて無理に形を與へ鑄型を與へて入れなければ混沌として纏まらなかつた。そこで權力關係によつて其の鑄型へ入れることを統治と云つて居つた。無論如何なる世になつても國家がある限り、人間の共同生活が存する限りは統治をしない事はない、全然無統治と云ふことはあり得ない。其れと同時に權力統治が國家の存在の本義であり國家の本質である時代は疾くに過ぎ去つてしまつた。より高いより先きな事が國家の本質であり國家の仕事であるのである。

國家眞正の本質

其のより先きなる事とは何か我々が人類の共同生活に於て國家と名けるのは、人類の共同生活の形——一つの共同生活であるけれども、其の形は色々に現はれる——其の色々な形の中で、一番人格性を多く具へて居るものを云ふのである。他のものにも人格性は無いのではない、皆人格性を帶びんとしつゝあるけれども、中には極く僅かな人格性しか具へて居ないものもある。稍々多く具へて居るものもある。段々度合があるが其の中で一番人格性を餘計具へ、個人の人格生活と殆ど異ならない人格を有つて居るものが國家である。

國家人格は未だ個人人格と同一ならす

然らば國家と云ふ人格は個人の人格と全く同じものであるかと云ふと、左樣ではない、まだそこ迄は至つて居ない。何故至つて居ないかと云ふと、我々個人の人格は一刻も休

むことがない、絶えず行動しつゝあるものである。一瞬間と雖も行動しない人格は無い。個人人格は絶えず行動して居る人格である、寢て居つてもやはり行動して居る。寢る事は一つの行動である休息と云ふ行動である。死なない限りは生れた瞬間から死ぬ瞬間まで、我々個人の人格は絶えず行動しつゝある。色々の行爲を繰り重ね〳〵して連續して行動しつゝある。隨つて我々の個人人格の意思自決的の意思は絶えず働く、それは惡い方に働くこともあり善い方に働くこともある。善惡兩方の爲めに働いて居るが、兎に角始終働いて居る。故に個人人格を譬へて見ると、廻つて居る獨樂の如きものである。唯だの獨樂ではない廻つて居る獨樂でなければ個人人格でない。廻つて居るのは或る力がそれに始終加はつて居るからである。靜態に於てない絶えず動態に於てあるものである、絶えず運動して居るものである。別段説明しなくとも直ぐに分ることゝ思ふが、抑々此宇宙は運動である、動いて居ない物は何もない皆動いて居る、併し動いて居る物の中でも、比較的に動いて居る物と比較的に動いて居ない物があるから動と靜とに別つ、けれども靜と雖も實は皆動いて居るのである。例へばコップは机の上にチヤンと乘つて居る動きはしないようであるけれども、實は非常に動いて居る。一分間に何里かの速力を以つてグル〳〵地球と共に廻つて居る。乍去地球の表面に於てはコップは靜の狀態に在ると云ふ。我々の生命は絶えず動いて運動して行くことに依つてのみ保たれて居るのであつて、運動して居なければ死んでしまふ、絶えず脈が打つて居るによつて生きて居る、個人の人格は絶えず行動して居る。ところが國家の人格は必ずしもさうでない。國家としての行動を全く停止してしまつて居ることもある、又は全くは停止しないが、間歇的の行爲のみで連續的の行動と云へない場合がある。例へば露西亞の如き或は支那の如き他の國家に比べれば、連續して居る人格性を有つて居ると云へない、それでも國家である。又た代議政體を布いた國に於ても例へば日本の如きは代議政體を布いて居る、卽ち人民と云ふ個人人格が國家人格の行動に參與して居る。從つて其の生命は餘程充實して來て居るけれども、帝國議會の開會期は一年の內僅かに數十日で、あとは帝國議會は休みである。帝國議會のある間は政府も民間も緊張して居るけれども、議會が先づ濟んだとなるとダラリとしてしまつて、ヤレ賄賂を取つた疑獄が起つたと云ふことが起つ

ても左程問題にならぬだから議會中だけ押伏せて置く。何とか郵便局長が印紙を澤山盜んで賣つた。これが議會中に現はれた日には大問題になつて遞信大臣は大變だから、議會中は新聞記事を差止めて置いて議會が濟んだらパツと發表するとか云ふ。新聞はヮィ／＼書くけれども、モゥ議會が濟んで居るから當局者に肉薄して責に任じせしむる迄に行かない。英吉利の如き代議政體になると、議會は必ずしも始終やつては居ないけれども、其會期は長いし又た議會が濟んで居る間は常設委員があつて、何時でも必要に依つて集まるやうになつて居るから、人民は殆んど絶えず國家意思の發動に參與して居る。英吉利の國家は日本の國家より遙かに餘計生きて居る國家である。英吉利に比べれば日本の國家は、一年の內八ヶ月は半は寢て居つて、あと三ヶ月だけ生きて居る餘程情け者である。支那の如きになれば殆ど始終寢て居て時々ヒョイ／＼と眼を覺ます。それで辛うじて國家の存在が分る位のものである。無論其の間と雖も何かの行爲はして居るが、之れを個人の人格に比べれば意思が絶えず發動し絶えず其れから行動が出て居るとは云へない。無論代議政體で帝國議會がなかつたところが國家の活動は一時と雖も止んで居ない絶えずある。國家は行政を絶えずやつては居る。けれども其の絶えずやつて居るのは國家の機關たる官吏國家の機關たる官廳が動いて居るので、必ずしも國家が動いて居るのでない場合が幾らもある。一定の方針を定め夫々の機關を拵へ夫々の役人を任命して之れに仕事をやらせる。其の仕事をやる人は個人である。個人人格としてやつて居る。個人人格は絶えず働いて居るから、官吏となつた者は始終官吏として働いて居る一刻も休んで居ない。乍併それは必ずしも國家人格の活動であるとばかりは云へない。否國家人格を傷つけたり國家人格の要求に逆行した事も、隨分官吏としてやつて居る。其の極終に國家を亡ぼすやうになることもやつて居る。であるから國家人格は有らゆる個人人格以外の人格の中では完成したものであるけれども、未だ個人人格と全く同じな自決意思が絶えず働き、絶えず自決行動を爲しつゝある人格とは云へないのである。

人格としての株式會社

「今日に於ては國家に殆ど比しても宜い位に、經濟生活の上に於て人格性を多く具へて居るものは株式會社である」。各種の會社も皆左樣と云へるが株式會社は殊にさうである。株式會社は一つの人格である、法律の言葉では昔から『法人』と云つて居るが、法律で法人と云つても云はないでも――日本では明かに法人と認めて居るけれ共、歐羅巴の法律獨逸の法律では株式會社は法人であるかないかゞ定つて居ない。學者の間に色々の說があるが、經濟上から見れば株式會社は慥かに一つの人格である營業人格である。株式會社と云ふ一つの人格が起つて來たことは、我々の共同生活に於いて國家なる人格が發動して來たに殆ど比して宜い位の大進步である。我々に與へられて居る解け難い根本的の矛盾を解くに於て、國家にも殆ど比べて宜い位の大きな力を株式會社と云ふ形は有つて居る。勞働對資本の爭ひに於ても、資本家が例へば古河と云ひ住友と云ひ三菱と云ふやうな、兎に角現實にそこに生きて居る人が眼の前にある場合と、其が株式會社である場合とは大いに違ふ。株式會社の重役は勞働者と同じく會社に雇はれて居る人間である。雇つて居る主人は生きて居る人間個人人格でなく、何々株式會社である。同じ人格に壓迫を加へると云つても其感じが大いに違ふ。自分と同じ飯を食ひ自分と同じ喜怒哀樂の情を有する人間に二六時中ガミ〳〵小言を云はれて居る場合と、何々株式會社と云ふ人格に小言を言はれる場合とは感じ方が違ふ。此れは國家生活の上に於ては分つて居る。惡い事をすれば無論であるけれども、惡い事をしなくとも國家が命令を下す。何だ馬鹿な人を輕蔑して居ると思ふ場合でも、國家と云ふ人格が命令する場合にはそれが有り難く聞える。或は有り難くないまでも嫌やな感じを起さないで、喜んで其の命令に服從し得るやうになる。尤も人に依つては却つて反對に、國家の命令だから反抗すると云ふやうな不逞者も無いことはないが、それは變態心理の人間である。常態の心理を有つて居る者は、同じ事でも或る自然人が命ずるより、國家が之れを命ずる方が遙に尊い遙に高尙であり遙に服從し易い。例へば裁判は國家の名に於てする天皇の名に於てすると云ふ、國家の名に於てすると云へば、之れを破らうとする念が殆ど無くなつてしまふ。大岡越前守がいくら名判官であつても、越前守個人が下した判決では昔なら宜いけれど

も、今日なら少くとも大岡越前守が勝手に裁いた、所謂大岡裁きでは服從しない。大岡さんより遙かに智慧の足りない今日の判事がやつたことでも、國家の名に於てする判決の方が遙に服從し易い、株式會社はそれに均しい。勞働問題として勞働者が對抗するとき、自然人たる資本主には反對しても、對手が株式會社である場合には其の事情が餘程違ふ。無論重役は罷めやうと思へば何時でも罷められる。乍併重役を罷めることは決して會社を破ることにならない。重役を罷めても會社は依然としてある、却つて廓清されてより善くなることがある。恰度國に於て責任内閣――人民に對し或は議會に對して責任を有つ内閣の制度の方が無責任内閣より遙かに良いやうに、株式會社になつた方が個人事業の雇ひ主、個人事業の資本主より――尤も他の點に於て反對な作用があるけれども、――其の點に於ては勞働問題の解決に大變良い。今までは生きた人間でなければ營業の主人になれない、所謂企業主にはなれなかつたが、今日では生きた人間でない人爲人格が企業主になれる、會社或は組合が企業主になれる、さう云ふ新しい人格が現はれて來たのである。然し乍ら此等は國家に比べればまだ遙かに人格性の乏しいものであつて、現に學者の中でも株式會社に於ける主人は一體株主であらうか、それとも重役であらうかと云ふ問題がある。會社の株主は其の會社の資本を出して居るものであるから會社の主人である、株式會社に於ける企業主は株主であると云ふ說と、イヤ株主は唯だ資本を出すだけであとは何も關與しない、年に一遍か二遍株主總會に出て來るだけのものである。帝國議會より遙かに關與權の少いものだ、帝國議會は少くとも一年間に三ヶ月集まつて國務に參與するが、株式會社の株主は年に一遍か二遍株主總會に出て來て、それも大抵事がない時分には二十分か三十分で散會してしまふ。貸借對照表を示し損益決算を示して利益の配當さへ相當にあれば贊成々々で決まつてしまふ。利益の配當が少いとか缺損でもした場合にはギャー〳〵騷ぐが、無事に行つて居る場合には株主は少しも株式會社の經營に參與しない、そんな者が主人である譯はないだから株式會社の主人は重役であると云ふ說もある。又折衷說として此の頃流行つて居るのは、イヤこれは企業者と云ふ資格が分業せられて居る、株主は唯企業の所有と云ふ資格を有つて居る、企業の所有者である所有の外は何もしない。反對に重役は企業の一切の運營者である所有者ではな

い。即ち企業が所有者と運營者の二つに分業せられたのであると云ふ。私は此等の諸說に對して反對してそんな事はない、株式會社の主人は株主でも重役でもない、又兩者が主人の任を分擔するものでもない、株式會社の主人は株式會社其のものである、株式會社に於ける企業主は、株式會社其のものが其れであると云ふ說を數年前から唱へて居る。私が此說を始めて唱へた時分には、西洋にはまださう云ふ說を唱へた人が無かつた此の頃はある。殊に此の度の大戰爭以來社會問題の解釋の上に於て或は組合社會主義の如くに、組合にも人格を認めやうと云ふ考へさへ起つて來た。少くとも經濟上の眼點から見れば、株式會社と云ふ新しい企業人格が起つて來たと認める說は、必ず勝を占めると私は確信して居る。

凡て社會の中に在り

此く各種の人格が起つて來たが、我々の個人人格以上に人格性を有つたものは無論ない。これは天から具はつた人格者である。然し此の人格は其の人格だけでは非常に制限せられて居る。財の生活の爲めに非常に制限せられたもので、今日になつては共同生活を離れた者は手も足も出ない何も出來ない。昔の世の中では社會を離れたロビンソン・クルーソー的の生活も營めたであらうが、今日はそれが段々出來なくなつて來た。前章にも述べた通り、徳川時代の日本の百姓の如きは殆ど人と相交渉しない、自分の所で米を作り着物を織つてそれで生活して行かれた。今日はそれは出來ない、今日は何物か必ず買ひ何物か必ず賣らねばならぬ。賣つたり買つたりするには必ず社會の中に入らなければならぬ。社會の間に入るによつて我々の生活は非常に豐富になり充實せられるのである。凡ての共同生活は社會である。國家の横に國家の拾つた剩りを拾つて行くものを社會だと見る考へは大變遲れた間違つた考へである。社會は其の凡てを包含して居る。國家も社會の中にある。國家の中に社會があるのでなく、社會の中に國家があるのである。社會は色々な形を取つて現はれて來る、其の最も完全なる形は——今まである中では最も完全な形は——まだ〳〵極度に完全とは云へないが、今日までに於て一番完全なもの——國家である。隨つて我々の眼には社會生活は大抵な場合には國家生

活として映ずる。併しそれに漏れるものもある。トコロで國家生活になつて居るものを取つてしまつた殘りを社會と名けるとすれば、社會は實につまらないものになつてしまふ。左樣ではない、社會の一番良い所は今日は國家生活の中に保たれて居る。であるから、我々の共同生活の向上發展によつて共同體の人格を進め又個人人格を進めるには、今日では國家生活の充實から始めなければならないのである。國家を離れた社會的の行動によつて進めて行けとは出來ない相談である。

社會主義共産主義の異見

玆で社會主義と共産主義のことをちよつと申す必要がある。社會主義共産主義又無政府主義と云ふものは此點に於て、今私の申した事とは全然違つた考へを有つて居る。出立するところは皆同じである。社會主義無政府主義共産主義と雖も、學理の一般に認めたことを離れて架空の議論を立てゝ居る譯のものではない。唯だ此れから先きの見方が違ふ。私は今申した通りに、今日に於ては兎に角社會生活の一番の枠が國家生活になつて居ると云ふ、何故粹であるかと云ふとそれが人格化するからである。だから我々が共同生活に就いても個人生活に就いても判斷の標準は何であるかと云ふと、其の人格化の多いか少いか是れである。ところが社會主義、無政府主義、共産主義はサウ見ない無理な解釋をする。どう云ふ無理な解釋をするかと云ふと『國家は權力なり』と云ふ昔の解釋を文字通りに採る。これは社會主義者が考へ出した解釋でもナンでもない、日本でも有名な穗積八束先生によつて殆ど金科玉條的に敎へられた說である。國家は最高統治の團體なり、分り易く云へば權力を以つて鬼の面を被つて人民に向ふものが國家であると說く。社會主義者は此說を其の儘採る。宜しいお前達の學者お前達に愛國の觀念を說く憲法學者がさう云ふ宜しい國家は權力の團體である、鬼の面を以つて人民に向ふものである。だからそれは人類の人格化の完成に害を爲すものである。何となれば權力は何時も必ず自由對等を制限しなければ成立たないものであるからと、かう云ふ。それは左樣である、前述べた通り國家は無論權力を用ゐる統治もする、然しそれは唯一つの手段である、さうするのが一番良いからさうして來たと云ふだけの話である。國家其もの

はそれだけで終るものではない。軍人はサーベルを下げて居て時あれば人を斬る然し軍人は人を斬る爲めにあるものではない、國を衛り國を防ぐ爲めにある。國家を防ぐには國家に仇をする者があれば斬らなければならぬから斬る。けれども唯だ斬る事が目的ではない。斬らずして國家を衛り得れば決して斬りはしない。軍人とは人を殺すものなりと云ふ定義を下したならば大變な間違ひである。國家が權力を用ゐるのも從來權力を用ゐるによつて國家生活を一番よく充實し得たからさうしたのである、いつでも必ずそんな手段によらねばならぬものでも何んでもない。年の行かない時は一人で歩けないから、お母さんに手を引かれて歩いたけれども大きくなつて髭を生やす樣になつても、お婆さんになつて腰の曲つたお母さんに手を引かれて歩かねばならぬことはない。子供がお母さんの手を引いて上げるやうにならなければいかぬ。國家權力說とは國家がお婆さんになり子供が大きくなり、力の強い者になつてもお母さんに手を引かれて歩かねばいかぬと云ふやうな說である。社會主義は其說を採つて居る。而して曰く國家とはさう云ふものだ。子供が大きくなつて立派な者になつても、お母さんに手を引かれて居なければいけないと云ふのが國家だ。だから此れは人格の完成と衝突するものである。此意味に於て國家と社會とが衝突する、社會は人間の人格の完成を本義とする國家はそれに對して個人の人格の完成と云ふことでなく、個人の人格は壓迫して唯だ自分の人格のみを肥やすものである――國家が一つの人格であることは社會主義者中でも認める者がある――故に國家は個人の人格と全然離れた、別に對抗した對立した人格である。彼が肥えれば我れ瘠せる我れ肥えれば彼れ瘠せるものであると、斯う彼等は云ふのである。私は此說を取らない。國家が肥えるには個人が肥えなければならぬ、個人が肥えるには國家が肥えなければならぬ、此れは同じものである。唯だ個體の形と共同體の形が違ふだけであると主張するのである。社會主義の說は之れを正反對に對抗して居るものと見、一方が出れば一方が凹まなければならぬものであると說くのである。

社會主義と國家主義

そこで此の國家たる人格に對抗して居る個人の存在を充實して行くには、どうしても

共同化しなければならぬことは社會主義者も認める。何となればそれは事實だから。昔からの數千年の歴史の示す所、孤立した人間は人格が萎縮してしまふ外ないことは彼れ等も十分に認める。其の共同化した社會が社會だと云ふ。そこで社會と國家とは常に對抗するもので、社會が完全に發達するには國家があつては邪魔だ、凡て國家を社會にしてしまはうと云ふのである。此點に於て正反對の說を主張するものは所謂國家主義である。國家主義は社會を皆國家に入れてしまはう、社會を悉く國家にして、國家と云ふ生活に盛りきれない社會が無いやうにしようとするものである。今はまだ國家以外に漏れて居る社會生活もあるが、そんなものは無いやうにすつかり掬くつて皆國家に盛つてしまはうと云ふのが國家主義である。此點に於て社會主義とは恰度相對する說である。日本では國家主義を以つて唯だ國家の爲めに盡くすと云ふやうな簡單な意味に解釋して居るものが多いけれども、それは論のない話で善いことに相違ない、西洋で云ふ國家主義とは其れではない。「社會を一切國家にしてしまひ、國家以外の社會は無いことにしてしまはうと云ふのが國家主義である。之れに對して社會主義は國家を皆社會にしてしまはうと云ふ。」社會主義と云ふ名は之を標榜したものである。

無政府主義と社會主義

「無政府主義は國家を社會にしてしまふことを段々にしないで、直ぐしろと云ふのである。」國家が進化の結果段々に社會になることは待遠しい、直ぐに國家を無くしてしまへば、社會に取つての邪魔物が無くなつてしまふから直ぐ左樣しろと云ふ、卽ち國家を無くなす方に重きを置くから無政府主義と名けるのである。社會主義は之れと異ひ、そんなに急になるものでない、人類進化發達の道行は徐々に行かなければならぬ。放つて置いても國家は段々其れ自ら萎縮して、社會になつてしまふものだと主張するのが社會主義である。であるから一口に社會主義、無政府主義と同じやうに云ふけれども、實は根本的に違ふものである。露西亞で今やつて居るのは決して無政府主義ではない、社會主義而も其の道行である、スツカリ社會主義に成つたのでは決してない。英吉利で今流行つて居る「ギルド社會主義、あれは私は無政府主義の私生兒と名ける。」無政府主義の看板を掛

けたのでは少し工合が悪いから、腹は無政府主義だけれども表面は餘程穩健なことを言つて居る。だから無政府主義の隱し兒である。此れはソーシアリズムと云つて居るけれども、實は社會主義とは違ふ。社會主義は自然にさうして行かうと云ふので、自然に逆行することに反對する。然し力を盡くして出來るだけ速くさうなるやうには突つかう刺戟は加へよう。然しいくら刺戟を加へても成るだけにしか成らぬと云ふのが社會主義である。無政府主義は直ぐそれをやつてしまへと云ふ。結局は今の國家を悉く社會にしてしまふ可きものとする點に於ては、社會主義、無政府主義、共産主義皆同じである。其點から云へば彼れ等は何れも同穴の貉と云つて宜しい。貉は貉であるが唯だ其の貉さ加減が餘程違ふのである。

國家と社會とは兩立す

此の如く社會と國家とが對立して社會から云へば國家が邪魔になり、國家から云へば社會が邪魔になるものであるとなつたならば、これは實に耐へられない生活と云はなければならぬ。ところが實際は決してそんなものではない。我々の有つて居る歴史は、日本の歴史でも西洋の歴史でも何處の國の歴史でも、虚心平氣に之れを見れば、社會の充實は國家の充實によつてのみ爲されて來て居ることを示す。國家生活が充實すればする程、個人人格の解放が完全になつて來る。國家を離れて人間の解放はないと云ふことを示して居る。國家あつたが爲めに個人人格が大いに壓迫せられたのは、其國家が歪だから、其の國家が不完全なものだから、國家が國家として立派なものでないからである。國家が國家として立派になれば人格を自由にし、其の發動を滑かにするに至ることは明白の事實である。

國家の充實は英吉利が第一

洵に羨やましいことであるが、此點に於ては日本は餘程後れて居る。どうしても先づ英吉利を推さなければならぬ。英吉利を除いて外には之に比す可きものは殆ど無い。それは英吉利人が特に偉い譯ではない、英吉利に富があつたからである。英吉利は十六

世紀以來世界の富を皆自分の國に聚め、世界の富の中心となつたから、此れが出來るやうになつたのである。日本には悲しい哉それだけの富が無いから出來ない。國家生活の充實は財の生活を通してゞなければ出來ない。いくら國家が完成して其の活動を十分にしようと思つても、其の活動の材料たる財の生活が甚だ限られて居て、國家の行動が絶えず其れが爲めに抑へられ限られるやうな間は、國家は十分の働きが出來ない。日本の國家は今日したい仕事は澤山ある、教育の充實、社會政策の實行、色々の事をやりたいけれども、奈何せん日本の國は未だ富んで居ない。稅をいくら增して見ても中々足りない、だから思ふ樣な事業が出來ない。僅かばかりの新事業でも其負の擔が餘程重く感ぜられる。財政が思ふ樣にいかなければそれだけ國家生活は充實しない。國の富が增して來れば財の生活の束縛を受けることが少くなり、要るだけの費用を使ひ十分の機關を備へ、有らゆる財政上の設備を充實し、立派な人材を集めることが出來、自然に其仕事がうまく行く。尤も國が富めば腐敗が起ることもあるけれどもそれは變態である。亞米利加の如きは此變態を示して居る。原則として見れば、國が富めば政治道德も完全になる。賄賂が行はれるのは多くは國が富んで居ないからである。國が富んで居ないから官吏に對する手當が十分でない、そこで志の堅くない者は賄賂のやうな誘惑に克てなくなつてしまふ。國家の官吏に對する給與が十分であつて、其の生活を樂しんで全力を擧げて國家に奉仕することが出來れば――それでも賄賂を取る者が全然無いとは云へないけれども――餘程少いであらう。人は有つて生れて惡い事をしようと思つて居る者では決してない。先天的に惡性を帶びた者も無いことはないけれども、さう云ふ者を除いた外のものは、境遇によつて惡い事に陷る者が多い。所謂政治上の腐敗も境遇が然らしめるものである。其の境遇を作る最も大なる事情は何かと云ふと、財の生活の制限である。英吉利人は先天的に大變優れたる性を有ち、日本人は之れに對して遙かに劣つた性を有つて居る譯ではない、英吉利の財の生活の充實が英吉利をして之れを爲さしめるのである。尤も其の中にも色々な外部の事情があるけれども、一番の原因はそれである。

國家の充實は先づ經濟上から

「國家生活の充實は産業の奬勵、殖産工業を先づ第一着手とする」。如何にして國を富ますべきか、それは唯だ慾を深くして金持にならうと云ふ貪慾から來るのではない、如何に國を富ますべきかは、如何に國家生活を充實すべきか、卽ち其れによつて如何に國家を形づくつて居る個人の人格を完成し得べきかである。さうは自覺して居ないだらう、然し無自覺の間に其大きな原則によつて動かされて國家は發動して居る。各國とも自分の國を富まさう富まさうとして居る。或は他の國を害してまでも自分の國を富まさうとして居る。他の國を害してまでやることはいけないけれども、それ程強く國を富まさうと思ふのは財の生活の充實によつて、財の生活に存して居る根本の矛盾を取り去ることが、如何に國家人格の充實に必要であるかを特に人間が深く感ずるからである。

財の生活の非人格性、自然性

人格に生きて行くにはどうしても財が要る。個人の人格に於ても要る如くに國家人格にも要る、會社人格にも要る組合にも要る市町村自治團體にも要る、有らゆる共同生活には皆財の生活が要る。苟も人が寄つてたかつて居る以上、どうしても財が無ければならぬ。乍併財ばかりあつたのではいけない、財があつて而して其財を用ゐる人間の勞働がなければいかぬ働きがなければいかぬ。卽ち財と勞働此の二つが無ければならぬ。ところが此の二つは屢々述べた通りに制限されて居る、非常に有限にしか無い、不足であることが其の運命である。ソコデ其の不足は共同生活に於ては非人格性となつて働くものである。非人格性とはどう云ふものか。人格性は無限に伸びよう無限に善くならう、無限に高尙にならう無限に進まうとして居るものである。非人格性は之に絶えず働きを加へて居るにあらざれば、人の要求に逆行して行かうとするものである。之に力を加へ勞働して我々の用を足すやうになつてこそ我々を進める用を爲すけれども、勞働を絶えず加へる工夫を少しでも怠ると後戻りしてしまふ。無限に進まうとする反對に退化させよう〳〵として居る。それを非人格性と云ふ、或は之れを自然性と名けても宜しい。自然は或る意味から云へば極めて惰けたものである。日本の國土あつて以來此の國土の內には澤山の人を養ふだけの力は具へてある。山を掘れば鑛物がある水を引け

ば動力を起し得る。ところが此の鑛物を十分に採掘し、此の水を引いて水力電氣を起し得るやうになつたのはツイ此の頃である。日本にある無數の鑛山を掘ることは幕府時代にも少しはやつて居つたけれども、殆ど開發しないで明治になつてから西洋の工學、技術を持つて來て、初めて之れを開發するやうになつた。自然は昔からチャンとそこに在つた、日本には銅もあり石炭もあり石油もあり其の他の鑛物もあつた。勿論澤山は無かつた、又たモウ無いかも知れないけれども、兎に角今掘つて居るだけは昔からあつた。然し人間が行つて之れに勞働を加へて取出して來るまでは自然は默つて居る、非常に惰けたもの非常に不精なものである。人が行つて色々骨を折つて資本を注いで之れを促して初めて、暗闇からノソ〳〵出て來て人間の役に立つ、土地もさうである。唯だ普通に種を播いて居つたのでは年々收穫が減つて行つてしまふ。絶えず肥料を施したり、土地の改良をしたり、始終色々な工夫を人間が爲して行くことに依つて、自然はどうやらこうやら人間に追ついて行く。之れを少しでも怠り、例へば一ヶ年でも肥料を施さずに置けば、地力がガタンと落ちてしまふ。實に自然は油斷も隙もならない惰け者である。之れを人格の要求の上から見ると、自然は其の怠惰性の故に人格の發展を絶えず阻害しよう阻害しようとして居るものである。故に我々の個人人格、國家人格が充實して居ない時分には、此の極めて怠惰なる自然の爲めに始終抑へられて居つて、先きへ出ることが出來なかつた。或る程度までは人間は工夫をして行くけれども、それから先きは困難が非常に大で、我々の力が及ばないで行止りになつてしまふ。例へば飢饉と云ふことがある、年々耕作して行くけれども段々地力が減つて來る、そこへ雨が大變降るとか或は非常に旱天が續くとすると、人間が非常に努力したにも拘らず何も收穫が無い、人間の食べる物が無くて飢饉となる。我々の力の弱い時分にはさう云ふことがあつた。今日は農業の技術が發達して居るから、飢饉などは殆ど無いけれども、それでも油斷して居れば不作は何時でも起り得る。

共同生活に於ける人格と非人格の衝突

國家てふ社會生活に於ては、此の人格的のものと非人格的のものとが絶えず相ぶつか

つて居る。此のぶつかつて居る間に運動が起る。我々は此の非人格的なる自然を人格化しよう〳〵、人格の充實に役に立つやうにしよう〳〵と工夫して居る、其れが即ち運動を起す。其の運動の全體を名けて人類の經濟生活と云ひ、此頃の言葉では國民經濟と云ふ。日本なら日本の國民は一つの國民經濟を作つて居る。然し國民經濟とは云ふけれども、其の國民經濟には未だ自決的の意思は無い。經濟は我々の個人の經濟であるか、或は會社の經濟であるか組合の經濟であるか、夫々の具體的の單位組織を作つて、初めてそこに意思があるのであつて、國全體の經濟生活の統一綜合的意思なるものは無い。國家經濟には意思がある。國が營む經濟には國家の意思がある。國家の强い充實した意思があつて發動して居る。官林の經營、官業の經營有らゆる事は、一定の意思によつて一定の豫算に從つて經營されて居る。之に反し日本全體の國民經濟なるものは、謂はゞ無政府的狀態に於てある。各個人各法人各團體が夫々の意思を以つて營んで居るのである。從つて必ずしも相調和しない。日本全體に五千萬石の米が要るから、必ず五千萬石の米を作らうと云ふ計劃を立てゝ米の作付けをするものではない。各百姓が銘々自分の見込に從ひ思惑で田を植付ける。そこで出來た米が五千萬石より剩ることもある、さうすると米の値が大變下つて農家が困る。五千萬石に足らないと米の供給が不足するから、米價が非常に高くなつて人民が皆困ることが起る。是はつまり國民經濟に統一的の意思が無いからである。統一的の意思があつてチャンと其の意思によつて計劃して行けば——自然から來たる障碍は別である。が然しそれも統一的の意思があれば、其の障碍をもチャンと豫想して、其れに打ち克つ途を講ずる、出來るだけ其の障碍を免れようとするが、今日は其の工夫をすると云つても、各人がテン〴〵バラ〳〵にやつて居る。それにしては割合に圓滿に行つて居るものと云ふ外はない。

國民經濟の計劃化、統一化

此の頃獨逸などで切りに唱へられる國民經濟生活の社會化 Sozialisierung とは、成たけ統一的に一つの計劃を立てた國民經濟組織を立て樣と云ふのである。其ことを Planwirtschaft(計劃經濟)と云つて居る、「プラン」即ち計劃を立てた經濟と云ふ意である。今まで

は『プラン』の無い無成案の經濟であつた、此からは『プラン』を立てた經濟をやらうと云ふのである。等しく社會主義と云ふが、其中には此秩序經濟を要求する要求もある、其だけは正しい確に正しい。けれどもどうして其れが行はれるかを教へないから、一の空論たるに止まつて居る。兎に角無政府的の狀態にある今日の國民經濟――政治上其他の生活に於ては、チャンと國家の意思が發動して居るにも拘らず經濟上に於ては依然個人の利己心營利心に委せて置くが爲めに需要供給がうまく合はない。其れが爲めに我々の財の生活は充實しつゝも、分配が十分に行つて居ないが爲めに、澤山の國民に困難を與へて居る。此れはどうかして廢めなければならぬと云ふことだけは確かである。此の秩序のない經濟に於ては非人格性が著しく發動して居る。其の意味に於ては經濟生活と國家生活とは多くぶつかるものである。經濟生活の要求と國家生活の要求とはどうもうまく調和しない之れをどうかしてうまく調和するやうにしなければならぬことは餘程前から感ぜられて居る。其れが戰後の獨逸に於て社會化、計劃經濟等の議論を盛ならしめたのである。

國民經濟と國家との衝突

此く國民經濟に現はれた全體的の財の生活と、國家に其の最高の發現體を有つて居る我々の共同人格の生活とは、絕えず爭ひをし鬪爭を續けて居る。此の意味に於ては人生は一つの鬪爭である。永久の平和ではない永久に鬪爭を續けて居る、其が小さなことに於てもよく現はれて來る。國家經濟の上から斯うしたら宜いと思ふ事も、所謂民業の蹂躙だとか云つて反對された、思ふことが中々行はれない。例へば鐵道を國有にしようとする、鐵道を國有にすることは國家の秩序經濟を立てる上に於て非常に善い事である。ところが鐵道會社其の經營者は買收に應じない。强ひて買收しようとすれば民衆の蹂躙だ民業の壓迫だと云つて反對する。日本では西園寺內閣の時に之れを斷行したけれども、英吉利の如きは未だ此れが行はれて居ない。と云ふのは、英吉利は國家生活が充實した羨やましい國だとは申したけれども、國家生活を充實して居ると共に、亦た之れに對抗する非人格的の經濟生活も亦た充實して居る。一方が强ければ他方も强くして、其の

間の衝突が烈しい日本よりか遙に激しい。であるから彼の充實した國家を以つてしても、中々鐵道の國有が出來ない。今は炭山の國有と云ふことを云つて居るが、是も中々出來ない。否戰爭中國家が管理して居つたのさへも之れを廢すと云つてゐる。坑夫がそれを廢されては困るからとて先頃ストライキをやつた。一體國家から云へば炭山の管理は善いことで、坑夫等の要求と國家の要求とは合致して居るけれども、炭山の持主資本主等の非人格的傾向が非常に強い爲にそれが出來ない。其の爲にあの大ストライキが起つたのである。

簡易保險の一例

日本でも此の頃問題になつて居るのは簡易生命保險の保險金額である。政府の一番最初の原案は三百圓が最高限であつた。私共は三百圓を五百圓にしたら宜からうと云ふ說を當時持つて居つた。政府は原案の三百圓を更に五十圓減じ二百五十圓を限度として法律が出來た。それは物價の騰貴しない昔の話である。今日のやうに斯う物價が騰貴しては、二百五十圓の保險金を貰つたところで迚も葬式も營めない。どうしても之れを引上げなければならぬことは常識で分つて居る。それは幾らまで引上げるが適當であるかは問題であらうが、之れを倍の五百圓にしようと云ふ說が大分有力である。さうすると保險業者は直ぐ蜂の巢を突ついたやうに起つて反對して、これは民業の蹂躙民業の壓迫だと云つて、專門の學者などを驅り出して來て盛んに反對論を唱へる。我々から見るとこれは見す〳〵泥棒した者を辯護する辯護士より、モット下手な事をやつて居るものと云はねばならぬ。強ひて附けた議論であるから一つも成つて居ない。其の御用辯士の一人たる某博士曰く、物價は今日のやうに高いことが永續するものではない、今に物價が下がることは極まつて居る、それを今簡易保險最高金額の二百五十圓を五百圓にすれば、物價が下がつた時又た之れを引下げなければならぬ、政府の政策として始終動搖することはいけないと、此れは呆れ返つた愚論である。物價が安くなるとはどうして云ふか。必ず安くなる方法は斯う云ふやうにしてやつて行けば宜いと云ふ確かな保證があれば、それは別問題であるが、そんなことは人間として出來る話ではない。農商務省

が非常に骨を折つて物價引下げをやつてもそれは出來はしない。今より安くはなるだらうけれども、戰爭前の水平線に戻るやうなことは迚も考へられない、戻らない方が確かである。又た民業の蹂躙、民業の壓迫と云ふけれども、所謂民業なるものは時によれば蹂躙して少しも差支ないものである。一體何の爲めの民業であるか、或る人々が肥える爲の民業ではない。國民各人をして其の人格を完成せしむる爲めには產業を營なむことをさせなければならない。成たけ自由に成たけ既得の權利は尊重せねばならぬけれども、それは國家と云ふ人格と衝突せざる限りに於て許すのであるから、國家の人格の完成の上に是非なければならぬことであつたならば、民業を蹂躙したつて宜し、民業を壓迫したつて少しも差支ない。況んや今の簡易生命保險の問題の如きは決して蹂躙にも何もなりはしない。保險會社の既得の權利を侵害することに何もならぬと私は信じて居る、けれどもそんな詳しいことを考へるまでもなく、イキナリ民業壓迫だと云つて反對する。さうすると當局者も民業壓迫と云はれるのは洵につらい、壓迫して居るのを壓迫と云はれゝばこれはどうも仕方がないけれども、壓迫したのでもなければ又しようとして居るのでも何でもない。全然違つた考へから遙かに高いところの動機から考へてやつた事であるけれども、さう云つて反對される。

所謂民業の蹂躙

此れから先き社會政策、社會事業を行ふ上に於ては、必ず絕えず民業の蹂躙、民業の壓迫と云ふ問題を惹き起すに相違ない。それを虞れて居つたら殆ど何事も出來ない。住宅組合を拵へる、或は住宅會社法と云ふものも近く出來るやうであるが、之をやれば或る度までは民業蹂躙である。或は現に今既に實行されて居る職業紹介の如きは非常な民業蹂躙である。國際勞働會議の精神は民間にある周旋業職業紹介を商賣として居る者を全廢してしまつて、出來るだけ此れが成立たないやうにしようと云ふのである。これは蹂躙どころではない民業の絕滅撲滅である。我々は其の撲滅を期するのである。日本の新法たる職業紹介法制定の精神は實に然るのである、あれを全廢して悉く市町村の經營する職業紹介所で無料で公けなる職業紹介をするやうにしてしまう。私はモッと進

んで質屋の如きも皆民業は廢して市町村が經營するやうにしたいと思つて居る。出來るならば貸家も出來る丈け市町村の經營にしたい、人に家を貸して頭をはねることは絕對に無いやうにしてしまひたいと考へて居る。これは中々今直ぐには行はれまい、然し思ひ切つてやれば或は出來るかも知れない。要するに方法の問題である、方法さへ附けば決してやつて惡い事ではない。それが若しいけないならば、社會政策、社會事業は全然斷念しなければならぬ。

「一切の社會化は非なり」

然し其れならばと云つても何でも構はない、民業は總て皆敵と見て之を抑へてしまふと云ふのかと云ふと決してさうではない、民業はどこ迄も發動して呉れなければならぬ、民業を悉く無くしてしまひ、凡ての產業を國有にし社會化する事は、それはいけない。何故ならば、度々申したやうに、國家の人格を充實する爲めの事でも、財の生活に於ける行動の發動者は個人でなければならないからである。會社を經營すると云つたつて、其經營者は個人である、國家の行政と云つたつてやはり個人たる官吏の手に於てやるのである。何れも個人の力を藉らなければ出來ないのである。ところが國家の官吏の職務は、人の利己心に愬へることは皆無ではないが殆ど無くて濟む。官吏が國家に奉仕するのに、俸給を全然やらないでやれと云ふのは出來ない話である。國家の爲めに特に盡した者には相當の褒賞をやる待遇を良くしてやる、これを全然廢してしまへば行政の活動は望まれない。これはどんな世の中になつたつて必ず必要な事である。單に生活を保證してお前達は食べて行けさへすれば宜いと云ふ譯のものでは決してない。日本では此の點は大變善いが、其と共に他方大變いけない事は國家の公職、いな國家の公職ばかりではない。例へば學校の敎員或は甚だしきはお醫者さんの如きに至るまで、醫は仁術なりと云ふ、一體醫者が病氣を癒して代を取るのは怪からぬから、踏み倒しても宜いと云ふやうなことを隨分考へるものがある。診察料を取らないことが仁術ではない。診察料は當り前に取り、醫者として盡くすべき最善を盡くす之れが仁術である。夜中に起しに來たから起きないとか、あの病人は藥價を拂ひさうでないからと云つて、効かない藥を服ませ

るとか、手術を怠るとか云ふことはそれは仁術ではない。何處までも醫者として最善を盡くすのが仁術で、決して只でやることではない。國家の官吏に向つても、官吏は清廉を以つて旨としなければならぬ、食べて行けさへすれば宜い。餘計俸給をやる必要はない。學校の敎員はどうやらこうやら生きて行けさへすれば宜い、と云ふやうな考へが餘程日本には多い。これは大變間違つた又た惡い考へである。官吏なり敎員なり當人が其の心持で居ることは結構なことである。俺は金錢の爲めにやるのではない、俺はどんなに苦しい生活をしても、自分の天職として信ずる所をやると云ふのは良いけれども、それは個人として自發的にやるべきことであつて、他から强制すべきではない。況んや社會が人民に臨み國家が人民に臨むには、さう云ふ意味を以つてす可きではない。個人が唯だ報酬のみを要求するのは間違つて居るが、使ふ方から云へば出來るだけ其の生活を充實してやる。贅澤する無用な事をするのはいけないが、生活を充實して安心させてやつて相當の事をしたら、それに對しては十分褒賞もやれば名譽も伴はしめてやるのでなければばならぬ。自由職業でさへも左樣である。況んや有らゆる產業は金を儲けることがどうしても動機となつて發動して居る。此の金を儲けると云ふ念を全然取つてしまへば、產業は忽ち萎靡してしまふ。金を儲けたいと云ふ念は人の利己心である利己心決して惡いものではない。利己心が横道に走るから惡いのである。利己心が正當なる軌道を走つて行く限り、其れによつて國家の生活も充實し、各個人の人格の完成が得られるのである。利己心とは限られたる財の生活に打ち克たうと欲する念である。經濟上から云へば利己心とは我々の人格の無限發達の要求を阻害しよう〳〵とし、惰けて少しでも注意を怠たれば、陰日向をしようとして居る自然をこつちへ引きつけて、人間の用をさせよう〳〵と云ふ念、此れが利己心である。其の念が絶えず發動して居るのでなければ天然を遁してしまふ。其の利己心は皆個人が有つて居る、會社を作つても其の會社には利己心は無い。其の會社の人格は會社自身の意思があるだけである、利己心は全然ない。利己心だけは生きた人間でなければ有つて居ない。即ち本當に自然に打ち克つと云ふことは、生きて居る血あり涙ある人間でなければ出來ない。其の個人の性情を滅ほしてしまつて、財の生活に打ち克てと云ふのは迚も出來ない相談である。

之を要するに

個人其の儘の生活は人格の孤立を意味する。孤立者には他の人格の壓迫は無論ない。其の代り財の生活は壓迫卽ち非人格性自然の壓迫を受ける。是から免れる途は、個人の生活を社會化して、共同生活を營なむことによつてのみ得られる。社會化した共同生活は形は何であつても、澤山の人格が寄り合ふのであるから、人格と人格との間の衝突が起る。然し其爲めに財の生活からの壓迫を免れる。國家は此の共同生活の一番高い形として出て來て、人格と人格とが互に相接觸して、一つの人格が他の人格を壓迫することのないやうに勉める。どの人格も皆同じやうに自由に生きるやうにすることが其の本義である。個人の方から此の自由を唯一の要求とするのは之れを打ち壞す所以である。國家の方から共同體の方から云へば、自分の存在の爲めに、人格と人格とが互に他を壓迫することの無いやうにしなければならぬものである。若し個人が個人としての自由のみを主張するならば、其の極は社會を壞すことになる。社會を壞してしまへば他の人格の壓迫を受けない、其の代りに財の生活の更に大なる壓迫を受ける。個人自由の要求のみを認むるのは、畢竟ずるに人類生活の破滅を要求するものである。個人の自由と云ふ點のみから出立すれば、どうしても共同生活を壞すことになる。壞せば孤立の人間は出來る。他の人格の壓迫は免れるだらう、それも今日では中々出來ないことであるが、絕海の孤島に一人行つてしまつて、そこに居れば勝手な事が出來る。其の代り其の生活は非常に憐れなもので、人類の文明はすつかり退歩してしまふ。終に人類は死滅してしまふ外はあるまい。自由と云ひ對等と云ふのは、社會生活——今日では國家生活の形に於ける共同生活を維持して行く限りに於てのみ云ふ話である。此れのみが唯一最高の要求でも何でもない。それは國家の方から社會體の方から各員に對して見た時の取扱の話で、個體の方から云ふ話ではない。個體は社會生活の充實によつて、財の生活の束縛から解放されて、個人生活の充實を期する外はない。此れを否認する要求は到底實現出來ない。若し出來るとしたならば、それは人類の文明の絕滅人類生活其のもの〻絕滅を來す外はないのである。卽ち我々個人人格は財の生活の壓迫から免れる爲めに、共同生活を營む

もので而して共同生活を營む以上は、其れより來る制限は之を辭することは出來ないのであるのである。」

第五章　人格鬪爭としての社會運動

所有の保護は國家の任務

國家發達の度合は國家を形づくる個人の發達の度合に應ずるもので、又た其れによつて測られるものである。國家を形づくる個體が個體として銘々十分に發達すれば國家も亦た十分に發達し、其の發達が不十分なれば國家の發達も又不十分で、甚だしきは畸形的不具なる發達しか出來ない事になる。ところが其の國家の中にある各個人は財の生活に於て凡て外界の財を自分の所有に歸するものである。國家はそれを所有に歸せしめ、其の所有を保護するによつて個人生活の發達を可能ならしめる。國家存在の意義は決して所有の保護のみに盡きるものではない。乍去所有の保護は其の出立點であつて、先づ其れから掛からなければならぬ。所有の保護は權利の形によつて爲される。權利無く財産無ければ、少くとも今日までの狀態に於ては、國家の中に於ける人格活動の一切の基礎は無くなつてしまふ。我々の人格は外界の物を所有すること、之れに對して勞働を附加することとの二つによつて維持されて居る。「其所有其の勞働を他をして侵さしめないものは權利である。其權利は國家之れを保護する、保護せられた權利の全體は卽ち財産である。」

「平面的差別と上下的差別」

所有物には前に云つたやうに色々品質上の違ひがある。其の違ふによつて各人の職業が違つて來る。又所有物には數量上の違ひがある。澤山有つて居ると少く持つて居るのとの違ひがある。所有物の品質の差違は社會の中に於ける各人の地位を定める。お前は百姓お前は商人お前は官吏お前は僧侶と云ふやうに夫々地位を定める。是は平

面的の差別で上下的の差別ではない。種類が違ふと云ふだけで、どの種類が他の種類の上と云ふことも下と云ふこともない。ところが所有物の多い寡いと云ふ數量上の差違は、人々の上下の關係を定める。餘計有つて居る者は少く有つて居る者より上に立つ、少く有つて居る者は多く有つて居る者の下に立つ。多少財產を有つて居つて、尙ほ其の以外に勞働する者、或は財產は全然有たず勞働だけを有つて生活して居る者は、其の勞働の種類によつて其の地位を定められる、大工とか左官とか車屋とか云ふ種類によつて、大工と云ふ地位、左官と云ふ地位、車屋と云ふ地位が定められる。勞働には財產のやうに數量の違ひはない、種類の違ひがある斗りである。何となれば、勞働は有つて居るものではない、勞働する時に出て來るものである。人間の働く力を出して行くことが勞働であつて、之れを藏つて置くことは出來ない。取つて置くには其の勞働を物に體化しなければならぬ。勞働した結果が勞働の產物として殘る、從つて其れは財產になつてしまふ。勞働其のものは財產でない、勞働の結果が財產である。勞働其のものは財產を作る道行である。取つて置かれない力、自分の筋肉を働かし自分の心身を勞して働くことが勞働である。それは時々刻々に發現するのでなければならぬ。だから此れは所有量の違ひはなく、唯だ種類の違ひのみがある。そこで其の種類が直に其の人の地位を定めるのみならず、又た上下の關係を定める。「財產に於ては多い寡いが上下の關係を定めるが、勞働に於ては多い寡いでなく、其の種類が同時に上下の關係を定めるのである。」或る種類の勞働は他の種類の勞働より下に附く、普通の事務員は支配人の下に附く、支配人は取締役の下に附くと云ふやうに、仕事の性質が同時に上下の關係を定める。

他人決定勞働と從屬關係

勞働者は勞働に要する材料を自分が持つて居れば宜いが、今日では勞働者は原則として自分の勞働する材料を自分で有つて居ない。紡績會社の職工は紡績の機械を自分で有つて居るものではない。他人が有つて居る機械、他人が提供して吳れる材料を以つて勞働するので、勞働者自身は何も持つて居ないのが通則である。大工や左官は勞働の道具は自分で有つて居る、人から道具を借りてやるのではない。然るに今日の所謂雇傭勞

働者の大多數は、自分の勞働する要具を自身で有つて居ないで、他人から之れを與へられる。隨つて勞働の種類によつて上下の關係が定まる上に、更らに物を貸し與へて呉れる物の持主に對する從屬の關係が成立ち、其の下に立つのみならず、其人に從屬するのが通例となつて居る。そこで勞働に自己決定勞働と他人決定勞働の別が起つて來る。勞働は人間の營む事で意思の發動である。勞働する意思、勞働意思があつて其が發動することが勞働である、勞働も一つの行爲である。其が特に勞働と名けられるのは、人間の用に足るやうに外界自然の物を持つて來て之れに或る働きを加へる、其の行爲を指して云ふので、やはり行爲に相違ない、隨つて人格の意思から出て來るのである。ところが自分が勞働する道具も材料も皆有つて居れば、其は唯だ單純なる上下關係の下に立つのみで從屬關係は起らない。例へば教師は校長よりは下である然し校長に從屬して居るものではない。課長は局長の下であるが決して從屬して居るものではない。唯だ上下關係の下に立つのである。單純なる上下關係のみでなく、從屬關係と云ふ特別な關係の出來るのは、自分は勞働の要具を有たず勞働の材料も持つて居ないで、他人から其の供給を仰ぐ者に就いてゞある。勞働者に其の材料を與へ其の道具を與へる雇主、資本家は、材料を與へ道具を與へるばかりでなく、其の與へた材料道具を以つて何を營む可きかの意思をも同時に與へるのである。紡績會社の職工は自分がこんな絲を拵へて見よう、あんな絲を拵へて見ようと云つてやるものではない。紡績會社でチャンと定めた所の機械、材料を使つて、第何番手の絲をどう云ふやうに引けと、意思までも他人に定められるのである。勞働者はそこに入つて行つて與へられた道具、與へられた機械與へられた材料を以つて、さうして與へられた意思を實行するのみである。彼は自己決定者でなく他人決定の勞働に從ふものであるのである。他人の意思によつて決定せられた勞働をするのみである。

勞働問題とは他決勞働問題の謂

今日の勞働問題とは自決勞働に就いての問題でなく、他決勞働他人決定勞働に就いての問題である。材料を他人から供給を仰ぎ、他人に傭はれることが勞働の問題を惹き起

すのみでなく、其人間として營む勞働なる行爲の意思が全然自分の意思でなく、他人の意思であることから起る。凡そ人格は有らゆる行爲を自決する、自分が意思を立てゝ其の意思の執行として行爲をするのが其本質である。意思を他人から貰ひ他決勞働をすることは、既にそれだけで人格を非常に殺がれるのである。此れが今日の勞働問題を惹き起す所以である。其の爭ひの形は賃銀を上げて呉れとか勞働時間を短くして呉れとか色々のことになつて現はれるが、いくら賃銀を上げ時間を短かくしても、勞働問題は決して其れだけで已むものではない。賃銀さへ餘計やつて物價を安くして生活が樂になつたならば、勞働問題は解決すると思ふのは極めて淺はかな考へである。英吉利の如きは日本に比べれば遙かに賃銀は高く勞働時間は短かいが、日本より英吉利の方が勞働爭議が遙かに多い。日本でどんなに賃銀を增しても、英吉利ほどの賃銀を支拂ふことは到底出來まい。國際勞働會議の決議によつて八時間勞働の實行を無理にしたところで、英吉利では既に六時間勞働をやつて居る所さへあるけれども、勞働爭議は決して絕えては居らぬのである。勞働爭議は勞働が他人決定勞働である限りは已むものでない。それを已むものと思つて施設すれば大變な間違を生ずるにきまつて居る。此の點は日本では殆ど分つて居ない、餘程分つた人でも分つて居ない。勞働問題を喋々論ずる識者、論客にも分つて居ない。況んや當り前の政治家などに分る譯がない、分つたら寧ろ不思議である。ところが是は決して日本のみではない、日本のみの問題ならば日本だけに就て考へて濟むけれども、左樣ではない。勞働問題は人間の問題である人類全體の問題である。

「要は自決要素を多くすること」

今日の我々の文明の程度に於ては、他人決定勞働を全然無くしてしまふことは望み得られないことである。唯だ成べく他人決定の不必要なる場合に、他人決定をしないように、出來るだけ自己決定の要素を多くしようと云ふだけの事である。所謂『經營の參加』と云ふのは此の要求に應ぜんとするものである。勞働者をして其の從事する工場の經營に參加せしむるのは、自決の要素を幾分か多くする所以である。先頃の神戸の勞働爭議の時に唱道された工場委員制度（鐵道では現業委員制度と云つて居る）の如きも亦た

此要求に應ぜんとするものである。これは事業の經濟上の方面卽ち企業に勞働者を參加せしめるのではない。「現業卽ち當面の勞働作業の決定に參加せしむるのである」。勞働者の頭に直接掛かつて居る事項に勞働者をして出來るだけ參加せしむる、委員を出して斯うしたら宜からう、あゝしたら宜からう、斯うしようあゝしようと云ふ決定に與からしめ樣と云ふのである。卽ち云はゞ「工場に於ける立憲政體」である。昔は政治は唯だ上に立つ者のみがやつて人民には喙を容れさせなかつた。立憲政治に於ては少くとも肝要な事に就いては人民に喙を容れさせる。殊に豫算審議の權を與へることになつて居る。

今日の工場委員制度はまだ豫算の審議權まで與へるのではない、唯だ現在仕事をする現業に就いて斯うもしあゝもしようと云ふ其の問題、卽ち作業規定（適當な言葉を考へつかないので斯う譯して置く、獨逸語の Arbeitsordnung）現に勞働する上の色々な秩序、規定卽ち『オルドヌング』其れに勞働者を參加せしめる、雇主の方と勞働者の側と兩方から委員が出て相談をするのである。此れは決して完全なる自己決定ではないが、少くとも全然他人決定によるのでなく混合決定によるのである。其の點が他人決定の場合より、餘程勞働者の人格を尊重することになるのである。

自決は能率を增進す

勞働者の人格を尊重するは勞働者をして能率を高めしむる所以である。單なる道具單なる動物として勞働者を働かせるのでなく、之れを人間として一つの人格者と見て出來るだけ其の人格を尊重する、人格的の要求を容れるには決定意思を働かしめなければならぬ。勞働者を呼び捨にしないで『さん』附けにするとか、晝飯に暖かい飯を食はせてやるとか、勞働者の住居を拵へてやるとか云ふやうなことも要するに勞働者の人格を尊重することを形に現はすのである。さうでなくして勞働者をどこ迄も動物扱ひにして居れば、いくら善い事をしても駄目である。そんな事をしなくとも、勞働者の人格を尊重すれば感應しない者もあらうけれども、少くとも日本くらゐ發達して居る國に於ては、確にそれが能率の上に現はれて來る。人間は意思の動物である、意思を働かせなければどうしても、唯だ單なる道具、機械、動物のやうにしか働かないやうになり易い。之れに意思を

加へてお前が善い事を工夫して呉れたから、こんなに改良が出來たこんなに無駄が省けるやうになつたと云はれゝば、人間は刺戟されてよく働くやうになるものである。これは獨り勞働者のみではない、官吏でも教員でも宗教家でも何でも左樣である。各々其の人の行爲に就いては、其の人の意思を出來るだけ其れに伴はしめる。これは今日の國家の根本的要求である。此れが政治上に現はれて國民に參政權を與へることになつて選擧權を行使せしめる、地方の行政にも參加せしめる、自治體の行政にも參加せしめる。參加せしめた爲めに却つて惡いことも起る、市會議員が賄賂を取つて瓦斯を食つたり砂利を食つたりするやうなことも起るけれども、それは何事にも弊害は伴ふ。弊害があるから廢してしまふと云ふのは却つていけない、成べく參加せしめて意思を働かせる。尤も國民全體を皆議會に出すことは出來ないから代議士を選ぶ。工場委員制度もさうである、總ての勞働者を參加せしめるのではない、其の中から代表者を選んで參加せしめるのである。學校にしても校長のみが意思者であつて、他の教員は唯だ校長の意思のみを奉じで、唯々諾々として之れを執行する機關になつてしまつては駄目である。各々意思があるからやはりブツ〳〵不平を云ふ、校長はあゝ云ふけれどもあれはいけない、斯うした方が良いと云ふ、果してさうして良いことも隨分ある。一人の人が總ての事に萬遍なく廻ることは、どんな偉い人でも迚も出來るものではない。ところが此れが中々難かしいので、意思決定に參與せしめるとなると、又各人で我儘をして秩序が立たない、秩序は無ければならぬ。秩序を保つには或る度までは各人の意思を制限しなければならぬ。之は如何なる場合にもある、要するに其程度が肝要である。どこ迄も參加せしめるが、最後の決定權はやはり校長なり主宰者なりが有たなければならぬ。どんな場合でも、最後の決定權を妨けない限りは成べく參加せしめて、全體の經營は成べく評議の上で之れをやるのでなければ、人格の尊貴を維持する所以でない。

獨逸の大學

獨逸の學問が非常に進歩したのも、獨逸の大學は全然一つの憲法政治であつて、大學全體に關する事は決して總長が獨斷で決するやうなことはない。總長は多くは一ヶ年交

代に選擧せられる、學長も選擧せられるものである、各教授が順番に之れに當る。全體の最高機關は教授會と云ふものがあつて何事でもやる、文部省と雖も之れは掣肘しない。最後の決定權は無論文部大臣が有つけれども、最後の決定權に妨げなき限りは大學の自治を許してある、是れが獨逸の學問を非常に發達せしめた所以である。亞米利加の大學の如きはそれが無い、總長に大變偉い人があつて何でも總長次第になる。總長は手腕もあり立派な外交家である、例へばウヰルソン見たいな人がやつて居る。他の教員は教授會と云ふ制度もあるけれども、獨逸のように立憲政治になつて居ない。自由な國と云ふ亞米利加が却つて學問上の制度は餘程後れて居つて、官僚主義と云はれた獨逸は少くとも教育機關――大學教育だけは殆んど完全に近い立憲政治を行つて居る。それが獨逸の學問を非常に進めた所以である。これは獨り大學教育のみならず、凡ての教育家は皆さうあるべき筈である。又た凡ての行政の仕組もさうあるべき筈である。勿論テンヤワンヤ始終會議ばかりして居つては仕樣がないけれども、何か肝要な事を決定するには、成べく衆に問うてやれば皆自分が意思決定者であるから、少々位まづい事でも無理な事でも喜んでやる。反對に樂に出來ることでも、唯だ上官の命令を受けてやるとならば、どうしても人間は不平を起すものである。不平を起すからこそ人間進步がある。唯だ唯々諾々として上長官の命のみを奉じてやつて居るやうな者はこれは機械である。機械くらゐ忠順に他人の意思を實行するものはない、どんなに人間が奴隷になつたつて、機械のやうに完全に他人の意思を實行するものではない。人間を機械にするのは無駄な話である、機械的になるのなら機械を使つた方が宜い鐵で拵へた方が良い。それを骨と肉を以つて作つた機械を以つて、鐵の機械に代へようとするのは甚だ間違つた話である。

國家亦然り

國家は總ての方面に亘つて國家を形づくつて居る、凡ての個人をして出來るだけ意思を働かしむるやうにす可きものである。國家發達の程度によつて其れが行はれる程度には非常な違ひがある。殆ど個人の意思を働かしめないやうにして居る場合もある、卽ち專制國の如き是れである。然しどんな專制國でも、人民の意思をまるで働かせないで

立つた例は無い。形は專制ではあるけれども、やはり人民の意思が働いて居る。他面に如何なる立憲政體否共和政體でも、全人民が總ての事に就いて絕えず意思を働かして居るのではない。多くの部分は最高の機關が意思を決定するのである。乍併理想の國家、最も完全に發達した國家に於ては、國家を形づくる全國民をして、出來るだけ其の意思を發動せしめて、其の意思の發動が國家全體の發達に最も多く貢獻するやうに導いて行く可きものである。いくら意思を發達させてもそれが害をなしてはいけない、それは其の國家自からの自殺行爲である。

國家意思の自決と國民の參加。其一、憲法のこと

隨つてどれだけ個々人々の意思を働かせ、どれだけ之れを制限するか、細かい事は臨機應變にやるけれども、大體の原則は之れを定めて置かなければならぬ。他の言葉で云ふと、國家意思の決定に國民がどれだけ與かるか、どれだけの程度に於てどう云ふ範圍に於て又たどんな場合に於て與かるかを、大體に於て必ず定めて置かねばならぬ、それは憲法によつて定める。必ずしも日本の憲法のやうに成文になつて居るものゝみが憲法ではない、成文になつて居ない憲法もある。成文になつて居つても居らなくても、國があれば必ず憲法がある（國憲、朝憲など云ふ曖昧な語は此事を云ふものと思ふ）。今日の所謂立憲政體に於てのみ憲法があるのではない。所謂『立憲政體』と云ふのが抑々をかしい、『コンスチチユーショナル・ガヴァーンメント』Constitutional government と云ふ西洋の言葉が一體誤解され易い。それを日本語に其の儘飜譯したからをかしいが、どんな國だつて憲法の無い國はない。神武天皇時分もチヤンと憲法はあつた決して明治大帝になつてから憲法が出來たのではない。成文憲法はあの時出來たが、日本國家あつてより今日に至る迄、一日と雖も憲法の無かつた時はない、何れの國家でも左樣である憲法はある。其憲法は何かと云ふと、國家意思の決定に國民がどの位參加するか、其程度範圍種類性質時期などを大體に定めたものこれが憲法である。此意味に於ては工場にも憲法がある學校にも憲法がある官廳にも夫々の憲法があると云つて宜い譯である。けれどもそれは普通憲法とは云はない、規則とかナンとか云ふ名前を附けて居るが、要するに『コンスチチ

ユーション』である。Constitution と云ふ字は『組立て』と云ふ事である。つまり如何に其國を如何に其工場を如何に其學校を組立つべきかと云ふ根本の原則を名づけて『コンスチチユーション』と云ふ。Con と云ふのは『一緒』 stitution は『成る』と云ふ意味で、如何にこれが一緒に成立するかと云ふ大體の骨組を定めたものである。專制國は專制と云ふ一つの憲法を有つ、意思はすべて主權者が決定する。原則としては國民には意思決定の權限を認めないと云ふ、これも一つの定め方、一つのコンスチチユーションである。其國民の參加を段々多くして行くことが先づ今までの憲法史の發達である其の發達の跡を研究するものを『憲法史』Constitutional history と云ふ、國の組み立ての歴史である。

國家意思の自決と國民の參加。其二、行政のこと

第二は國家の意思は如何に國民をしてこれに參加せしめても、それは國民の意思ではない國家の意思である。唯だ其意思の決定に國民を參加せしむるだけで、決定した意思は『國家の意思』Staatswille である。日本なら日本の國の意思英吉利なら英吉利の國の意思である、それは自決的のものである。自決的のものでなければならぬのである。國家の意思は自決でなければならぬと云ふ事と國家の意思決定には成べく國民を參加せしむ可しと云ふこと〻は、一寸矛盾して居るやうに見える。人民が多勢たかつてワー〳〵やつて定めた事は國家が自決したのではない、人民の輿論にあらざる愚論に餘儀なくされて決定した意思である。そんなものは他人決定の意思であつて自己決定の意思ではない、さう云ふ場合も隨分ある。殊に革命などの場合にはそれがある、國家自から革命しようとも思はないのに、人民がワーッと云つて終に革命をしてしまつた、後でア丶飛でもない事をしたと云つてもモウ返らない樣な事はある。乍併個人の意思に就いてもさうである。自分は意思を有つて居るつもりであるけれども、言葉巧みに人に説き聞かされると、フラ〳〵ッと迷つてツイ賄賂を取つてしまつた、あとで我に返つてアッしまつたと突つ返しても、モウ一遍取つたのだから裁判所では之を有罪と認める。嘘を吐くつもりでなくてもツイフラ〳〵ッと事情に餘儀なくされて嘘を吐いてしまつた、と云ふやうな場合もやはり意思の發動である。全然止めてしまふのではないけれども、意思を正しく發

動しないで他所へ發動せしめたのである。婦人が誘惑されるとか節操を破られると云ふやうな事でも、破られた時は確に自分が破つたのである。自分に全く意思がなくして節操を破るやうな事は殆どあり得ない。悪い男子が誘惑したと云ふも、やはり自分が誘惑されたものである。當人に全く罪が無いのではない。本當に意思を有つて居れば、そんな事は先以てある氣遣ひはない。それは自分の本當の意思が發動したのでなくして横へ走つたのであらう。國家にもさう云ふ事はある乍併個人の意思は合議の上で定めるものでなく大體自分で定める。但し是が一軒の家を成して居ると家の意思は夫婦が相談して定める親子が相談して定める。是は成るべくやはり合議が良い、合議で決定するが宜しいとなつて居る。然し純個人としての行動は相談で定めるものではない。どんな良い友達でも、總ての場合に忠告を與へると限りはしない。否人の忠告を聽いて意思を決定するやうなそんな薄弱な意思の者は駄目である、最後の決定者は自分である。どんなに智慧のある人の云ふ事を聽いたつて、結局自分のする事は自分が決定した意思によるのでなければならぬ。國家國家其ものは一體は何も意思を有つものではない。作られた人格だから、生きて居る誰人かの頭で決定される意思である。其だからこれには多勢が參加するが良いのである。若し國家が我々個人と同じに生きて居るものであり、心理的の働きをするものであるならば、他人が之れに口を入れることは意思の自決と矛盾する。其點に於ては國家意思の決定は全然違ふ國家の意思は誰人かの心に宿る意思である。國家の主なる當路者、大統領とか總理大臣とか、やはり人である國家其ものではない。國家の元首であるか國家の大官であるか國家の當路者であるので『國家の』である、國家其ものではない。昔は主權者を國家其ものだと考へたこともあるが、今日はサウ考へる人は殆どない、又た事實さうではない。誰人かの心に於て決定される意思であるから其れは個人意思である。其個人の意思が直ぐに國家の意思を決定すると誤りのない場合もあるが誤りのある場合もある。だから成べくは多數の苟くも國民になつて居る者の意思をそれに參加せしめて萬全を期するのである。國家と云ふ人格は大體個人を包含して出來た人格であるから、其の意思も成たけ全人格を包含した意思でありたいのである。であるから國家意思の決定に人民が參與するのは決して國家意思の自決性

を害するものではない。其の代りに決定した國家の意思は自決的に發動しなければならぬ。若し其を妨げれば、其こそ今日の勞働者よりもモッとひどく、他人決定的にしてしまふ事となるのである、決定した意思は自決的の自己の力を以つて發動するのでなければならぬ。「國家が一たび定めた意思を自決的に發動せしむる行爲は卽ち行政である」。普通の解釋では行政とは人民を取扱ふ事、上から下に臨む事、人民を治めること斯う說いて居る。幸ひに日本の字は『行政』と云ふ大變に良い字を使つて居る。誰が考へたか知らないが、此の位良い字はちよつと考へ附かない。政を行ふ國家が自から行ふのである。『政』と云ふ日本の言葉も大變適切な言葉である。西洋の government と云ふ言葉よりズッと宜しい。西洋の『ガヴァーン』govern と云ふのは人を抑へつけることである。『ガヴァーン』すると云ふのは、支配する抑へつける意味である。『まつりごと』は『言海』には『奉事の義、君命を受けて其職に仕へ奉る意を元とす、延べて『マツロフ』(服從)と云ふも是なり。祭るも神を齋ひ奉る意なり』とあつて、英語の『アドミニスター』と略ば同じことである。抑へつけると云ふことは事實上やつたことはいくらもあるけれども、成たけさう云ふ事は考へたくない云ひたくないと云ふ傾向が餘程あつた。言葉の意味は政を行ふ國家自からが行ふのであつて、人を抑へつけるとか人を治めるとか人をどうとかすると云ふことは、其の手段として當然附いて來るが、其れは目的ではない。國家自からが一つの人格者、自決的の人格者、誰れ人にも掣肘せられない人格者として行ふことを云ふのである。一たび決定した意思を自分の存在の爲めに自己人格の發展向上の爲めに發動するのである。

國家意思發動の機關

國家が其の意思を發動する卽ち行政をする行爲は、國家自からがやるのでなく夫々の機關にやらせる、これが國家機關、行政機關である。唯だ行政のみの機關ではない國家機關であるけれども、其のする事は卽ち行政であるから、之れを行政機關と云ひ或は行政廳と云ふ。一體行政廳は行政廳ばかりではない國家廳である、石川縣なら石川縣と云ふのは決して石川縣の行政ばかりの廳ではなく、石川縣と云ふ所に於ける國家の仕事を引き

受けてやるところである。けれども國家のやる事は行政であるから行政廳と云つて差支へはない。行政とは國家の意思の發動の全部を含むことになつて居るからである。そこで國家が人民に對してやることは、いつでも國家の憲法――其の憲法が變ることはある、段々時勢によつて變りもするが――兎に角與へられた時には、其の時の憲法によつて其の時の有らゆる「行政の機關によつて」やるのである。

人格の充實と國民人格の充實

其の行政卽ち國家の意思の發動は何を其の對象として居るか。國家自己の意思の發動ではあるが、國家自身の意思の發動は國家を形づくつて居る各人民各個々人に向ふのであつて、各個々人が其の對象となる、對象は個人の生活である。其對象に對して何をするかと云ふと其個人の各人格を充實し、各人格生活を充實することによつて、國家自からの人格を充實するのである。此の點に於ては國家意思の發動も個人意思の發動も同じことである、何れも自分の人格を充實するのである。個人は個人だけでは已むことなく共同生活を作つて居るから、他人と合同するけれども、若しも我々の力が無限にあり外界の自然が無限にあるならば、他の人格に何も關係なく自分の人格だけで進んで行き得る(但し事實上之は出來ない)。ところが國家と云ふ人格は其れ自からの存在が澤山の人格國民全部の人格を以つて成つて居るものであるから、自分の人格の充實は國民の人格の充實を外にして期することは出來ない。それを離れては眞の人格の充實はない。一軒の家一つの家族も國家のやうな一體を成して居る。然し家としての生活もあるが家長としての生活もあつて、必ずしも家族の人格を充實しなくとも家長の人格を充實し得る。細君を非常に虐待して子供には不味い物を食はせて祿々敎育をしないでも、親父さんだけは大變偉い詩人になつたとか軍人になつたとか大發明をしたと云ふ例は隨分ある。家庭を無茶苦茶にして置き妻や子供を薄命に泣かして置いても隨分立派な學者であり藝術家であつた例もある。藝術家などは其方が良い位に考へて居る人さへある。家の家格はそれが爲めに滅びるけれども、個人の人格は必らずしも他の人格の充實完成を條件としない。これは甚だ嫌やなことであるが、其の位個人人格は極めて自己中心的のも

のある。ところが國家と云ふ人格は全然其の反對で、國民の人格の完成をしなければ自己の人格の完成も何もないのである。

行政の第一義

行政は元來は政を行ふことで、國家自己の意志の發動であるけれども、其の對象は國民であつて、其對象に對して何を一番主もにやるかと云ふと國民の生活を充實し國民の人格を進めることをする。そこで西洋の言葉で『アドミニストレーション』或は『フエルヴアルトング』と云ふやうに『世話をやく』と云ふことが主になつて來た。行政と云へば人民に對して命令をしたり監督したり指導することだと普通解釋するやうになつた、之は事實左樣である。さうして居ることが卽ち自から國家自身の生活を充實することになるから其れを專らやる。一軒の家長は家族の人格の充實ばかりで、自分を抛つて置いたら立派な子供は出來るかも知れぬが、親父は駄目になつてしまふ。國家はさうではない、國家は子供や家族を十分に充實してやれば、卽ち自分が充實することになる、此の點が大いに違ふのである。

利己的行政は國を滅ほす

然るに時としては國家が其の意思の發動を全く自分の爲めにのみやり、少しも國民の人格の充實を眼中に置かないこともある。此くの如き場合に國家は形に於ては生きて居るが、實に於て死んでしまつて居ることがある。古へから國が亡びるには大抵其の徑路を取つて居る。だから長い時期に涉つてそんな事は出來ない。どんな壓制的暴君と雖も、どうしても國民の人格の發展には力を用ゐなければ國家は續いて行かない。古へから亡んだ國家も澤山ある、否大抵國家は亡んで居る、歷史上にズツと亡びないで續いた國家は、それこそ日本を除いて他には餘り見つからない。唯だ法理上に於て國家は無限の生活を有つものとして居るだけであつて事實は亡んで居る。又其の代り新しいものも始終起つて居る。其の亡んだ場合は大抵國家が極めて利己的になつて、全然個人と同じになつてしまつたか――勿論それればかりではない、外敵の爲めに亡ぼされた場合もあ

るけれども、多くは自己のみに行政を集中してしまつたからである。若し社會をすつかり滅ぼして國家にしてしまつて、何でもカンでも國家にしてしまふと云ふ、西洋で云ふ國家主義なるものが實現せられるとなれば、それは卽ち國家が死滅する時である。國家主義ぐらゐ國家に取つて恐ろしい敵はない、まだ社會主義の方が良い。何故ならば、社會主義は實行出來ない、國家主義は實行しようと思へば出來る、それだけ恐ろしい敵である。近頃に於て最もよく此の道理を說明して居るものは佛蘭西である。佛蘭西の國家は十八世紀から十九世紀に亘る僅かな間に何遍も死んだり生きたりして居る。佛蘭西と云ふ地理的の國は始終あつた、佛蘭西人は居つた、けれども佛蘭西の國家は何遍も生きたり死んだりした。今ある佛蘭西の國家だつて又た何時死ぬかも知れぬ。我々日本人から云へば殆ど想像にも附かない事である。

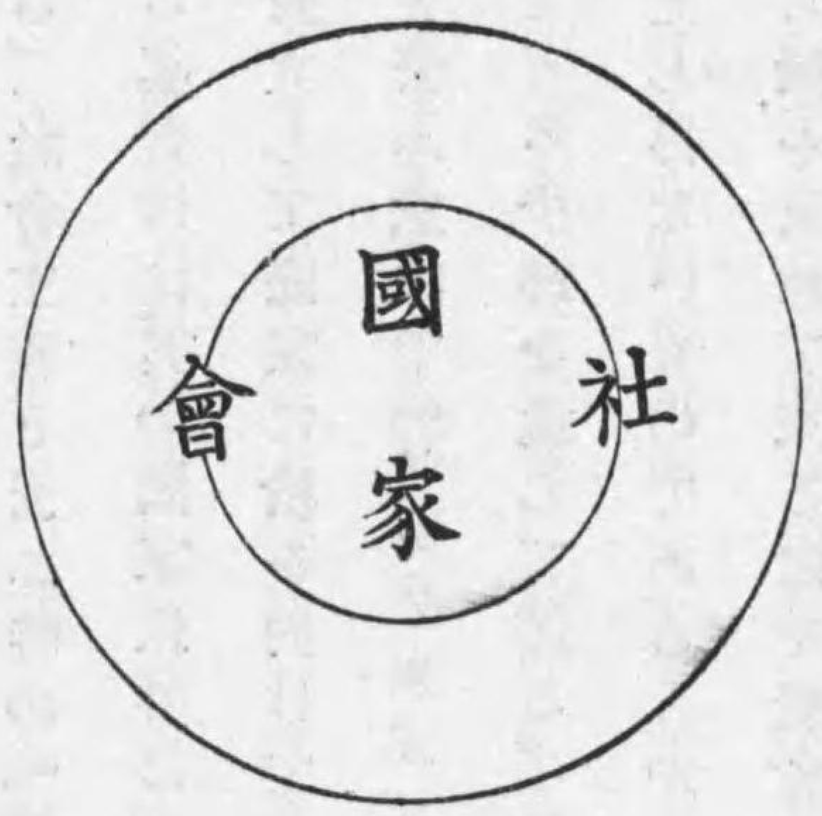
「人格充實の爲めの第一の任務」

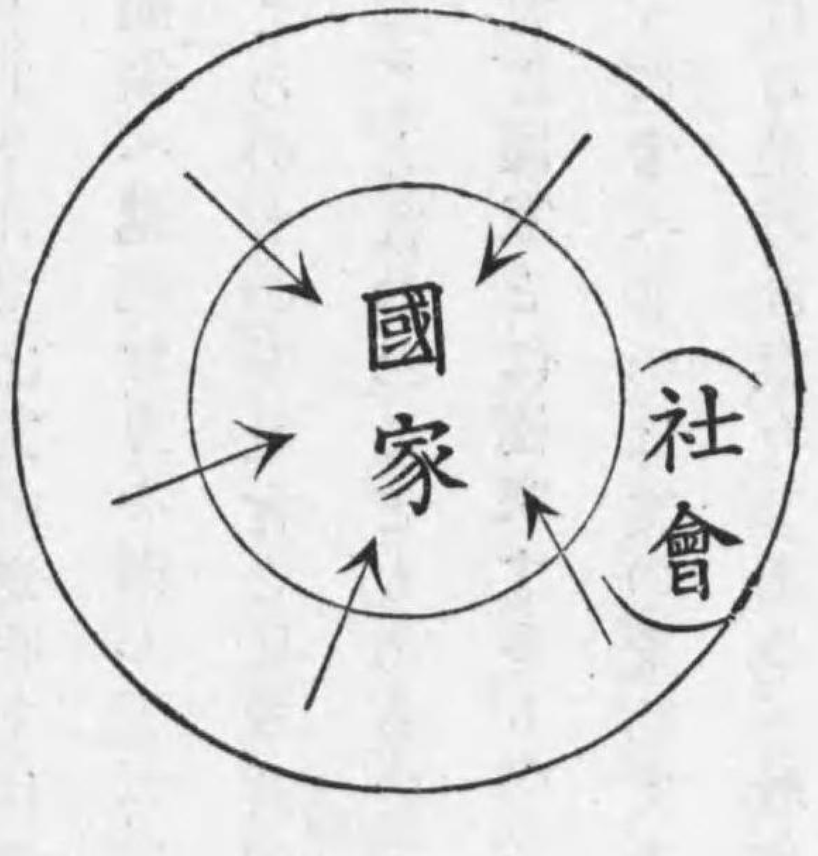
各人の人格を充實する爲めに國家の行政は色々な事をする、又しなければならない中に何が一番先きに來る具體的の仕事かと云ふと、國民の經濟生活を充實することと是れである。所謂「衣食足つて禮節を知り倉廩實ちて榮辱を知る」である。個人の人格を完成し隨つて國家の人格が完成するには、個人の物質的生活を先づ安定しなければならぬ。安定したばかりではいけない物質生活が益々擴張して行くやうに、より充實するやうにしなければいけない。そこで國家の仕事の一番先きに來る仕事は、殖產興業と云ふ名前の下に行はれる場合もあるし、さう云ふ名前は執らなくとも、兎に角國民の經濟生活の爲めに心配することと是れである。他の方面から云ふと、國民をして成べく財の生活の壓迫から免れしめて、國家なる共同生活の中に居ることの長所を發揮せしめること是である。人間は財の生活の壓迫から免れる爲めに、共同生活は是非しなければならぬものであるが、其の生活の中でやはり財の生活は絕えず個人を壓迫して居るから、其れを成べく免れるやうに國家が心配してやる。さうして各個人をして其の人格生活を充實せしむるやうにしてやるのである。これはどんな壓制國どんな專制國でもやつて居る。支那では洪範の八政の第一の要目として食と貨、人民の食を足し人民の貨物を充實することを擧

けて居るが、これは決して支那ばかりではない。支那はそれを大變早くから一つの政治學、政治哲學に形づくつて示しただけであるが、何處の國でもそれをやつて居る。

社會に於ける非人格性

ところが國家が其仕事を始めると直ぐに之を妨碍し、之れに對抗するもの、國家をして不本意なる事、國家の本質に合はない事をやらせるやうな大きな力が起つて來る。個人が自分は惡い事をするつもりでなく賄賂を取らうなどとは思つて居ないけれども、意思がフラ／＼ッとして或る錯覺から賄賂を取つてしまふが如く、國家は自身の本質其の存在から云へば、國民の人格の充實完成が何より望ましい事であつて、其第一前提として經濟生活の充實、財の生活の壓迫から免れしめるやうにする爲めに主力を注いでやつて行く實際又たやつて居る。其のやつて居る中にそこに妨碍が起つて來て、橫道へ引つ張られることが起つて來る。其れは我々の共同生活に於ける非人格性の力是れである。社會が國家に對抗するやうに見えるのは、實は社會が國家に對抗するのではない。國家の外に而して社會の中にさう云ふ對抗者があるのである。之れを判り易く圖に描いて見よう。





此の大きい方の圓で現はしたものが人間の共同生活卽ち社會である。其の中の最も良いところを國家が占めて居る、之を小さい方の圓で現はして置く。國家が非常な力を以つて發達して行く時には周圍から妨碍が起らない（上圖）。唯だ時あつてか此國家に對して妨碍が起る。其の妨碍は必ず國家から見れば外來のものである、外から來るもの

であつて內在的のものではない。何故ならば、國家其のものは自己人格の充實を國民人格の充實によつて實現するものであるから、其の中に矛盾はありようがない。矛盾は外から來る外來的の色々の槍が入つて來る、卽ち下圖の如くである。其の入つて來るものは飛でもない所から飛び込んでやつて來るのでなく、やはり人類の共同生活の中から起つて來る。社會主義と云ふ時の『社會』は——今日では其の意味では無論ないけれども——或る場合には、其の國家以外にあつて國家へ飛込む力を稱して云つたことがある。國家に對立して國家に槍を向けて行くところのものを社會と見る、其の社會を本位とする主義と云ふ意味で『ソシアリズム』Socialism と言つたこともあるのである。其使ひ方は今日でも多少跡を遺して居る。卽ち社會と國家とは衝突するものであるとか、兩者は到底兩立し得ないものであるとか云ふやうに考へるのは其の遺物である。國家に對して外から槍を入れて來る、之を社會と名づける是れは誤りである。社會は國家も國家以外のものも凡て共同生活を包括した全體である。國家以外のものを社會と云ふのは誤りで、之れは『國家以外の共同生活』と名づく可きである。「ソコデ共同生活の中には一方に國家、他方には之れに妨碍を與へ攻擊を加へる力との二つがあるのである。其妨碍を與ふるものは他のものではない、個人生活に存すると同じものが、共同生活に於て繰返されて居るのである。卽ち個人に於ては人格性と非人格性(或は自然性)とが互に相衝突して居ることを前に說明した。共同生活に於ても同じで、人格性に對して非人格性が妨碍を爲すのである。社會に於ける人格性は卽ち國家である。其外から來る妨碍は非人格性、自然性である。人格が完成しようとするのを抑へて、後と戻りをさせよう其の進步を後らせようとする非人格性が社會にある。其れが時としては著しく國家の內に入つてしまつて、國家の要部は外來の力の爲めに占められることがある。」佛蘭西から英吉利へノルマン人が攻め込んで來て、英吉利の要部をノルマン人が取つてしまつた、其の爲めに英吉利の言葉の中にはノルマン人の言葉が大分ある、又た英吉利の風俗習慣の中にもノルマン風が入つた。英吉利は亡びはしないけれども、元との純粹の英吉利ではなく、ノルマン化した英吉利になつてしまつたのである。或る特定の國家に外から入り來る力が非常に蔓こつて、其の國家の本來の面目を著しく或は全く蔽ふてしまふ場合もある

のである。

非國家的の力

其の外來の非人格性は何と名を附けるべきか、まだ定つた名稱はない。社會主義はそれを『階級關係』Klassenverhältnis と名づけて居る。階級と云ふ形になつて外來して來る場合には其でも宜しい。又た之れを漠然と社會關係と云ひ、或は主として經濟上に起ることであるから經濟關係とも稱することがある。私は『非國家的』Ausserstaatlich の力若くは『反國家的』Gegenstaatlich の力と云へば宜いと思ふ。日本には『非國民』と云ふ言葉がある、何か國に對して忠實でないことをやればあれは非國民だと云ふ其言葉が大變に適切だらうと思ふ。非國民とは國民ではないのではない、國民であるから非國民と云ふのである。英吉利人が日本の徴兵を免れる爲めに指を一本切つたつて、これは非國民的行爲とは云はない。日本の國民が指を切つたり眼の中に砂を抛り込んで近眼を裝ふて、日本の徴兵を免れ樣とするときは非國民的行爲となる。國民であるから非國民である、國民にして而して國民らしからざる者と云ふ意味である。非國家的の力も左樣である、國家に起つて來る力であるが、國家其のものゝ存在を害し或は脅かし、之れに反する力であるから、之れを非國家的の力と云ふのが適切と思ふ。

經濟上の利害關係に現はる

其れは大抵經濟上の利害關係の形を取る。前に申した民業の蹂躙壓迫と云ふやうな口實をよく看板にして出て來るものである。然し時あつてか政治上の力となつて出て來ることもあり、政黨の形に於て出て來ることもあり、或は勞働運動の形で出て來ることもある。時によつて色々な形を取るが、非國家的であることは共通である。國家の存在の要義は國家の內に起つて來る——國家の外から出て來て而して國家の內に頭を擡けて來る、此の非國家的の力を排除して、全然之れを根絕することを要求する。其れが國家を純粹なる國家、理想の國家にする所以であるが、今日何れの國家と雖も、其れは十分出來て居ない。多い少いの違ひこそあれ、非國家的の力が中からボツ〱と出て來て、國家の

發達は其爲めに或は害せられ或は脅やかされて居る。社會政策は先づ此處に向ふ。此の非國家的の力を取去ることを圖る。「根本的に取去ることは今日まだ中々容易に考へられない。或は考へるだけは出來るけれども實行し得るやうに考へられない。仕方がないから部分的にやつて居る。姑息ではあるが部分的にやる外はない、社會政策の狙ふ所はそこである。」

所有が非國家的の力となる

「非國家的の力はなぜ經濟生活の上に一番能く明かに分つて來るかと云ふと、前申す通り經濟生活には其活動の爲めに利己心が無ければならぬ。利己心とは各人が外界の自然を其の惰眠から打ち破つて、人間の用に立つやうにさせようと云ふ意思である。其の意思が強いほど利己心が強いことになる。」ところが今日の文明社會に於て、外界の自然を支配するは唯だ外界の自然を支配するのみでなく、外界の自然の支配を通じて他の人格を支配することになる。」勞働する外に食べて行く途がない者財産の無い者は他人の財産を借りるからそれが爲めに人格を抑へられる。抑へる方の人から云へば、他の人格を抑へ得るのは自分がものを有つて居るからである。或人が一つの地所を有つて居る、之れを貸して呉れと云つて來る中々貸してやらない。さうすると地代を餘計拂つても宜いからどうか貸して呉れと云つて來る。地代を少し增したぐらゐでは貸さない、中々鼻息が荒いから、借りたい方では色々な事を云つて頭を下げて來て終に借りる。さて借りて見ると地借である一方は地主樣である、地代を拂つて借りて居るのだから、本來は對等である譯だけれども、地所を借りて居るが爲めに、其の人に對しては社會上一目置かなければならぬ。今日の工業制度に於て勞働者を資本主が雇つて働かせる場合には、前にも述べた通り意思までも悉く資本主から與へる。資本家が自分と同じ人格を有する國民で、國家の眼から見れば全く同じ平等忠良なる臣民である勞働者に對して、俺はお前の雇主であるぞと云ふ橫柄な大きな面の出來るのは何であるか、其人が物を有つて居るからである。外界自然の物を支配して居り、其の支配を通じて其の物が無ければ働けない人を支配することになる。人間は物の支配を受けることは段々免れて來たけれども、

物を通じて他の人間の支配を受けるやうになる、卽ち支配階級被支配階級の關係が起つて來る。

所有慾、支配慾、權力慾

個人人格の充實の爲めには外界自然の物を支配し、外界自然の物を惰眠から覺まして、人間の用の爲に働かしめるを要する。其爲めには外界自然の物を支配し之れを完全に自分の權內に置かねばならぬ。人間は永い間外界の自然を支配する必要に迫られ〱て實に目ざましい工夫をしたと同時に、其爲めに一種の支配根性が人類に永く植ゑられた。自分以外の物を支配しようとした念が、すべて自分以外の物を支配しようとすることになつて、支配心が大變強くなつた。之れを權力慾と云ふ、權力慾とは支配心の强い形である。一體物を有ちさへすれば宜いのであるから物慾、財慾だけで人格の滿足は得られるのであるけれども、物慾を充たす爲めにはどうしても支配しなければならぬから支配慾がくつ附いて來る。支配慾はやがて權力慾になる。なぜ權力慾になるかと云ふと、所有者は物の支配を通じて人を支配するやうになる。他の人を支配することは卽ち權力關係である。同じ支配する中でも成たけ良いものを支配したい、成たけ良いものを自分の權力の下に置きたいと云ふ念が强くなつて來る。何が一番人間の支配慾を充たすかと云へば、有りと有らゆる物の中一番尊い產物、神の造れる物の中で最も尊いものを支配するのが權力慾を一番多く充たす所以である。神が造つた一番尊い物は何であるか、其れは自分と同じ人間である。自分と同じ人間を支配する、是れ程支配慾を滿足せしむることは無い。馬や犬や土地を澤山有つて居るより、人間たる僕婢を澤山有つて居ることが、其の人の偉さを示す所以と考へられた時代がある。金持は必要もないのに人を餘計使ひたがる。高い給金を出して僕婢を雇つてそれに金モールなどを着せて馬車の前に並べて揚々と威張つて步く。貴人だつて一人で步いて宜いのだけれども、何だか僕が附いて居ないと貴人らしく金持らしくない。そこで用も無いのにゾロ〱人を引つ張つて步く。朝鮮へ行つて見ると――此頃はどうか知らぬ、私の行つたのは二十年ばかり前であるが――地方の微小なる官吏と雖も苟くも官吏である

と、其の人は必ず從者の三人や五人は伴れなければならぬ。私は當時の朝鮮政府の旅行免狀を貰つて方々の郡衙を訪ねた、供を連れないで一人でトボ〳〵鞄を提げて行つたが向ふで信用しない。ところが向ふの役人が答禮の爲めに私の宿屋へやつて來る時分には、四人舁ぎの駕籠に乘つてお供の二人三人も連れて、やはり昔のやうに「下に居れ下に居れ」と云つてやつて來る。日本でも昔はさうであつた、小さな一萬石位の大名でも何人かのお供を連れて「下に居れ〳〵」と云つて通る。それで大變偉さうなつもりで居つた、又た人民もさう云ふ人が來るとこれは偉い人だと思つた。それが今日は段々無くなつてしまつた。然し歩く時には從者は連れないが、やはり平生自分の家には澤山人を雇つて居ることが、其の人の權力慾を充たす所以であることは餘り變らないようである。

產業上の支配に對する反抗

一體產業を經營して行くに、必ずしも人を支配しなければならぬ事ばかりではない。尤も人を支配しなければならないこともある。例へば工場を經營するには勞働者に命

令を與へ、勞働者は其の命令に服從して吳れるのでなければ、事業がうまく行かない場合もある。けれども其の必要以上に或は其の必要の全然ないところに無闇に人を支配したがり、嚴重な作業規定などを拵へて、現業の必要より遙かに多く勞働者をウンと抑へて、お前達は雇はれ人だ俺は雇ひ主であるぞと、所謂威嚴を示すことを大分やる。抑々勞働問題勞働紛爭の始めは之れに反抗して起つたのである。賃銀を上げて吳れとか時間を短かくして吳れとかは、十七世紀から後に起つて來たことである。其れより二百年前の十四世紀から十五世紀にかけて、歐羅巴では勞働爭議が段々起つて來た。其の時分の係爭の問題は何かと云ふと、雇ひ主が威張つた顏をするからいけない、と云ふような待遇の問題待遇の爭議である。勞働者が覺醒して來ると、今までは唯々諾々としてやつて居つたけれども、一體そんな譯のものではない、成程自分は雇はれて賃錢を貰ふけれども、雇ふ方の人も自分が働いてやらなければ事業が成立たない利益が上がらない、必竟兩爲めぢやないか、こつちばかり有難うございますと云ふ譯はないと云ふように段々覺めて來て反抗するようになつた。

滑稽な支配慾

ところが社會には他の人を假令一分でも三分でも宜いから、自分の權力の下に置きたいと云ふ念は餘程深く沁み渡つて居る。最も滑稽な例を云へば、鞄一つ位持つて居る人が自分でそれを持つてヒョッと汽車に乘れば宜いのに赤帽が居ると「赤帽ッ」と呼んでそれを持たして、五錢ばかりやつてチョッと偉さうな顏をする。たつた一分間か二分間赤帽を使つて俺はえらいぞ、俺は唯の貧民ぢやないぞと自己滿足をする。本當に重たくて仕樣がなくて賴むならばそれは當然であるけれども、小さな鞄一つ位何でもない、自分で持てる唯だ皆がやるからやはりやる。これは極く無意識に殆ど習慣的になつて居るが、さう云ふ事は澤山ある。殊に日本の商店、銀行、會社などの事務の擧がらないのは其點が餘程關係がある。チョッとした書類などを持つて行くつまらない用事でも、「子供ッ子供ッ」と給仕を呼んで居る。給仕はあつちに行つたりこつちに行つたり始終やつて居なければならぬ。そんな事はチエック・システムか何かで飛んで行くやうにすれば宜いのに、やはり一々「子供ッ子供ッ」と呼んで居る。要するに人を使つて見たい念は餘程強く人間の間に擴がつて居る。

反抗漸く加はる

一方又た之れに對する反抗も餘程強くなつて來て居る。所謂勞働問題の中にはそれか大分入つて居る。今でも大分入つて居る。同じ事でも少しやり方を變へさへすれば、必ずしも事業の利益を削ぐ必要もなくて、解ける事でもそれが爲めに解けない。例へば此の間の神戶の勞働爭議に、勞働者の代表者が川崎或は三菱の當局者に會ひたいと云つたところが、お前達には何とか會と云ふ名義では會はないと拒絕した。それから東京まで出て來て、何某事務取締役に會ひたいと云つたらこれも何とか云つて會はない。又たは足尾の勞働者の代表者が東京へ出て來て主人に會ひたいと云つたら、これもあつちへ行つたりこつちへ行つたりして逃げて居つて會はない。それは人を支配しようと云ふ考へが知らず識らず累して居るのである。會つたからとて勞働者が嚙みつく譯でも何で

もない、話を聽いていけなければいけないと云へば宜い。或は直ぐ答をしなくともよく考へて置かうと云つても宜い。兎に角會つたつて宜い、會へばそれは大變感じが違ふ。それを會ふと何だか威嚴を損するやうに考へて、社長などは奧深く控へて居なくてはいけない、勞働者や下級の者は追つ拂つてしまはなければいけないと云ふ念が餘程ある。それが日本の所謂勞働爭議の中にはまだ中々くつ付いて居る。マァ會つて見たら宜い、然る後に喧嘩になるならばこれはどうも仕方がない喧嘩ならば會つても居られないけれども、喧嘩になるかならないか其の前に會つて見たら宜い。さうすれば存外早く解決するかも知れぬ、それを會はないと撥ねつけるものだから、勞働者の方では段々不平が高まつて來て妙な感じを持つ、そこへ煽動者が入つて來るとワーッとやり出すと云ふやうなことになる。そればかりでは無論ないけれどそんな事が隨分ある。これは決して日本ばかりではない、英吉利にだつてあるけれどもそれは餘程少い。英吉利人だつてさう虛心坦懷勞働者を全然自分と平等に視て居りはしない、けれども看做さざるを得ない樣になつて居る、少くとも形の上で左樣するやうになつて居る。形の上でも宜い其の內には段々實が備はつて來る。

人格の尊貴を損ず

權力慾の發現は個人の人格の尊貴を毀つけるものである。人格が發展するにはお互に尊重し合はなければならぬ。尊重するとは之れを認識することである。人格を人格として認めなければならぬ。人を人と見て道具と見ないと云ふことが先づ第一の必要である。人を人と見たとて其の取扱ひはさう大して違はないかも知れない。やはり今まで通り厭やな仕事をして貰はなければならないかも知れぬ。急に勞働者の苦痛を減らして樂に仕事の出來るやうにとは今日は出來ない相談である無理な註文である。けれども譯なく出來るだけの事はせねばならぬ。譯なく出來る事とは何かと云ふと人を人として尊重することである。ところが其れが中々行はれて居ない、行はれて居ないから、其れが國家生活の上に社會生活の上に、人格と人格の要求とを否認しようとする色々な力となつて現はれて來る。これが社會に於ける鬪爭の原因となる。

『社會的』てふ考の發見と其意義

「其の鬪爭の當事者は今日では階級である」。而して階級と云ふ考へに就いて、最狹義の『社會的』と云ふことが發見されたのである。此の發見は何時頃なされたかと云ふと、十九世紀の始め千八百三四十年頃である。何處の國に於て發見されたかそれは佛蘭西である。それ迄は今日云ふ社會政策とか社會事業とか云ふ意味の『社會』と云ふ特別な限られた意味、卽ち本篇の一番始めに述べた特別な或る深い意味を有つた『社會的』と云ふ考へはなかつた。何故其ことを特に玆に述べるかと云ふと、世の中には隨分無茶苦茶なことを云ふ人がある。社會問題などは昔からあつた、歐羅巴では希臘、羅馬の時分から社會問題はあつた、否日本の德川時代に社會問題があつた――德川時代はまだ宜いが――足利時代に社會問題があつた、王朝時代に社會問題があつたなどと言ふ人がある――三浦周行博士の『國史上の社會問題』と云ふ本は多少其嫌がある――が其れは間違つて居る。其の時分にあつたのは其の時代の社會上の問題である、今日謂ふ意味の社會問題では斷じてない。此の社會問題と云ふ關係に於て云ふ特別なる『社會的』(獨逸語で Das soziale)の眞義は何であるか。一面から云へば、それ迄は世の中がそんなにセチ辛くなつて居なかつたのでもあり、又たそれ程世の中が進んで居なかつたのでもあるが、其の特別なる社會的と云ふことが見出されたのは、前に描いた下圖の發見である(七二三頁參照)大きい圓の全體が人間の共同生活、其の眞中に――必ずしも眞中とは限らない、橫の方に行つて居るかも知れぬが一番良いところであるから眞中に置く――國家が大部分を占めて居る。其殘れる部分を社會と云つたことがあるが、それは實は社會ではない此の全體が社會である。そこで此の全體の社會から國家を引いた殘れる部分殘部が、特別な意味を有つて居る社會的『ダス・ゾチアーレ』となる。英語では社會全體に關することも『ソーシアル』Social と云ひ、今の特別な意味の社會的と云ふ事も『ソーシアル』Social と云ふが、獨逸語ではそれを區別して使つて居る。社會全體に關するときは獨逸語では『社會』と云ふことを『ゲゼルシアフト』Gesellschaft と云ふ、之に『リツヒ』lich を附けると形容詞になる、そこで社會全體に關する時には『ゲゼルシアフトリツヒ』Gesellschaftlich と云ふ。

社會問題、社會政策と云ふ時の特に限られたる社會と云ふ場合には『ゲゼルシアフトリッヒ』と云ふ字を使はない。英語の Social を獨逸化した『ゾチアーレ』Soziale と云ふ字を使ふ。これは嚴密に區別して居る、學問上ばかりでなく普通にも區別して居る。此の方が良い、英語でもさう云ふ區別が附くと宜いと思ふ。尤も全く工夫がないではない。或る社會學者の如きは獨逸語の『ゲゼルシアフトリッヒ』に當る時には『ソーシアル』と云ふ字を使はないで、『ソシエタル』Societal と云ひ、社會學と云ふ時には『ソシオロジー』Sociology と云はないで『ソシエトロジー』Societology と云ふ。そんな變な字まで工夫して使ふ人もあるけれどもそれは一般ではない、獨逸では一般にチャンと區別して居る、事實又た違ふのである。社會全體に關する事は大體國家的である唯だ其の殘りがある。其の殘りは元とはホンの殘り物として取扱つて宜かつたけれども、此れが段々國家に肉薄してポン〳〵槍を放つやうになつて、迚も閑却して置けなくなつたので、特に之れを『社會的』と云ふのである。これで本篇の最初に申した、今日云ふ社會問題、社會政策に於ける『社會』と云ふ語が、特別な意味を有つて居ることが分るだらうと思ふ。

社會運動と階級運動

それは何から起つて來たかと云ふと社會運動から起つて來た。『社會運動』Social movement とは社會に關して起つて來る總ての運動を云ふのではない。社會に起つて來る總ての運動と云へば、世の中の事總ての事皆さうである、何の運動でも皆社會に起つて來る、然しそれは社會運動とは云はない。社會問題と云ふは總ての問題を指して云ふのではない。此く社會問題とは特に或る意味を有つものであることは、實は私が說明しなくとも認められて居る。社會事業の講習會を開くと云へば、特に社會事業に興味を有つ人は、社會事業とは社會に於けることを何でもカンでもゴタ〳〵やる譯でない事は、大體承知で居られるに相違ない。此の特別の意味に於ける社會的と云ふ考へは社會運動から起つて來た、其れは千八百三四十年頃に佛蘭西に於てゞある。社會運動は畢竟するに階級運動である、社會的と云ふ事は階級と云ふ形に於て出て來た。其階級は何であるかと云ふと、段々申したところの他の人格を支配する者と、他人によつて自分の人格を支配せら

れて居る者、これが別々の階級として分れて來た、卽ち「支配階級と被支配階級」である。支配階級は必ずしも資本主に限るのではない、被支配階級は必ずしも勞働者に限るのではないけれども、支配階級の中堅となつて居るものは資本主である。資本主と云ふことは必ずしも金を持つて居ることではない。唯だ資本を有つて居る人卽ち資本主ではない一體資本主と云ふ言葉は不適當である。資本を有つて居り資本を有つて居るが爲に多數の人を勞働者として雇ふ、他人を雇傭して之を自分の事業に使ふ人が資本主である。多數の人を雇つて之れを自分の事業の爲めに働かせようとするには、其の人を人格的に支配せねばならぬ。善いも惡いもない事實として支配せねばならぬ。だから『人格支配階級』と云ふのが一番適切である。それから勞働者だつて働いて居る者が皆所謂勞働問題の當事者たる勞働者ではない。勞働者の中で前に申した自己決定勞働者でない他人決定勞働者、卽ち他人に雇はれて何をすべきかどうすべきかを、一々命令を受けて唯それを實行するに止まる雇傭勞働者だけが問題になる。何故かと云ふと、他人の意思を受けることは卽ち自分の人格を抑へられる、否抑々人格の據つて立つ根本たる意思の發現に於て既に制限せられるから、大變な束縛を被むつて居るのである。だから勞働階級と云ふより寧ろ『人格束縛階級』或は『人格被支配階級』と云つた方が宜いのである。言葉が惡いからそんな言葉は度々は使はないが、意味を明らかにする爲めにはさう云つた方が宜い。

ブルヂオアとプロレタリア

千八百三十年四十年頃に於て佛蘭西では、此の人格支配階級のことを『ブルヂオアジー』Bourgeoisie と云つた。一體ブルヂオアとは市民、都市の民と云ふことであつて、何も特別な意味はない。それを主として社會主義者が特別の意味に使つた。一番最初に特別の意味に使つたのはルイ・ブランと云ふ社會主義者で、其を獨逸の社會主義者殊に今日の社會黨の學祖たるカール・マルクスが佛蘭西に居る時分に學んで來て、盛んに獨逸に輸入して振り撒いて、今では世界中に擴まり日本でも此の頃は頻りに流行り出して來た。ブルヂオアの語根の『ブールグ』Bourg は、石垣で圍まれた城と云ふことである。昔の西洋

の都市は皆城壁を繞らして其の內に市街がある。日本は殿樣だけ城壁の內に居つて人民は外に居る、敵が攻めて來れば一番先きに人民が塀になつて之れを防ぐ、人民の塀が潰れてから石垣が衞る事になる。西洋では人民を石垣の內に入れて置いて人民と殿樣が共同に防ぐ。此人民を內に入れて城壁を以つて圍んだのが『ブールグ』都市で、さう云ふ特別な殿樣の保護の下に、城壁によつて繞らされて安全なる生活を送つて居る人々をブルヂオアと呼んだのである。ところが其れが一つの特權になつてしまつて、それが爲めに地方の農民を蔑すんで、ナンだ貴樣等は百姓だ土百姓だと云ふやうに威張るやうになつた。其れが轉じて勞働者に對して資本主たる人々を呼ぶ名前になつてしまつたのである。ブルヂオアに對してブルヂオアの爲めに人格を支配せられて居る人々をプロレタリア Proletariat と云ふ。これはプローレスと云ふ語から傳來して居る。『プローレス』Proles は子供と云ふ事で、つまり子供を產む外に能のない人と云ふことである。日本では此頃之れを無產者と譯すが、實は無產者ではない多產者である。『貧乏人の子澤山』で子供を產むことによつて國家に奉仕する人々である。殊に戰爭を度々やる時分には、兵隊を澤山產んで吳れることは最も必要で、是非さう云ふ專門家がなくてはならぬ。そこでプロレタリアと云ふ言葉も初めは必ずしも輕蔑した意味ではなかつた。けれども段段子供を澤山產んでは、どうしても生活が苦しくなるから、他人に對して貧しい者である、そこで貧しい者と云ふ意味に使はれるやうになつたが、千八百三四十年頃の佛蘭西では、何も財產がなく唯だ勞働をする事によつてのみ生きて行く人々、それが爲めには他人に雇はれなければならない、卽ちブルヂオアに雇はれなければならない人々のことを、プロレタリアと云ふやうになつた。そこで資本家對勞働者と云ふことをブルヂオア對プロレタリアと云ひ、自分が物を有つて居る爲めに、其の有つて居ると云ふことを以つて他人を雇つて、自分の所有の財產を通じて他人の人格を支配して居る人々をブルヂオアと云ふのである。唯だ金がある丈けではブルヂオアではない、金はあつても人を雇はない者はブルヂオアではない。此のブルヂオアとプロレタリアが二つの階級として對抗することを千八百三十年、四十年頃にかけて佛蘭西で見出した。此の事實は英吉利及獨逸にもあつたけれど

も、佛蘭西のやうに其の對抗が當時未だ甚だしくなかつた。佛蘭西に於ては段々甚しくなつて來た。

支配關係の擴張

今日となつては苟も人智の發達した文明國では、何處へ行つても事業は益々大きくなる。資本を餘計投ずる事業であればある程、他の人格を支配することがより多くならなければならぬ。無用に支配するばかりでなく、必要上他の人格を多く支配しなければならぬ。規模の小さい工業であれば、勞働者は一體これは何の爲にどうなるかを始めから終りまでズッと見通すことが出來て、自分が之れを拵へて此れが出來たと云ふ事が分るけれども、今日の大きい工業になつては、分業が非常に發達して仕事が細かく分れて來る爲めに、各個人の勞働者のすることは一體何をして居るのか少しも眼には見えない。大きな軍艦を一艘拵へる、一人の職工がコツ〳〵板を叩いて居る、自分の叩いた板が何處にどうなつたか分らない、勞働と勞働の結果がまるで絶緣してしまつて、譯の分らないことになつてしまつた。だから方向が附かない。如何に意思を働かせたくとも働かせる餘地がない。勞働者は極く局部の事をやつて居る、全體を見通す計劃には勞働者は全然與かることは出來ない、與かると云つたつて與かれない、夫々專門の難かしい、科學の知識を有つて居る技師長、工場長、或は支配人がそれを知つて居るのみで、各人は可なり相當の勞働者に至るまでも、全體から云へばホンの僅かな部分に當るのみであつて、自分の意思を仕事の計劃の上に働かせる餘地も何も無くなつてしまつた。各人は皆唯だホンの小さな部分に當るのであるから、皆が絶對に命令に服從して貝れるのでないと、一つ狂つた日にはは全體が無茶苦茶になつてしまふ。非常に緻密な、非常に複雜な仕事をするのであるから、作業規定が嚴密に行はれるのでなければならない。他の言葉で云へば、徹底的に勞働者の人格を支配するのでなければ仕事が出來ない。賃銀が少いとか待遇が惡いとかは、之れを具體的に現はしたに過ぎない。無論賃銀の少い爲めに生活が脅かされることも重大な問題には相違ないけれども、抑々根本に於て此の解け難き矛盾があるが爲めに、問題が重要になるのである。